
指輪

黎界のノマド another story

ういろう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

指輪 黎界のノマド another story

【Nコード】

N5761M

【作者名】

ういろう

【あらすじ】

その朝イエリが目覚めて最初に思ったことは「やってしまった」だった。明らかに二日酔いの気だるい頭、知らない部屋の知らないベッド、そして彼の隣に眠るのはよく見知った人物、イエリの直属の部下で、しかも彼の親友が愛した女だった。

後に黎界と呼ばれる世界で竜種とともに生きる人々の恋物語。

序章

ヤルノは塔の上から平原に沈み行く夕陽を見ていた。クリュエタの壁に囲まれた町の中からは、この塔の上まで登ってこない限り、町の外に広がる平原に沈む夕日を見ることができない。ヤルノは狭い壁の隙間に身をうずめるようにして腰をおろしていた。いつのころからか、なぜかは分からないけれど彼は夕陽を見るのが好きだった。嫌なことや悲しいことがあっても大地に溶けるように沈んでゆく太陽を見つめていると、不思議と気持ちが楽になるのだ。

「やつぱり、ここにいたのか」

突然かけられた声に頭だけふり返ると、一人の青年が狭い梯子を上ってくるところだった。いつの間にかヤルノの身長を追い抜いてしまった彼の親友は、鐘楼に頭をぶつけないように身をかがめながら窓際までやってきて、少し呆れたようにヤルノを見降ろした。

「またそんなところに挟まって。そのうち抜けなくなって日干しになっても知らないぞ。」

「ひとをヤモリかなにかといっしょにしないでくれ。」

お前はそんなことを言いにはわざわざここまで登ってきたのかとヤルノが皮肉言つと、彼の親友はわざとらしく眉をしかめて見せた。

「なんだ、せっかく忠告しに来てやったのに。煙とバカは高いところが好きだつて言うからな。」

「翼竜乗りに言われたくないね。」

間髪いれずに言い返すと、相手は一瞬目を丸くして、次の瞬間には「違いない。」と笑いだした。親友の笑い声を聞いてヤルノもつられたように笑い出してしまった。

二人はエウロニア王国正規軍の白騎士団に属する翼竜乗りだ。

いったん翼竜に乗れば、こんな塔など豆粒ほどにしか見えない空の上を風のように飛び回る。だが、そこから見える景色は圧倒的で、すべての翼竜乗りはその空の高みを愛しているといっても過言ではない。普通の感覚を持った人間から見れば、彼らは命知らずのバカの集まりだろう。

「日干しにならないよう水分は補給しとけよ。」

ひとしきり笑った後、彼もヤルノのとなりの窓際に挟まるようにして腰をおろし、片手に下げていた薄緑の瓶を一本投げてよこした。

弧を描いて飛んできた瓶をヤルノは危なげなく片手で受け止め、器用に窓枠の端で栓を抜いた。

「守る物のために」

「守る者のために」

互いに目の高さまで瓶を掲げると翼竜乗り独特の祈りを捧げる。瓶に口をつけると程よく冷えた甘酸っぱい林檎酒が、ヤルノの渴いたのどを癒していつてくれた。瓶越しに見える太陽はもう半分ほど地平に隠れてしまっていて、その最後の弱い光が薄黄緑色の宝石のようにきらめいてみえた。たがいに何をいうでもなく黙って夕陽を見つめる、その沈黙が今のヤルノにとっては心地よかった。

「今日はすまなかった。」

太陽が完全にその姿を地平線の向こう側に消した後、ヤルノはぽつりと吐き出すように言った。向こうにいる彼の親友はかすかに身じろぎしただけで顔は地平線を向いたままだった。

「おまえがいなければ、俺は今頃ここにはいなかった。」

大げさではない、今日の戦闘で彼がかばってくれなければ、「冗談ではなくヤルノはここにいないどころか二度と夕陽を見ることのできない身になっていたはずだ。」

「けど。」

けれどそうだ、一歩間違えれば。

「俺は、俺の代わりに誰かが傷つくところなんて、もう見たくない。」

「一步間違えれば自分は親友を失うところだったのだ。あの瞬間、ヤルノが感じた恐怖は自分の死への恐れ以上のもの、また自分のために誰かが傷つくという恐怖。小さいころからたくさんの人に守られその犠牲の上にある自分の命、身分以外に何のとりえもない自分を変えたくてここにいるのに、また守られ、何かを犠牲にしている自分という存在への恐怖。」

「いつの間にか目を伏せていたヤルノの頭の上に、かたくて冷たいものがゴンと当たった。驚いて顔を上げると、目の前には彼の親友の顔があった。どうやら彼が片手に持った空きびんでヤルノの頭を小突いたらしい。かすかに残った薄明りが彫の深い彼の顔に長い影を落としていたが、その表情はすぐにわかるくらい真剣で怒っていた。」

「また、しょうもないことを考えているんじゃないだろうな。」
「たぶん彼の言うところの「しょうもないこと」を考えていたヤルノは答えに詰まった。目の前にいる青年はきつい表情を変えることなく続ける。」

「他の奴のことは知らないが、少なくともオレはおまえがお貴族さまだから助けた訳じゃないぞ。自分の親友が危ない目にあっている、オレはそれを助けられる場所にいたから助けた。それだけだ。」

「また同じことが起きれば何度でもそうするし、それが間違っているとは思わない。」

「そこで彼はちよつと言葉を切って、少し目を和らげた。」

「だって、お前もおなじことをするだろ？ 違うか？」

「ヤルノは驚いて相手を見つめた。それからふいにつんと鼻の奥が痛くなって、涙がこぼれそうになった。どうしてこいつは、この親友はいつもヤルノのほしい言葉がわかるのだろっ、どうしてこんなに簡単に闇から自分を救いあげてくれるのだろっ。」

「そう、だな。」

涙なんか見せるのは悔しくて、でも嬉しくて、突っかかるように答えたヤルノに、彼の親友はやっといつもと同じ様に、人を小馬鹿にしたように片方の口を上げて、いたずらっ子のように笑い、右手を突き出してきた。その腕には真新しい包帯が痛々しく巻きつけられていたが、ヤルノの目に留まったのは彼の中指にはめられた銀の指輪だった。

「約束だ」

卒業するときに親友同士で校章のリングを交換して、永遠に友であり助け合うことを誓う。彼らの母校の伝統のような儀式だったが、二人にとっては命をかけた大切な約束だ。

「お前の言うべき言葉は『すまない』じゃないだろう。」

いわれて、ヤルノは自分が一番言うべき言葉をまだ言っていないことに気がつき、自分も右手を差し出した。

「助かった。ありがとう。」

二人のこぶしの間でたがいの指輪がぶつかってカチリと音を立てた。

序章（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

小説初投稿ですが、よろしく願っています。

その朝イエリが目覚めて最初に思ったことは「やってしまった」だった。

明らかに二日酔いの気だるい頭、知らない部屋の知らないベッド、そして隣でシーツにくるまれて眠る女。あれだけ飲んだにもかかわらず、昨夜自分が何をしたかイエレはすっかり覚えていた。

ああ、これは言い訳なしのコースだ。カーテンの隙間から洩れてくる薄明かりが、夜が明けて間もないことを教えてくれる。職業柄長年身にしみついた習慣とはいえ、こんなときにもすっかりいつもの時間に目覚めてしまう自分がこの日ばかりは恨めしい。

イエリはゆっくりと身を起こすと隣を見降ろした。今日に限ってはそこにいるのが、まったく見知らぬ人物であつた方がどれだけ救われるかわからない。が、現実としては隣にいるのは眠っていても誰とすぐにわかるほどよく見知った人物、有り体にいえばイエリの直属の部下で、しかも彼の親友が愛した女だった。

イエリが自己嫌悪の嵐に陥っている間に、隣で眠っていた女、ライサが唐突に目を覚ました。寝起きがいいのも彼らの職業柄だ、ぱつと目をあけたライサは隣にいるイエリを見上げ二人の視線がばつちりと会う。何とも言えない気まずい雰囲気から先に立ち直ったのはライサだった。

「おはようございます、隊長。」

普段職場でかわすのとまったく変わらない声色であいさつして、ライサはベッドから起き上がると、寝ぐせのついた短い金髪をワシワシヤとかきまぜ、「シャワー浴びてきますね。」と一言、シーツを巻きつけるわけでもなく立ち上がり、一糸まとわぬ姿のまま大股で

歩いて奥の部屋へと消えていった。そんな彼女の余りにもあつからかんとした態度に、イエリは茫然とその後ろ姿を見送った。

イエリ・ライティオ、男29歳。彼が所属するのはエウロニア軍でも花形の白騎士団、「飛竜隊」の三番隊。彼は3年前からその隊長を務めている。

飛竜隊と言えば国内はもとより世界中にその名を知らない者はいないだろう。神速を誇るアスカロンの大騎竜隊、幻想的なフォンファンの水竜隊、最強と言われるゴンガザの巨竜隊。それでも数こそ少ないがエウロニアの飛竜隊ほど美しく壮麗なものが他にあるだろうか。飛竜隊は文字通り騎士団が翼竜に騎乗して空を飛ぶ飛行部隊だ。両翼を広げると12エムにもなる翼竜が、その薄く透ける翼をひろげて三角形の編隊を組み大空を滑空していく、その姿は子供たちのあこがれであり、すべてのエウロニア人の誇りだった。

イエリは全部で六番までである騎士団の最年少隊長の一人で、ゆくは騎士団隊長にもと将来を囑望されている。その気さくさと面倒見の良さから部下からの信頼も厚い。一方のライサ・グリスは彼とおなじ3番隊に所属している。身軽さが求められる翼竜乗りには比較的女性が多いが、5歳も年下で見習い時代も含めれば10年近い付き合いになる彼女を、イエリは今まで信頼できる部下という以外の目で見えたことはなかった。ひとたび遠征に出れば、男も女も関係なく、一つの天幕で肩を寄せ合って眠ることも少くないのだ。連携が重要な翼竜部隊はイエリにとっては大きな家族のようなものだった。もちろん軍の中には、地位にかこつけて部下に手を出しているものなど掃いて捨てるほどいたが、イエリはむしろそういう人種を軽蔑のまなざしで見ていた。はずなのだが・・・

扉を開ける音がして、考え込んでいたイエリが目を上げるとシャワーから上がってきたのだろう、タオルで髪を無造作に拭きながらライサが部屋に入ってきた。いつもの訓練用の軍服のパンツに上半身は晒一つ、髪からはまだぼたぼたと水滴が垂れている上に口には歯ブラシをくわえたまま、というこれ以上ないというぐらい色気のない恰好だった。彼女の引き締まった身体が驚くほど柔らかかった事とか、イエリの腕の中でどんなに切ない声で彼の名前を呼んでいたのかとか、そんな事が幻想のように頭の中から流れ出して行ってイエリは思わずため息をつきそうになった。ライサの方はそんな彼を見て何を思ったのか、口から歯ブラシを引き抜いて少し笑った。

「隊長もよかったら、シャワーどうぞ。」

やけどしそうに熱いシャワーを浴びると少し頭がすっきりとした。とりあえず一度してしまった行動を取り消すことはできないし、10代の盛りのついた少年でもないのだから、酒に酔っていましたすみません、などと言える話ではない。意を決しシャワーを止めると浴槽から外に出た。

いつの間にかライサが置いていったのだろう、浴室の扉には真新しいタオルとハンガーにつるしたイエリの服が掛けられていた。いちばんいい正装の軍服を脱ぎ捨てるような真似をしないだけの理性は残っていたのだろう、皺もなくシャキツとした礼服を見て、少しホッとすると同時にまだ右腕についたままの黒い喪章が目に入ってきて、イエリの胸ににぶい痛みがひろがっていった。

白騎士団の名を拝する飛竜隊は、その軍服を見れば一目でわかる。通常の軍服に加え、訓練用、正装すべて白を基調にしたもので、その軍服に袖を通すこともまた彼らの大きな誇りだった。特に式典用の正装は、真っ白の上下に、空に溶けるように鮮やかな蒼色のサツシユと外套、銀モールの飾りという出で立ちで、一部から「仮装」と揶揄されるほどだ。実際、昨日の葬儀ですらっと並んだ彼らは、その内情とは裏腹に場違いなほど華々しく見えた。

さすがに詰襟の上着は着る気になれず、ズボンとシャツだけを身に付けイエリは浴室から外に出た。騎士団管轄の独身宿舎は、台所と食堂が一つになった部屋に、寝室、浴室と物置がついているだけのものだったが、大部屋暮らしの一般の兵士からすれば騎士団員はずいぶん優遇されているはずだ。この部屋がここまで簡素に見えるのは、この飾りつけのなさからだろう。家具や敷物などはすべて落ち着いた色の無地のもので統一され、女らしい飾り物や、花の鉢植え一つ無駄なものは置いていない。辛うじて目に留まるのは、窓際に積み上げられた大量の分厚い書物と、壁にかかる白と蒼の団旗ぐらいだろうか。いかにもライサらしい部屋だと、イエリは思った。

当のライサは、台所でこちらに背を向け料理をしていた。何かが焼ける音と、珈琲を入れる芳ばしい香りがただよってきて、イエリは急に自分がどれだけ空腹かを思い出した。彼の気配に気づいたライサはちよつと振り返り

「今、朝食にしますからそこに座って待っていてください。」と手に持った匙でテーブルを指した。何か手伝おうかと口に出しかけて、自分がライサと一緒に台所に立つという光景がどれだけ滑稽かを思い出し、イエリはおとなしくテーブルについて待つことにしたが、手持無沙汰でついついライサの後ろ姿を追ってしまう。

台所に立っていてもライサはいつものようにきびきびとした無駄のない動きをしていた。

こんな風に、女が料理をしてくれるのを待つのはいつ以来だろう。ふと胸によぎった甘くくすぐったい感覚は、あいつ、ヤルノもこんな風に彼女の後姿を見ていたのだろつかという想像に掻き消された。傷口の上に何か重いものを押し付けられるような鈍い痛みがまた広がっていく。

1 - 1 (後書き)

早速ですが、読みにくいので修正しました。

ヤルノ・コレルはイエリの親友だった。何があっても相手を裏切ることもしきれない、彼のためならば自分の命をかけることも厭わない、そう思える唯一の男だった。

第一候にも選出されたことのある大貴族コレル家の長男であるヤルノとイエリが初めて出会ったのは初等学校のころ。血のつながりはないのに、背格好や顔立ちがそっくりな彼らはよく兄弟と間違われるほどで、なぜか初めて会ったときから気があった。それ以来、もう腐れ縁としか言いようがないだろう、高等学校、軍、飛竜隊とずっと同じものを目指し、同じ道を歩んできた。戦場で背中を合わせて戦ったこともあった、宿舎を抜け出して夜遊びするときも、別部隊の奴らとけんかになった時もいつも一緒だったし、彼らの友達は彼らのことを悪友同士と呼んではばからない。

イエリが三番隊隊長、ヤルノが六番隊隊長とたがいに役職に就くようになってからは、忙しさもあって前のように頻繁に会うことも少なくなっていたが、それでもイエリにとってヤルノがかげがえのない親友だということに変わりはないかった。

そんなヤルノが珍しく真剣な顔で「お前の部下と付き合っている」と打ち明けてきたのはもう2年近く前になる。その相手が男勝りで有名なライサだったことも意外だったが、なにより遊び人として名をはせていたヤルノが珍しく本気なのに驚かされた。本気の親友を応援しない男はいない。それから二人がうまくやっていたのはそばで見えてよくわかった。ヤルノに会えば必ずと言っていいほど惚気話を聞かされたし、どこか投げやりに人生を送っていたヤルノが、驚くほど柔らかい顔をするようになったのは、イエリにとっても嬉しいことだった。ひと月前に二人があんな別れ方をする

までは。

ちょうど竜種の活動期で、イエリもヤルノも王都をあけることが多かった時期だ。話はヤルノから直接聞いたわけではなく噂として部下から流れてきた。それは心無い噂話がどれだけ広がっているかをよく物語っていた。だから久しぶりに飲み誘った先で、ヤルノが疲れ果てた顔で「落ち着いたらくわしく話す。」と言ってきたとき、イエリは何も聞かなかった。ただ、いつものように馬鹿話をして、二人ともが酔いつぶれるまで大騒ぎをして飲み明かした。結局それが二人で飲んだ最後の酒になった。

机の上に隙間がないほど並べられた皿の数にイエリは目をみはった。焼いたベーコンやハム、何種類かの卵料理、ソースのかかった茹で芋、豆のスープ、チーズ、野菜に果物。ライサは最後にパンが山盛りになったかごを机の真ん中に置いた。

「食べましょう。」

席に着くなり、自分の皿に取り分けた目玉焼きをズブリと突き刺し大口を開けて食べ始めた彼女をイエリはあきれ顔で見ていたが、やがて自分もパンを手に取りその上にハムとチーズを乗せて口に入れた。「おまえ、いつも朝からこんなに食っているのか？」

イエリの素朴な疑問にライサは少し驚いたように目を瞬いて、しばらくしてから口の中のを飲み下すと、また少し笑った。

「まさか。」

新しく、スクランブルエッグとベーコンを皿によそいながら彼女は明るい口調でつづけた。

「ここしばらく、ろくに食べてなかったので、なんだかものすごく

おなかが減ってしまつて。」

ここ1週間で見るからにやせ細ってしまったライサの前に、情けないことに返す言葉が見つからず、イエリは黙ったままスープをぐるぐるとかきまぜた。軍名物の豆スープは、缶を開けて温めるだけ、栄養価が高く味もそれほど悪くないすぐれものののだが、見た目は仲間内で「スライム」と呼ばれるような代物だ。薄緑色のでろりとしたそれをスプーンですくって口にしたイエリの手がふと止まった。

「あれ、なんか美味しいな、これ。」

見た目は変わりが無いのに、いつもより格段にうまい。ライサがちぎったパンにバターを塗りながら、ちよつと得意そうに言った。「でしょう？ 隠し味にデイルを使つんです。二日酔いにもいいですよ。」

「へえ。」

素直に感心して、イエリはまた続きを飲む。そういえば、何か食べ物がつまいと思ったのはいつ以来だろう。ライサと違い食べるには食べていたが、体力を維持するため義務的に、何の味も感じない塊を無理やり流し込んでいるような感じだった。代わりに酒は浴びるほど飲んだが。

1週間前のヤルノの死は二人のすべてを変えてしまっていた。

それから二人で朝食と無言で格闘した甲斐あって、あれほどあった皿は見事に全部片付いていた。イエリは片づけをはじめようとするライサを「休んでいろ」と押しとどめて、皿洗いをすませた。ついでに珈琲を淹れなおしてふり返ると、ライサは頬杖をついてどこか焦点の合わない目で窓の外を眺めていた。すつと通った鼻筋や、影を落とす長いまつげ、仕事中には見せない物憂げなライサの

横顔は、イエリが一瞬ドキツとするほどきれいだった。

「珈琲を入れた。」

平然を装って、イエリは白いカップを二つ机の上に置いて自分も椅子に腰かけた。

「ありがとうございます。」

イエリのほうに向きなあったライサは、もういつもの様にきりつとした表情に戻っていた。それでも、彼女と向かい合わせで座っていることに今更ながら居心地の悪さを感じて、イエリはカップを傾けながらさりげなく窓のほうに顔を向けた。

いつの間にか、外は雨が降り始めていた。向かいにある建物が灰色にかすんで見える。一年の半分近く冬將軍が居座るこの北国で、雨が雪に変わるのもそう遠くの話ではないだろう。しばらく静かな部屋に、白く曇り始めたガラスに当たる雨粒の音だけが響いていた。手に持った珈琲のカップだけがやけに熱いのが感じながら、イエリはやつと重い口を開いた。

「昨日の夜の事は、」

すまなかった、という前にライサが早口でさえぎった。

「昨日の夜は、ありがとうございます。」

予想しなかった台詞に、イエリは驚いてライサを見つめ、彼女はそんな彼を見つめ返して、今度はゆっくりと言葉をつづけた。

「私ひとりでは、耐えられませんでした。隊長がいてくださらなかったら、どうかなっていたと思います。本当に、感謝しています。」

彼女の眼差しはどこまでもまっすぐで、イエリに謝罪の言葉を口にすることを許さなかった。ああ、やっぱりこいつは強い女だ。

イエリの大切な親友は、街を救った英雄になつて無言で歸つてきた。知らせを聞いてから、そして国葬として執り行われた葬儀の最中も、ヤルノがもうこの世にいないという実感はわいてこなかった。白と青の正装で身を固めた飛竜隊が二列に並んで花道を作る間を、ヤルノの棺がゆつくりと運ばれて行き、やがて4頭の翼竜に釣りあげられ空高く舞い上がっていつてもやはり涙一つこぼれてこない。だが、まるで霧がかかつているようだったイエリの意識は聞こえてきた罵声によって、現実に引き戻された。

「この、悪魔っ！」

イエリ達があつけにとられている間に、髪を振り乱して駆け寄つてきた女の手が大きく振りあげられ、派手な音があたりに鳴り響いた。一拍置いて、イエリが理解できたのは隣に立つライサの顔を女がひっぱたいたということだった。

「おまえが、おまえがつ。」

また女の手が降りあげられる、が当のライサはそれをよけるどころか、微動だせず胸を張りまっすぐ前を向いたままだった。ライサの反対側にいた騎士が女を止めようと動きかけたのを、すでに状況を飲み込んだイエリは眼で制した。葬儀の終わるまで、直立不動のままここにるのがイエリ達飛竜隊に与えられた任務だ。ライサ本人がそれを望む限り、イエリがそれを妨げることはできない。

もう一度、頬を張る音が聞こえたが、それは先ほどより弱いものだった。重いものなど持ちあげたこともないのだらう、美しいが、細く弱いその女の手では、兵士として鍛え上げられたライサがよろめくこともなかった。

「お前のせいだ。」

なおもつかみかかつていこうとする女を、後ろから壮年の男性がようやく止めた。

「やめなさい。」

何の感情もこもっていない声で押し止める男の腕を振り払おうと、女は醜い唸り声を上げ暴れ続けた。これが、あのいつも憎らしい

ほとつんと澄ましているコレル夫人だろうか。イエリは自分でもわかるほど冷たいまなざしで、親友の母親を見つめた。いつも、人を見下したように細められている目は、血走って狂気の色に染まっている。夫の腕の中でやっと暴れるのをやめた夫人は、その目をライサに向け、ふるえる手で彼女を指差した。

「お前が、息子をたぶらかしたんだつ。お前が、ヤルノを殺したのよ！」

直立不動を保つライサの顔が、死人よりも蒼白になっていった。

イエリは目の前にいる醜い女を殴り倒したい衝動を抑えるために、爪が食い込むほどこぶしを強く握りしめなければならなかった。

「ヤルノを殺したのは、自分達だろう。」そう叫び返せたらどれだけ楽だろう。ただライサの身分が低いという理由だけでヤルノとライサを別れさすために、自分だけだけ汚い手を使ったかこの女は忘れたのだろうか。どれだけ二人が傷ついたか、心の中に闇を抱え続けていたヤルノを追いかんてしまふぐらい傷つけてしまったか、この女は気付いているのだろうか。

「この、悪魔め。お前が、死ねばよかったのに。」

手を上げるよりも、自分の言葉のほうでライサを傷つけられると気がついたのだろう、夫人はヒステリックな口調で罵声を続けていた。そのひきつった顔が笑っているようにさえ見える。

イエリは自分の自制心の限界を感じていた。周りにいる仲間達から、殺気にも似た空気が流れ始めている。ただ、真つ直ぐ前を向き続けるライサの心情を思いやって、彼らは微動だせずそこに立ち続けていた。

「コレル夫人。葬儀の場です。それくらいにしておかれてはいかがですか。」

緊迫した場に似つかわしくない、穏やかな声がした。声の主を振り返って睨みつけた

夫人の眼が、一瞬怯えたようにさ迷う。

「王太子殿下。」

見事な白金色の髪を持つ物腰の柔らかそうな男は、しかし、そこにいるだけで場の空気を変えてしまう王者の風格を持ち合わせていた。今日彼は、王族として壇上に立つのではなく故人の学友として葬儀に参列していたはずだ。後ろにいたコレル氏が慌てたように一礼をし、放心した妻を引きずるようにその場から去って行くのを、表情を変えずに見守っていた王太子だが、彼をよく知る者からすればそのまなざしが静かな怒りで揺らめいているのが簡単に見て取れた。

やがて、彼はイエリと目を合わせてかすかに頷き、その隣のライサを心配そうに見やってから、従者を引き連れてその場を立ち去って行った。隊の誰かが、大きく息をつく。イエリは隣のライサを盗み見たが、彼女は今にも倒れそうなほど蒼白のままだった。だが、それから葬儀の終わるまで彼女は涙一つ見せることなく耐えぬいた。

今、イエリの目の前に座るライサは、つきものが落ちたように穏やかな顔をしている。確かに昨日の夜、酔いつぶれた彼女をここまで送ってきたイエリを引きとめたのはライサだ。だが、それまで何の感情も見せなかった彼女が、イエリの腕の中ではじめて涙を流したのを見たとき、すがりつく彼女を抱きしめてそのぬくもりを感じた時、救われたのはイエリのほうだった。自分のほうこそ一人では耐えきれなかった。たとえ昨夜二人の間にあつたのが恋愛といった感情からかけ離れたものであつたとしても、自分より深く傷ついているライサを、愛おしいと、守りたいと本気で思ったのだ。その思いが、イエリを深い喪失感から救い上げてくれた。礼を言わねばならないのは自分のほうだ。

イエリは空になったカップを机の上に置き、片手をライサのほうに伸ばした。その頬に触れかけて、ふと思いなおし、昔よくそう

したようにライサの頭に手を乗せ、短い乾草色の髪をくしゃくしゃにかき混ぜた。 当時は「子供扱いしないでください！」と拗ねたように頬を膨らませたライサだったが、今は少し困ったような顔でイエリのされるままになっていた。

「一人で抱え込むなよ。 辛くなったらいつでも言え。」

「ありがとうございます。」

イエリの手の下で、ライサは困ったような顔のまま少し微笑んだ。

イエリは執務室の机の上に置かれた封筒を睨みつけるように見降ろしていた。もし封筒に足が付いていたら、その身の許す限りの速度で走って逃げだしていただろう。イエリは同じまなざしのまま、その封筒を差し出した本人に目を向けたが、こちらは足があるにもかかわらず逃げ出さないだけの根性を持ち合わせていたようだ、静かにイエリを見返してきた。

「これは何だ、ライサ・グリス三等」

「ご覧になっている通りのものです。」

イエリは眉間に眉を寄せ、それまで見ていた書類をバサツと置くと、代わりに彼女のきれいな字で「除隊願」と書かれた封筒を取り上げて乱暴に封を切った。中には、「一身上の都合により云々・・・」教本に乗っているような正確かつ無難な文章が書きつづられていた。イエリは大きく息をつく、読み終わった紙を机の上に投げ捨てた。

「一年間の長期休暇、もしくは、三年間の休職をとるという手もあるが。」

「中途半端なことはしたくありませんので。」

間髪をいれず返ってきた予想通りの答えに、イエリはもう一度溜息をついた。

ここで、この封筒をつき返すことは簡単だ。だが、やる気のない人間を残しておくことができるほど、飛竜隊は甘いところではな

った。そういう人間は必ずと言っていいほど戦いから帰ってこられなくなる、そのことも良くわかっていた。なぜ、こうなる前に一言の相談もなかったのかと、相手をなじるような言葉が口元まで出かかったが、しかし、ライサが簡単に人に頼るような人間でないことも嫌というほど知っているではないか。頼ってほしいと願うのは、彼女のためではなく単なるイエリの願望でしかない。あの夜から1カ月、ライサが立ち直ってきていると思っていた自分は何と浅はかだったのだろう。

「よくわかった。」

長い沈黙の後、自分の体が氷のように冷たく重くなっていくのを感じながら、努めていつもと変わらない声でようやくイエリは告げた。

「ありがとうございます。」

ライサが深く頭を下げた。少し伸びた彼女の乾草色の髪がさらりと音を立てる。イエリは彼女から目をそむけ机の引き出しから取り出した紙にペンを滑らせ始めた。

「ここを出て、行くあてはあるのか？」

「一度故郷に帰ろうと考えています。」

騎士団を抜ければ当然宿舎からも出ていかなければならない。ライサの故郷はたしか首都から遙か南にある小さな街だ。だが、そこに帰る家はもうないと聞いたことがある。

「仕事は？」

「さあ、どうしましょうか。当分の蓄えはありますので、しばらく

くのんびりしたいと思います。　その後は、用心棒か売子にでもなりますよ。」

騎士団出身という名義があれば実際に仕事を探すのはそれほど難しいことではないだろうが、さすがに笑える冗談ではなくイエリはわずかに眉を寄せ、書き終えた書類にサインを入れ差し出した。

「後任の事だが、お前の補佐はパヌだったか。」

パヌはもう2年近くライサの補佐を務めているはずだ。　イエリ自身はなかなか見どころのある青年だと思っている。　ライサの答えも明確だった。

「竜騎士として十分な素質を備えています。　経験不足は時が補ってくれるかと。」

「分かった。　規定通り2週間の引き継ぎ期間の後、除隊を承認する。この書類を人事に提出して、詳しい指示を受けるように。　あと、ここにパヌを呼んでくれ。」

「ありがとうございます。」

また、ライサが頭を下げる音がしたが、早くも次の書類に目を通して始めていたイエリには、彼女がどんな顔をしていたか見ることはできなかった。　いや、見る勇気がなかったというほうが正しいかもしれない。

ボタンとドアがしめる音と、規則正しい足音が消えてからしばらくして、イエリは一行も頭に入らなかった書類を放り出して椅子に深く沈みこんだ。　個人的な感情を表に見せることなく、一上司として自分はうまく振るまえただろうか。　今身を渦巻くこの感情をイエリはよく知っている。　闇のような喪失感。　片手で顔を覆ったイエリの眼の裏に、懐かしい青年の顔が浮かんでくる。　最後に

会った時、別れ際に彼が言った言葉がよみがえってきた。

「俺では、力不足だったよ。ヤルノ。」

つぶやくヤルノの声はまるで泣いているようだった。

閑話

「イエリ！」

探していた人物を見つけヤルノは声を上げた。

この時間、訓練所から宿舎や食堂へ抜ける中庭は人通りが多かったが、他人よりも頭一つは大きい彼の友人を探すのは難しいことではない。ヤルノの声に気付いた長身の友人は足を止めてふり返り、夕日が当たったのだろうか琥珀色の眼をまぶしそうに細め、近づいてくるヤルノの姿を見つけてそのまま笑みに変えた。

「ヤルノか。どうした。」

「明日非番だろう。俺もなんだ。久しぶりにどうだ。」

そういつてヤルノが右手をグイッと上げて、ジョッキをあおるしぐさをすると、イエリはおつと嬉しそうに眉を上げた。

兵舎の食堂に行けばただで夕飯がでてくるが、量が多いのだけが救いといった兵食にももちろん酒など付いてこないから、美味い飯や酒にありつきたければ外に出なければならぬ。といっても騎士団員には割と自由に外出が許されていたし、その都度外出届けを書かなければいけない面倒はあるが、次の日が非番となれば若い彼らがたまにハメを外すのくらいは大目に見てもらえる。

「いいな。本当に久しぶりだな。これを人に渡さないといけなから、ちょっと待っていてくれるか。」

ヤルノに手に持った紙袋を少し上げて見せて、イエリは中庭をぐるりと見渡した。背が高いというのはこういうときにも役に立っらしい、あつという間にイエリは目当ての人物を見つけ出した。

「ライサ・グリス！」

人ごみの中で、小さな人影が驚いたように立ち止り、あたりをきよるきよると見回して手を振るイエリを見つけると慌てて駆け寄ってきた。白を基調とした飛竜隊の軍服の中で目を引く濃緑の制服。

イエリが呼び止めたのは一目でそれとわかる、騎士見習いの学生だった。乾草色の髪を弾ませて走りよってきた少年は二人の前で直立不動の体勢をとる。

「お呼びでしょうか。」

その硬さが何とも新人生らしくて、ヤルノは頬を緩めた。

専修校からの騎士見習い生は毎年秋から春にかけてやってくる。

受け入れているのは2番隊から5番隊の実働部隊なので6番隊に属するヤルノが直接彼らと関わることはなかったが、大人たちの間をちょこちょこ走り回る彼らが目に入ると、自分も昔はあんなふうだったのかと懐かしくなる。これが見習い3年目にもなると少しふてぶてしさも出てくるのだが、目の前にいる少年は明らかにこの秋初めてはいってきた1年生だろう。

ヤルノがそんな風に思っている間にイエリは手に持っていた紙袋の中をこそごと探つて、小さな瓶を取り出すとライサと呼ばれた見習い生にほり投げた。手の中にすっぽりと収まる茶色の小瓶を慌てて受け止めて「これは？」と首をかしげるライサに、イエリは少し意地悪い笑みを浮かべて言った。

「尻の薬だ。青あざになる前に塗っておけ。」

途端に、ライサの顔が耳まで真っ赤になる。「えっつ。」とか「うっ。」とか瓶を握りしめながらしどろもどろになるのを見て、ヤルノはやつとライサが驚いたことに少年ではなく少女だということに気がついた。

男女同じの制服に、短髪、ひよろつとして上から下まで真っ直ぐな体つき、顔を赤らめた表情を見なければヤルノでも判らなかっただろう。それにしても軍では性別の区別なく扱われるのが普通だが、仮にも女の子に対してその言い方はいかなものかと思う。

イエリのほうはそんなライサに一向にお構いなしで、先ほどの数倍はありそうな壺を取り出し彼女の目の前に突き付けた。

「こっちは野郎どもの分な。渡しておいてくれ。」

困惑した顔のまま両手で壺を受けとりながら、ライサはふとまだそばかすの残る形のいい鼻を寄せた。

「なんだか、すごい香りがしますね。」

「ああ、飛竜隊秘伝の軟膏だからな。涙が出るほどよく効くぞ。」

「・・・やっぱり、しみるんだ。」

消え入りそうなライサのつぶやきが聞こえてしまい、ヤルノは嘖き出すのをこらえるのに苦労した。

見習い生とはいえ、ここ飛竜隊に送られてくるのはほんの一握りの選ばれた優秀な生徒たちばかりだ。そんな彼らでも、通常の倍以上の大きさと力を持つ、飛竜隊専用の翼竜「ワイバーン」を乗りこなすまでには相当な訓練が必要になる。

要は、なれずに翼竜に振り回されているうちは、全身の筋肉痛はもとより鞍に当たる尻や内腿が擦れて真っ赤に腫れあがってしまうのだ。更にそれが擦りむけるほどになると、鎮痛成分の入った秘伝の薬はえらくしみる。十年に一人の逸材といわれたイエリも、今は最速を誇る6番隊のエースと呼ばれるまでになったヤルノにしても、この薬には随分とお世話になったものだ。

「飛竜隊の伝統だからね。この薬がいらなくなれば一人前つていわれるぐらいだよ。がんばって。」

さすがに、「同じ釜の飯」ならぬ「同じケツの薬」をつけた仲、なんて言われるぐらいだとまでは口に出せなかったが、ここは先輩としてかわいい女の子にフォローの一つも入れておかねばならない。

急に声を掛けられてライサはきよとした顔でヤルノを見上げた。

「まあ、お前は筋がいいから。すぐにこんな薬はいらなくなるさ。」

「イエリが珍しく優しい笑みを浮かべながらライサの頭に手を乗せて、彼女の短い髪をくしゃくしゃにかき混ぜると、今度はライサの頬がまた見る間に真っ赤になる。その様子には初めて彼女を見るヤルノでもピンと来るものがあった。」

「ありがとうございます。」

律儀にイエリとヤルノにぴよこんと頭を下げると、ライサは大事そうに薬の瓶を抱えて走り去って行った。

「お前なんて顔してるんだ。」

小動物の様な彼女の後姿を何となく見送っていたヤルノは、イエリに声を掛けられてわれにかえった。鏡を見なくてもわかる、自分はずいぶんニヤケタ顔をしているのだろう。

「いやあ。初々しいというのかな。新入りってあんなにかわいいものだったっけな。」

「かわいいなんて言っているのは最初のうちだけだな。あいつらを見てみると、たまに自分の方が小恥ずかしくなってくるぞ。」

「からかい半分のヤルノに、イエリがにやりと返してくる。」

「その割には、気を使ってやっているじゃないか。」

「んっ？ ああ、さすがに野郎どもと一緒に薬を使うのはかわいそうだろう。女だからって特別扱いはでないが、ガキといっても微妙なお年頃ってやつだしな。難しいところだ。」

でかでかと広告の書かれた薬屋の袋を握りつぶして弄びながら、イエリは苦笑いを浮かべた。

口ではこう言っているが、ヤルノは彼がライサに渡した小瓶にかわいい花柄が付いていたのを見てしまった。あいかわらず、細かいところには気の付く男だと思う。ヤルノもこの友人のこういうところには随分助けられてきたし、だから新人教育を任されたり、女にもてたりするのだろう。

そういえば、自分の同期にも一人女性がいたが、彼女はあの薬をどうしていたのだろう。自分達の教官がイエリの様に気がつく男でなかったことだけは確かだ。今度会ったときに聞いてみようか。

確実に怒り出して、自分の髪と同じように真っ赤になるだろう女友達の顔を想像して、確かにあいつは最初っからかわいいなんて言

う柄じゃ無かったよなと、ヤルノは思わず吹き出してしまった。

「なんだ、気持ち悪い。」

くすくすと笑い続けるヤルノを、イエリは言葉通り気持ち悪そうに半眼で見降ろしてきた。

「いや、ちよつと思いい出し笑いを。それより、どこに行こうか。」

「ステラの店はどうだ？ 長いこと顔を出していないし。」

「そつえば。」

行きつけの店の名前にヤルノもうなずいた。少し値が張るが、酒も食事もうまくていい女がいる。確かにここしばらく行っていないから、あの変わり者の女主人にお小言を言われるだろう。

「そろそろ、怒られるな。」

「ステラに、怒られるな。」

重なった声に二人は顔を見合わせ、声を上げて笑い出した。

その後行った店で「あら色男さんたち、もう私のことなんて忘れたと思っていたわ。」などと女主人に微笑みながらいわれ、二人はあわてて高めの酒を注文する羽目になった。親友と心行くまでうまい酒を飲みかわしながら、その日の小さな出会いを後から何度も思い出すことになるうとは、その時のヤルノには想像もつかなかった。

ライサの眼下には青くかすむ森がどこまでも広がっていた。「

青い森」とよばれるこの森は、三方を「神壁」とカレサレア山脈、エスタード湖に囲まれたエウロニア王国西部カウパ地方のほとんどを覆い尽くしている。ここが「青の森」と呼ばれるのは、北方の「黒い森」のように黒い葉の木が生えているわけではなく、この森を覆う青みがかった霧のためだ。森に生えるほとんどの木が油の多いユーカリマツやアブラシダの種類で、その木々から蒸発する油分で辺りの大気が青色にかすんで見えるのだ。

だが幻想的なまでに美しく豊かな森が、気温が上昇し雨が少ない夏から秋にかけては両刃の刃となる。乾燥した木の枝葉が風でこすれ合わさる、そのような簡単なことで油分を大量に含んだ木々は発火し、いたるところで野火が発生する。そのため、カウパ州都のタンペレにある辺境警備隊にとって朝夕の巡回飛行は何よりも重要な仕事だった。

やがてライサの視界に、青い森を切り取ったかのような、円形に続く灰色の壁が見えてきた。エウロニア第8クリュエタ型居住区、タンペレの街だ。500年ほど前、ここがエウロニア連合国の一つ、カウパ公国と呼ばれていたころの首都であったタンペレは、今のエウロニア王国でも6番目に大きな街として、かつての繁栄の跡を穏やかに残している。

街の周りを囲むクリュエタの壁は直径20ケムほど。北側の端には、このあたりでとれる石灰岩で作られた「はちみつ色の街」とよばれる、小さくも美しい街並みが広がる。ほとんどが2階建てまでの家が続く中、街の真ん中に立つ領主館と時台の鐘楼だけが夏の午後の光を受けて、長い影を落としていた。

建物があるのはその一角だけで、後の広大な土地には一面農地が広がっている。北国としては温暖な気候と、クリュエタの西に沿うようにして流れるターダ川から引かれる豊富な水は、この地に豊かな実りをもたらす。タンペレが農業都市として有名な所以だ。だが、この地の恩恵を受けるのはもちろん人間だけではない。「青い森」はエウロニアで「黒い森」に続く竜種の大生息地でもあった。タンペレの街を守るクリュエタの壁にはその街の美しさには似合つかない、血と汗の歴史が滲んでいる。それでも、この街と「青い森」を守り続けてきたというのは、ライサ達西方边境警備隊の大きな誇りだった。

ライサがこの街に移り住んで6年、警備隊員として勤め始めてから4年の歳月が過ぎようとしている。隣を飛ぶ部下に合図を送ってから、ライサは手綱を絞り、自らの乗る翼竜をゆつくりと降下させていった。

警備隊詰め所の中庭に、ライサは翼竜をゆつくりと着地させた。翼にあおられて地面から砂埃が舞い上がる。愛竜の首筋を軽くなでてやってから、ライサが翼竜の首の付け根にある鞍からいつきに地面に飛び降りると、ちょうど詰所の扉が開いて小柄な影が飛び出してきた。

「ライサ副長！ おかえりなさい。」

「ただいま、フレイ。」

駆け寄ってきた少年に、ライサは笑顔を向けた。去年の秋から警備隊で見習いとして働いている少年に、ライサはずいぶん懐かれてしまっている。憧れをいっぱいにためた瞳で見上げられると、少しくすぐったい気持になる今日この頃だ。

ライサはゴットリーフをかがませて鞍のベルトを手早く外しはじ

めた。ゴットリーフはライサ専用の騎竜で、翼に葉っぱを散らした様な斑点があるからそう名付けられたらしい。白騎士団にいたころの翼竜から比べれば半分ほどの大きさしかないが、彼は性格もおとなしく従順で扱いやすい竜だった。フレイに手伝わせてゴットリーフから重い鞍をはずしていると、後ろでドスンと重い音が聞こえ、砂混じりの突風がライサ達に吹き付けてきた。いつものこととはいえ、ライサが眉をひそめてふり返ると今まで一緒に飛んでいたケケが彼の翼竜を着地させたところだった。

「へたつぴつ。」

フレイが口の中に入ってしまった砂を吐き出しながら悪態をつく。

あまりにも的確な表現に一瞬吹き出しそうになり、さすがに見習いの先輩に対する暴言を許すこともできずライサはフレイを睨みおろしたが、子犬の様にしゅんとされてしまうとそれ以上怒ることもできない。フレイから鞍を受け取るとライサは後ろに向かって大声で叫んだ。

「ケケ！ 集中がまだ足りないようだな。外周20周して来いっ。」

「ちようど恰好をつけて鞍から飛び降りたところだったケケは、ライサの言葉にそのまま頭を抱えてうずくまった。性懲りもなく忍び笑いをもらすフレイにゴットリーフを託し、ライサは肩に鞍をかつぎ直すと自分もこっそりと笑いながら詰所の中へとはいって行った。」

「西方辺境警備隊」などと一応立派な名前をもらっているが、こは正規軍にも属さない小さな部隊で、「本部」などと冗談半分に呼んでいるこの建物も、隊の財政状況を映し出しているかのような慎ましいものだった。

中庭から入ってすぐの小部屋には壁一面に棚が取り付けられていて、竜鞍や防具、槍、その他さまざまなものが平然と並べられている。

ライサは鞍と外した防具を棚に置き、もうひとつの扉から詰所に

なっている大部屋に入った。

「副長。おかえりなさい。」

「おかえりなさい。ライサ副長。」

部屋のあるこちらから声がかかる。隊員は全部で27人いるが、今部屋にいるのは6人、2人は机に座り何かの書類を相手にし、残りの4人は隅の大机で珈琲を片手に談笑していたようだ。彼らに軽く頷いて、ライサは正面の壁の前行き自分の名前の下にある札を「巡回」から「在室」に掛け替え、巡回欄の「北・午後」と書かれた下の枠に大きく斜線を引いた。次にその横にある大きな地図に目をやるのはもう習性になってしまっている。そこにはカウパ地方の詳細な地図が貼られていた。白地のその地図に、異常を示す赤や黄の印が一つもないことを確認してやっと一息つくことができる。といっても、この部屋のまったりした空気からして判っていた結果だったが。

「お疲れ様です。」

ライサが自分の席に着くと、すぐに目の前に珈琲のカップが置かれた。

「ありがとう。ミラ。」

目の前の、ライサと同年代の女性がつこりと笑う。ライサ以外唯一の女性隊員である彼女は、柔らかな金髪のかわいらしさと美人がうまく混ざり合ったような人物だった。

隊員といっても事務や後方支援を主にするミラだったが、ライサを含め男くさい連中の中で唯一のオアシスで、彼女のこういった気配りは何よりも助けになる。もちろん、ここに勤めるだけあつていざというときは、大男でも叱り飛ばすような勝気な女性でもある。

「ケケは、また運動中？」

片手に余ったもう一つのカップを上げて意味ありげに笑うミラに、ライサは苦笑で返した。

「腕は悪くないはずなのだけれど。」

「あの、変にかっこつけるところさえ無ければいいのにねえ。」

「恰好をつけている相手がこれでは、ケケも報われないわね」

ケケが報われない思いを、この5歳も年上の女性に向けていることは隊の公然の秘密だ。その努力たるや涙ぐましいほどだったが、有望な若者にもかかわらずその一点に関しては残念な方向に空回りしていることが多く、ミラには未だ「可愛い弟分」にしか思われていないようだ。

「あら。だって目の前に、強くて、かっこよくて、優しくて、翼竜の扱いも一番って理想の君がいるんだもの。その辺の男なんてかすんじゃうわ。」

いたずらっぽく片目をつぶるミラに、ライサはやはり苦笑を返すしかなかった。

「そうそう、その理想の君に来客が来ているわよ。」

「来客？」

ライサは少し眉をひそめる。ここにわざわざライサを訪ねてくる人物など、あまりろくな心当たりがない。

「やっぱりあなたって隅に置けないわ。どこであんなに素敵な方とお知り合いになるのかしら。男前だし、身のこなしも優雅で気品があつて紳士って感じ。あの、声も素敵よね。でも何といつても、あの濃緑の瞳がたまらないわ。あの目で見つめられてみたいわね。」

ほとんどと怪訝な顔になっていくライサに耐えきれず、ついにミラは嘔き出した。

「ごめん、ごめん。冗談よ。さっきフィオネル様って方が都からいらっしやってね、確か去年の春先にも来られた方よ、今は上で隊長に捕まっているわ。」

思いがけない名前に、ライサは驚いて椅子から立ち上がった。拍子に、飲みかけのカップが派手に倒れて、こぼれた珈琲から避難させるためにライサとミラはあわてて机の上の書類を取り上げる。

両手に書類とぽたぽたと滴をたらずカップを持ったまま、右往左往するライサをみて、ミラはあきれたように笑うと、サツとその両方をライサから取り上げた。

「ほら、ここはいいから、行ってきた。」

「ごめん、お願い。」

いつも冷静な彼女にしては珍しく、ぽたぽたとあわただしく部屋を出ていくライサを、ほかの隊員たちは驚いたように見送っていた。

「何だか、逆に悪かったですね。」

ライサはふり返った。後ろには大きな紙袋を二つ、両手いっぱい抱えたフィオネルがついて来ている。好奇の目にさらされる詰所ではゆっくり話もできないと、隊長の言葉に甘えてライサは仕事を早退させてもらった。遠慮するフィオネルを半ば強引に家に誘ったものの、結局夕食の買い出しにつきあわせ、市場では肉屋の主人や八百屋のおかみさんにさんざん質問攻めにあい、拳句に荷物持ちまですせてしまつて申し訳ない気持になる。

「いえいえ、ライサさんの手料理が食べられるのですから、これくらい当然です。それに、素敵な女性の荷物を持つのは男の名誉ですよ。」

フィオネルがにつこりとほほ笑んだ。あまりにもさらつと出てくる台詞に、社交辞令とわかつていてもライサは思わずはにかんでしまう。今の仕事場でこんな風にライサを扱う人間はいない。都ではずっと普通だったこういう物言いに違和感を覚えるほどには、この素朴な田舎町になじんでしまったようだ。

続いていたはちみつ色の街並みがとぎれとぎれになり、かわりに小さな木の家がぼつぽつと建つ街はずれにライサの家はあった。

赤いペンキが少しはげかかった玄関の扉を開けてフィオネルを招き入れ、片方の紙袋を受け取る。

「助かりました。そっちの袋はテーブルの上においでください。」
部屋の窓を全開にして、ライサはさつさと台所に入りやかんを火にかけると、買ってきたものを手早く台の上に出していった。

「今お茶を入れますね。どうぞ座っていてください。」

「ありがとう。」

さりげなく室内を見回していたフィオネルは、ライサの言葉に椅子を引いて、よく使い古されてあめ色になったテーブルの前に座った。「ここは、変わってないね。」

「あいかわらずの田舎家でしょう。都から比べると驚かれるのじやありません？」

「いや、落ち着いて、僕はこのほうが好きですよ。」

背を向けていたライサにはフィオネルの表情までは判らなかったが、その声には真意がこめられていた。昔住んでいた騎士団の宿舎とさほど変わらないような大きな家で、家具も前の持ち主から引き継いだ古いものばかりだったが、そう言われてうれしくないはずはない。いつもより丁寧に珈琲を入れて、焼き菓子とともに机の上に置くとライサは自分もフィオネルの向かいに腰をおろした。

「どうぞ。」

「じゃ、いただきます。」

しばらくして、フィオネルが先に口を開いた。

「随分、御無沙汰してしまいましたね。」

「いいえ。こうして来てくださるだけでも十分です。本当にありがとうございます。」

彼の亡き親友の元恋人。それだけのつながりなのに、フィオネルこうして僻地までわざわざ様子を見に来てくれる。都から縁を切つて久しいライサにとって、彼の訪れがどれほど楽しみで心強いことか。

「都の方はどうですか。皆様お変わりありませんか？」

「相変わらずあたたましいですよ。最近の話題は、財務省の役人が横領で捕まったとか、新しい型のドレスがやりだしたとか。「蟲使い」の話も随分騒がれていましたね。」

「あの、盗賊の？」

「ええ、先日も貴族のお屋敷が狙われたとかで、都の警備軍は連日

不眠不休だそうです。ああ、軍といえばガズが結婚しましたよ。」

「えっ。」

フィオネル達の同級生の思いがけない吉報にライサは驚いて声を上げた。何度か会ったことがあるが、軍でも上層部にいるガズは見上げるような筋骨隆々とした大男で、失礼ではあるが彼らの中では最も結婚の二文字から遠いように思えた。フィオネルはそんなライサの心中を見抜いたかのように続けた。

「一番縁のなさそうな奴が結婚しましたからね。お相手がまた、

17も年下の可愛い方で、みんな大騒ぎですよ。」

「まあ。」

フィオネルの都からの便りは、それから二人が珈琲を2杯ずつ飲み終わるまで続いた。

「貴方の方は警備隊が忙しいようですね。少しやせましたか？」
3杯目のお代わりを机の上に置いたところで、フィオネルがきいてきた。ライサにやせた自覚は無いのだが、目が回るように仕事が忙しいのは事実だった。実際こうして日暮れ前に家に帰ってくるのは久しぶりなのだ。

「フィオ様も警備隊の再編の話は聞いてらっしゃるでしょう。うちの隊が試験台に選ばれたことも。」

フィオネルが難しそうに形の良い眉を寄せた。先ほどまで柔らかだった瞳が急にまじめな色に変わり、ミラの話ではないけれど、彼の濃緑の瞳には確かに人を引き付けるものがあつた。

「ええ、先ほどアレクセイ隊長からじかに聞きました。」

「東西南北、すべての辺境警備隊を軍部に再編し、飛竜隊の「ワイバーン」を配置するなど。私にはそのようなことが簡単に実現するとは思えません。都の方では何か話は出ているのですか？」

「まだ、内々に進められているようですが、飛竜隊の一部隊を動かすとなると大きな話になってくるでしょうね。一番の問題は、内務省と国防省の軋轢がまたおおきくなることでしょう。」

ライサの問いに、フィオネルは深いため息をつきながら眉間を押さえた。行政府の内務省は、地方行政と治安維持を、国防省は軍部を統括している。ライサ達の辺境警備隊は名目上、内務省管轄下にあつた。

「今、政府全体としては中央と地方の格差解消が大きな方針です。

ここ10年で、移住規制法の強化にもかかわらず地方から中央への人口移動はますますひどくなっています。そのために政府が推進しているのが地方の、治安、教育、福祉の改善。その治安維持に関して、今までの警備隊の強化案を出した内務省と、軍の介入案を出した国防省、ひいては、議会の地方自治推進派と中央集権派で意見が真つ二つでね。今回は国防省側の案が通つて、まず試験的にこの警備隊だけが再編されますが、結果如何によつては国が割れます。」

フィオネルの話が切れたところで、ライサは疑問を口にした。

「それは内務省が地方自治を推進しているということですか。」

それに対し、フィオネルは大きくかぶりを振る。

「いえ、ご存じの通り内務省も含め行政府という機構自体が中央集権の産物ですから、内務省が地方自治を推進するということではないでしょう。ただ、管轄下の辺境警備隊がそのまま国防省に再編されるのは、内務省にとつて面白い話ではないでしょうし、その辺り軍部が内政に干渉してくることを避けたい地方領主と内務省の利害が一致した、ということでしょうか。」

一息つくと、フィオネルは思い出したかのようにカップに口をつけた。ライサも自分のカップを口に運んだが、中の珈琲はすっかり冷めきつてしまっていた。またしばらくして、次に重い口を開

いたのはライサだった。

「ここには代々自分達が街と森を守ってきたという強い自負があります。警備隊だけではありません、いざというときには民間から犠牲を出してでも、これまで軍部の介入は最小限にやってきた。

私もここにきて初めて地方の実情を知りました。今のアレクセイ隊長は元軍人ですがカウパの有力な家の出で、うまくまとめているっしやいます。でも、次に隊の再編となれば時期を見て引退されるでしょう。軍部から利権争いに絡んだ人間が上に派遣されてきたとして、隊がまとまるとは到底思えません。」

「アレクセイ殿も同じことを懸念されていましたよ。警備隊の強化は必須としても、それが行政府の利権争いになつては、結局地方の意見が反映されないまま終わるのではないかと。アレクセイ殿のご年齢を考えれば引退はしかたないですが、副長のあなたが昇格するという可能性は無いのですか。」

今度はライサが大きくかぶりを振る番だった。

「私もここでは所詮よそ者です。しかも女で元騎士団員。条件としてはこれ以上に悪くなれないほどでしょう。」

ライサは少しさびしそうに目を伏せた。今でこそ、周りの隊員の信頼を得られるようになったが、警備隊に入った当初の風当たりはひどいものだった。今は親友と呼べるまでになったミラでさえ、彼女が心からの笑みを向けてくれるまでには相当の時間がかかったのだ。だが、現状でも精いっぱい自分に、領主やほかの豪族、軍部のすべてをまとめる力は無い。

やがて、ライサはふっ切ったように顔を上げた。

「せっかく来てくださったのに、暗い話ばかりで嫌ですね。夕食にしましょうか。何かご希望はありますか。」

ライサが笑顔を見せて立ち上がると、フィオネルも寄せっぱなしだった眉の力を抜いてにっこりと笑った。

「貴方の作る物は何でもおいしいですから。でも、できれば豆のスープ以外でおねがいします。」

「あら、豆お嫌いですか？」

「いえ、王都からカレサレア山脈を越えるあいだずっと野宿で、缶の豆スープばかり食べていましたので。さすがに少し飽きました。」

「けるつとしたフィオネルの答えに、置きっぱなしだった買い物袋を持ち上げようとしていたライサは、驚いて袋を落としそうになった。「この時期にカレサレア山脈を徒歩で抜けてきたのですか？ 一人です？」

「はい。さすがに2週間ほどかかりましたが。」

事もなげにうなづくフィオネルに、ライサは天を仰いだ。目の前にいる一見優しそうで紳士然とした人物の、人並み外れた能力を改めて思い知らされる。

「もう、そんな命知らずなことができるのはフィオ様ぐらいですよ。」

「よく言われます。」

微笑みを変えないフィオネルに、ライサはもうあきれるしかなかった。

ライサは野菜を刻む手を止めて後ろを振り返り、思わず笑みをこぼした。台所のカウンターの向こうで、フィオネルが食堂の机に向かい一心不乱にマンテラの実と格闘していた。「何か手伝うことは無いですか」と聞かれて当たり障りのないマンテラの皮むきを頼んだのだが、最初のうちは雑談を交わしていたはずなのに、かたい殻をナイフで割り中の薄皮をむいていくという作業に予想外に熱中してしまったフィオネルはさつきから黙りっぱなしだ。フィオネルの前の皿には、すでに今日使うには十分すぎる量のマンテラの実が綺麗に皮をむかれてたまっていたのだが、あまりにも集中しすぎている彼にライサは声をかけられずにいる。残った分は、糖蜜と一緒に炒り菓子にして、フィオネルに持って行ってもらうことにしようか。

バタンツ。

その時、音を立てて入口のドアが開いて、一人の少年が部屋に飛び込んできた。

「ただいまっ。 かあさん今日は早かったんだね。」

そう言った少年は正面に座るフィオネルをみて、ドアを開けたその格好のまま目を丸く見開いて立ち止った。今まで走ってきたのだろうが、彼の金色の髪の毛は四方八方に乱れ、子供らしく頬を紅潮させていたが、その顔からさっと色が引いていく。

「おじさん誰。」

少年のつぶやきに、片手にナイフ、もう片手にマンテラの実という恰好のまま止まっていたフィオネルは、何とも言えない表情を浮かべて少年を見つめていたが、はっと我に帰ると慌ててナイフを下に置いた。

「おかえりなさい。ヤルノ。」

手を止めて台所から出てきたライサを見て、ヤルノはやつとこわばった表情をやわらげ、思い出したようにドアを閉めた。ヤルノは二人のそばまでゆつくりと近寄つてくると「ただいま。」と言いながらライサを見上げ、少し不思議そうな顔をしてフィオネルに顔を移し、やはり不思議そうな顔のままもう一度ライサを見た。帰つてきて急によその男の人が、それもナイフを持って部屋にいればそれは驚くだろう。可哀そうなことをしてしまった。ライサはヤルノの前に跪くと彼の肩を抱いてそつと引き寄せた。

「ヤルノ、こちらはフィオネル様。母さんが昔とてもお世話になった方よ。前にも来てくださったことがあるのだけど、覚えてないかな。」

少し首をかしげるヤルノの前に、ゆつくりと立ち上がって近づいてきたフィオネルは、視線を合わすようにそつと腰をかがめて右手を差し出した。

「こんにちは、ヤルノ。驚かせてしまつてすみません。しばらく見ないうちに、ずいぶん大きくなりましたね。」

柔らかくほほ笑むフィオネルをしばらく見上げていたヤルノは、ようやく安心したように笑顔を浮かべ、小さなその手でフィオネルの日焼けした大きな手を握った。

「それじゃあ、フィオネル様も軍人さんなの？」

ライサが出した果実水を一気に飲み干してから、ヤルノはフィオネルを見上げるようにして聞いた。また、マンテラの実をむく作業に戻っていたフィオネルはその手を止め、隣に座るヤルノを見下ろして「いえ、」と首を振り、右腕につけている銀の腕飾りを差し出して見せた。彼の前腕の半分ほどを覆うその腕飾りには、エウロ

ニア王国の紋章と伝説の動物、馬と鳥が繊細にレリーフされていた。
「僕は貴方のお母様と違って、王府で監察官をしています。監察官というのはわかりますか。」

「うん、しってるよ。」ヤルノは得意そうに声を上げた。「オラクルがまもられているか、世界中を見てまわる人、だよな。」

ヤルノの答えにフィオネルは軽く目を見開いた。

「よく知っていますね。学校で習ったのですか。」

「ううん。本で読んだんだ。世界中に行けるなんてすごいや。」

どこに行ったことがあるの？」

ヤルノのフィオネルを見る目が、憧れに変わる。最初フィオネルを少し怖がっていたヤルノも、持ち前の人懐っこさを發揮してすっかり彼に馴染んだようだ。まるで、昔からの友達のように仲よくフィオネルの旅先の話をする二人を見て、ライサは少し目を細めた。

酢漬けの魚、燻製のチーズと腸詰、ジャガイモ入りのオムレツ、塩漬けのホルトの実。とりあえず軽くつまめるようなものを机の上にライサが並べていくと、さっそくヤルノの手が伸びてホルトの実を一つつまみ、ポンと口にはりいれた。無言で睨みつけるライサに、もう一度伸ばしかけた手をあわてて引っ込めて頭の後ろで組むと、ヤルノは思い出したようにライサにきいた。

「かあさん。きょうの夜、学校 みんなで森蚩を見に行くんだって。僕も行ってきたいい？」

「西の沼まで行くの？」

ライサは少し渋い顔をした。街はずれの西の沼は、昼間に行くときれいなところだが、暗い夜はどこまでが岸かわかりにくく、あまり安全な場所とは言えない。

「大丈夫だよ。先生とか大人の人も一緒だから。」

そんなライサの心配を見越したようにヤルノが意気込んでいった。

そう言われると仕方がない、ほかの友達も行くのだろうし、明日は学校が休みだから帰りが多少遅くなっても構わないだろう、ライサは「気をつけるのよ」とゆっくり頷いた。

「森蚩が見られるのですか？」

「うん、西の沼に大きなオルクの木があつて、いーっぱい集まつてくるんだ。」

フィオネルに聞かれてヤルノは嬉しそうに両手をいっぱいに広げた。そして何を思ったのか急にパツと顔を輝かせてライサとフィオネルを見上げた。

「ねえ、フィオ様とかあさんも一緒に見に行こうよ。」

突然のヤルノの提案に、フィオネルとライサは顔を見合わせた。

森蚩は、小指の爪ほどの大きさの水辺にすむ黒い虫なのだが、この時期夜になると仲間を呼ぶために尻の部分から黄緑色の光を出す。それがなぜか申し合わせたように一つの木に大群が集まつてきて、樹全体が光り輝いているように見えるほどになるのだ。息をのむほど美しい光景だが、初夏のほんの数日、それも日没後の数刻の間しか見る事が出来ない。

野菜の入ったボールを机の上に置きながら、ライサはフィオネルからヤルノに目を移した。

「ヤルノ。フィオ様は遠くから来られて疲れていらっしやるのだし、無理を・・・」

無理を言つてはいけませんよ。と続ける前にフィオネルの方が割り込んだ。

「いえ、僕も見たいですね。一緒に行つてもかまいませんか。」

「につこりと笑つたフィオネルの答えに、ヤルノは「やった！」と手を打ちながら椅子を下りて飛び跳ねる。」

「フィオ様、明日も早いでしょう。ご迷惑になりませんか。」

「いいえ。森蚩など、都にいれば見られませんか。こちらこそ、御迷惑でなければぜひ。」

それから、「貴方も行きませんか。」とフィオネルはライサを見上げた。とびまわっていたヤルノも、ライサの前に駆け寄ってくる、大きな目をいっぱいに広げて彼女を見上げた。

「かあさんも行こうよ。せつかく早く帰ってきたんだし。ね？」

ライサは少し困ったような顔でヤルノを見下ろした。ライサも森蚩を数えるほどしか見たことがないから、行くのが嫌なわけではない。そうではなく、ヤルノの言葉の端に、普段彼が口にださない寂しさが覗いていたから、言葉を返すのに詰まったのだ。聞き分けがよく、同年代の子供よりも少し大人びているヤルノに、つつい甘えてさびしい思いをさせてしまっている。ライサは勢いよくヤルノの前にしゃがみこんでにこっと笑った。

「よしつ。じゃあ早く夕飯にしないとね。」

「僕も手伝うつ！」

「んー。何をお願いしようっかな。」

ライサは飛びついてきたヤルノを軽々と抱き上げると、ぐるぐると回転させた。ヤルノがケタケタと笑い声を上げる。気づくたびに大きくなっている様なヤルノも、竜鞍に比べればまだ軽いぐらいだ。でも、こうして彼を抱きあげられる時期など、人生のほんのわずかな間だけなのだから。

「僕も、何かお手伝いします。」

いつの間にか全部皮をむき終わったマンテラの実が入った皿を置き、フィオネルがはしゃぎまわる2人を見てくすくすと笑いながら言った。

3 - 3 (後書き)

思っていたよりずいぶん話が長くなってきてしまったので、サブタイトルを書き換えました。途中まで読んでくださった方、紛らわしくなって済みません。

3人で山のように作った夕食は、ライサの予想に反してすべてきれいに片付いてしまっていた。この細身の男のどこにあの量が入っていくのかと、あきれるよりも心配になるほどだったが、あれだけおいしそうに遠慮もなく食べてもらえると作り手としては嬉しいものだ。食事の間中フィオネルは、聞いたこともないような遠い国の不思議な街やそのおかしな風習を話して聞かせてくれ、驚いたり笑い転げたりしながら、ライサ達は久しぶりのにぎやかな夕食を過ごした。

窓から差し込んでくる日差しはすでに淡い黄色に変わってきているが、北国の長い一日が終わるのにはまだ時間がある。片付けの終わった机の上に、ライサは程よく冷やした香草茶のカップを3つならべた。

「そうそう、忘れていました。君にプレゼントがあるのでですよ。」
「プレゼント？」

さわやかな香りを楽しむように、ゆっくりと香草茶を飲み干したフィオネルが、懷から長細い包みを取り出してヤルノの前に置いた。綺麗な光沢のある流水紋の包み紙に、銀色のリボンが巻かれている。見たことがないような立派な贈り物を、ヤルノは恐る恐る持ち上げた。

「少し遅くなりましたが学校の入学祝です。がんばって勉強してください。」

「あけていい？」
「もちろん。」

ヤルノはゆっくりとリボンをほどき、少しでも破れないようにと驚

くほど時間をかけて丁寧に包み紙を開いた。 やつと中から出てきた細い木箱を開けたヤルノは息をのんだ。

「うわぁ。 すごいっ。 翡翠竜の羽ペンだ。」

東国の遠い島ににいるという翡翠竜の飾羽は、輝くような青緑色に、付け根だけが夕日を浴びたような緋色をしている。 とても知能の高い竜で、その羽から作られたペンは美しいだけでなく、勉強の護符としても良く知られていた。 もうそれ以上言葉が出ないというように、ヤルノはただじっと羽ペンを握りしめて見つめていた。

「ヤルノ。 ちゃんとお礼を言ったの？」

ライサの言葉にヤルノは、はっと気がつく、いきなり隣で微笑んでいるフィオネルの首に飛びついた。

「フィオネル様。 ありがとう！ 僕大切に使うよ。」

「気に入ってもらえて、うれしいですよ。」

ギョツと回された小さな腕にフィオネルはほんの瞬間だけ驚いた顔をしたが、ヤルノの振る舞いの非礼をとがめることもせず、優しく彼の柔らかな金髪をなげた。 ヤルノはフィオネルの首元にうずめていた顔を上げにこつと笑うと、「窓のところで見てくる！」と彼の膝から飛び降りて、窓辺に走って行った。

「すみません。」

貴族であるフィオネルに対して都では考えられないだろうヤルノの態度や、子供には高価すぎる贈り物、いろいろな意味でライサは頭を下げた。

「僕はただの配達人。 本当の送り主は別の人ですけどね。」

申し訳なさそうなライサに、フィオネルは人差し指を口にあていたずらっぽく笑った。 彼の言うその人物が誰かに思い当たりライサは思わず唇をかみしめる。

「・・・ありがとうございます。」

目の前の心やさしい人に、ライサはそれしか言うべき言葉が見当た

らなかった。

「本当にすごいや、羽がきらきらしてる。宝物がまた増えちゃった。」

窓際で羽ペンを光にかざしてみていたヤルノは、また嬉しそうに走って戻ってくると、丁寧には羽ペンを箱に戻してからフィオネルを見上げた。

「僕のもうひとつの宝物見たい？」

「ええ、ぜひ。」

フィオネルの答えにヤルノは満面の笑みを見せると、シャツの中から首にかけていた鎖を引つ張りだした。その先に指輪が一つさがっている。ヤルノには明らかに大きすぎるその指輪は、使い古されたように表面の飾彫りが薄れ、鈍く銀色に光っていた。

「これは母さんから入学祝にもらったの。勉強と友達がたくさんできるお守りなんだよ。」

ヤルノは得意そうにいった。フィオネルは濃緑の目をずっと細めて、ヤルノの首元で揺れる指輪をしばらくのあいだ見つめていた。

「見せていただいていいですか？」

「うん。」

ヤルノが首から抜き取った鎖を受け取り、フィオネルは自分の手の上で指輪を何度か転がしてみていたが、その表情がふと優しくなる。「とても、いい物をもらいましたね。」

そして、「ありがとうございます。」といって、差し出されたヤルノの小さな手のひらの上に、まるで高価な宝石でも扱うように、そっと丁寧に指輪を戻した。

ようやく日が落ちてきたところだったが、待ちきれないヤルノにせかされて3人は家を出た。ここから西の沼までは半刻ほどで、

のんびり歩いていけばまあちょうどいい時間になるだろう。薄く雲がたなびく空を、タンペレの街特有の黄緑色の夕日が美しく染め上げていた。ヤルノはよほど嬉しかったのだろうか、少し先まで行ったり戻ってきたりを繰り返して走り回っていたが、やがて、のんびりと話しながら歩く二人の元に駆け戻ってくると、左手をライサの右手の中に滑り込ませた。

「なあに？」

「いいこと。」

問いかけるライサに答えて、ヤルノはギュツと繋いだ手をぶんぶんと大きく振った。不思議に思っただけでライサが前を見ると、緩やかな曲がり道の先に、ライサ達と同じように森蚩を見に行くのだろうか、家族連れの姿が小さく影になって見えた。両親に手をつながれた子供の笑い声が小さく響いてくる。ライサが何か言おうと口を開きかけた時、横からフィオネルの低く落ち着いた声がした。

「ヤルノ。」

差し出された左手にヤルノは少し戸惑っていたが、やがてその意味を悟ると目を輝かせて自分の右手を伸ばした。その手をフィオネルの大きな手が包み込む。

「へへへっ。」

左右の二人を交互に見上げて、ヤルノは楽しそうにまた手を大きく振って歩きだした。ライサもそんなヤルノをやさしく見下ろしながら、彼に合わせてゆっくりと歩を進める。こんな、子供っぽいふるまいをするヤルノを見るのは久しぶりかもしれない。ふと視線を感じて横を見ると、おなじようにヤルノと手をつないでゆっくりと歩くフィオネルと目があった。ライサが声に出さずに感謝の言葉を口にする、彼も目を細めて笑みを返した。

西の沼にあるオルクの木の前には、すでにたくさんの人が集まっていた。いったい樹齢が何年ぐらいになるのだろうか、どっしり

と佇むその巨大な木は、大人が3人がかりでやっ取り囲めるほど太い幹から四方八方に枝を伸ばし、青々とした葉で空を覆い尽くそうとしているようだった。昔この地方で悪さをしていた竜を、一人のノマドが捕まえて魔法で樹に変えた。夕闇の中この巨木を見ていると、そんなおとぎ話が本当に思えてくる。

「ヤルノ！ こっちこっち。」

樹の下に集まっていた子供たちの一人が近付いてくるヤルノに気がついて手を振った。

「ぼく、みんなのところに行ってくるね。」

少し気恥ずかしそうに二人の手を離すと、ヤルノは生い茂る下草にもかまわず一直線に駆けだしていった。

「ますますヤルノに似てきましたね。」

学校の友達とふざけあうヤルノをしばらく見ていた後、ぽつりとフィオネルがこぼした。

「もう、元気がありあまっていて困るくらいですけれどね。いつになったら落ち着いてくれるのやら。」

ライサがヤルノ・コレルに出会ったのは彼が大人になってからで、彼が子供の時を彼女は知らない。それでも、ヤルノは良く彼の父親に似ていると思う。透き通るような金髪も、すっとした目鼻立ちも。外見だけでなく、意志の強いところやいつも何かを追いかけて走りまわっている様な所もそっくりだ。ライサの答えにフィオネルがふつと笑った。

「僕がヤルノを知っているのは15歳のころからですけど、その頃でも十分やんちゃでしたよ。イエリと二人で随分先生たちを困らせていたものです。」

ライサも思わず噴き出した。

「光景が、目に浮かびます。」

軍でも彼ら二人は悪友として有名だった。二十歳を過ぎてもあんな

な感じだったのだから、学生のころはさぞかし大人達の手を焼かせたことだろう。

「あの指輪は、貴方が持っていたのですね。」

次のフィオネルの言葉には、さすがにすぐに答えを返すことができなかった。樹から少し離れたところにいるライサ達の周りにはだれもいなかったが、それでも隣のフィオネルに表情を隠せるほどには、まだあたりは暗くなっていない。少し迷った後ライサはポケットから、落とすといけないからと、さっきヤルノから預かった鎖を取り出した。しゃらんと先にかかった指輪が音を立てる。

「ヤルノ様から、亡くなる前に送られてきたのです。しばらく預かっていてほしいと。」

肌身離さずヤルノが大切にしていた指輪を、なぜ別れたライサに預けてきたのかは分からない。今でも、この指輪を見ると胸の奥で何かギョツと音を立てて、ライサの愛した青年と、そしてこれと対になる指輪を持つ青年の顔が浮かんでくる。それでも、残された数少ないヤルノの形見としてずっと大切にしてきたのだ。

「そうでしたか。」ライサの手元から視線を遠くに移して、フィオネルはつぶやいた。

「その指輪がふさわしい持ち主のところに行って、ヤルノは喜んでいると思いますよ。」

フィオネルの言葉にライサは少し頷いた。この指輪を持つべき人に受け渡すことができた。それだけは誇りをもって言える。

「私もそう思います。」

薄い黄緑色から青緑に変わりつつある空を背景に、灰色に浮かび上がる子供たちの人影を見守る二人の間を、柔らかな風が吹き抜けて行った。

3・5* (前書き)

ページ下に挿絵があります。

「あ、蛭。」

ライサの視界を淡い黄緑色の光が横切った。一つ、また一つと下草の間からふわふわと舞いあがってきた光は、あつという間に数を増し、今までどこに隠れていたのだろうかと不思議に思うくらい、たくさん光の粒が辺りに浮かび上がった。黄緑色の光の波はゆつくりと点滅を繰り返し、吹き抜けてきた風に誘われるように、揺られながらオルクの大木にむけて集まっていく。それはまるで夢のように美しい光景だった。やがて、黒々とした影だけになっていた大木が、一面淡い黄緑色の光におおわれた。草原のあちこちから歓声が上がる。

「フィオ様。私も質問していいですか。」

「僕が答えられることでしたら。」

こんなときにする話題ではないとは分かっていたが、こんなときでないと聞けないだろう。目の前にいる優しい人物を困らせることになるかわかっていて、それでもライサは口を開いた。

「フィオ様が、ここに来てくださるのはイエリ隊長に頼まれたからですね。私達の様子を見てくるようにと。」

それは、フィオネルがこの街を訪れた時からの疑問だった。7年前、逃げるように王都を出てから、ライサの消息を知る者は皆無といてもいいはずだ。それはライサ自身も注意を払っていたし、特に子供の事に関しては絶対にヤルノの実家、コレル家にばれるわ

けにはいかない。だが、巨大なコレル家の権力の前にライサに何
が出来るだろう。それでも、いままでライサがこの街にいるとい
うことを隠し通せているのには、どこかで誰かの意志が動いている
からではないだろうか。そんな漠然とした疑念が、フィオネルが
来たことで確信に変わっていた。フィオネルは、仕事でタンペレ
に来て偶然ライサを見つけたと言っていたが、前回彼が来たのは竜
種の暴走で街に大きな被害が出た後、そして今度は、再編問題で警
備隊が混乱にある中。偶然にしては出来すぎていないだろうか。

ライサの消息を調べることができ、それがコレル家に露見しない
よう情報を操作し、フィオネルを動かすことができる人物、といえ
ば一人しかいない。質問というよりは確認という口調でライサは
つづけた。

「それに、先ほどの警備隊再編の話。軍が関与してくるのはわかり
ますが、彼らが切り札の白騎士団をこつも簡単に出してくると思
えません。イエリ隊長、いえ、イエリ副団長は何を画策してい
らっしゃるのですか。」

ライサは真つ直ぐにフィオネルを見上げた。彼はそんなライサを
無言で見つめていたが、珍しく自分から視線を外した。腰に手を
あて、少し考え込むように下を向いていたが、やがて大きく息をつ
きながら顔を上げて空を見あげたフィオネルは、やはりきかなけれ
ば良かったとライサが後悔するくらい困りきっていた。

「まいったなあ。」

髪をくしゃくしゃとかき交ぜながら、思わずといったようにフィオ
ネルはつぶやいた。普段、何があっても穏やかな態度を崩さない、
少し人間離れた霧囲気をまとう彼がふと見せた砕けた態度に、ラ
イサはむしろ親しみを感じたくらいだ。

「イエリには秘密にしておいてくれと言われているのですよ。本当はイエリ自身がここに来たいのでしょうけれど。彼が動くのは立場上あまりにも目立つので、貴方達の様子を見てきてほしいとは頼まれました。」

仕事で世界中を飛び回っているフィオネルとちがい、白騎士団の副団長にまでなったイエリが、たとえ個人的な事とはいえ都を離れば、確かに余計な厄介事を起こしかねない。困りきった表情とは裏腹に、フィオネルはライサが驚くほど素直に事実を認めた。だが、次の言葉には少し口ごもる。

「しかし白騎士団の事は、すみませんが僕が軽々しく口に出せることではありません。イエリが何を考えているのか僕にも測りかねるところがあります。ただ、」

そこでフィオネルはライサに向きなおった。

「ただ、僕が知るイエリは、友達との約束を守る男です。」

ライサは、手に持った指輪をぎゅっと握りしめた。それならば、この指輪がここにある限りあの人は自分達を守ろうとするのだろうか。そんなことを望んで自分はここにいないわけではないのに。

「ライサ。」

鎖が食い込むほどきつく握りしめていたライサの手の上に、フィオネルの大きく温かい手が重ねられ、彼女のこぶしをそつと解いていく。

「あまり一人で抱え込まないでください。そして、たくさんの方が貴方の味方だということを、どうか忘れないでください。」

フィオネルの言葉にライサははっと顔を上げた。以前に同じ様な事をイエリから言われたのを覚えている。そして、その言葉を裏切ってしまった時に、彼がどれほど傷ついた顔を見せたかも。あの時の自分は、目の前のつらい現実から逃げだすのに精いっぱい、周りの者すべてを壁でさえぎってしまっていた。あれから6年かけて、幼いヤルノとの日々がライサの傷を癒していつてくれた。もう2度と会うことのできない最愛の人の顔も、今は笑顔で思い出せるようになった。それなのに、ライサの記憶の中のイエリは、いつもあの夜や、除隊届を受け取った時の押しつぶされるように辛そうな顔をしている。

イエリの本心はわからないままだったが、彼の親友が命をかけて守った街や、その親友の忘れ形見が不利になる様な事をするはずがない。自分は差しのべられた手をまた振り払ってしまうところだった。

ライサの目の前を、一匹だけはぐれた森蚩がふわふわと光の軌跡を描きながら飛んできた。見つめあっていたフィオネルの濃緑の目が一瞬だけ淡い黄緑色に光る。彼はその目をいつものように優しく細めた。

「それと、誤解のないように言っておきますが、ここに来ているのは僕自身の意志です。貴方に会うのも、ヤルノの成長を見るのも僕はとても楽しみにしていますから。」

ライサにはフィオネルの言葉が痛いほど嬉しかった。

また草原のあちこちで歓声があがった。

オルクの木を仰ぎみると、先ほどまでばらばらに点滅していた森蚩が、まるで誰かが指揮をとっているように合わせて光を発していた。樹の中央から始まった光の点滅が、輪を描いて木の外側へと伝わっていく。それは波のように後から後から続き、まるで樹が鼓動している様な、いや、何千何万という森蚩が一つの生き物になったかのような、美しい光景だった。

「東国の古い言葉で、蚩の事を何と呼ぶか知っていますか。」

突然のフィオネルの問いに、ライサは考えもつかずに首をかしげた。

「いいえ。」

「想飛、と呼ばれています。」

「ソウヒですか？」

「ええ、想いを伝えるために飛ぶ虫という意味だそうです。東国には蚩が、遠く逢えなくなってしまう人に想いを届けてくれると逢えなくなった人からの想いを届けてくれるという伝説があるそうですよ。」

「素敵な話ですね。」

ライサは心からの笑みを浮かべた。それなら、自分の思いも届くだろうか。遠くにいる彼も、こうして心から笑えるようになっていたといい。ライサは祈るように淡く光る樹を見上げた。

そこに店があるとは、知っているものでないとなかなかわからないだろう。飲み屋が連なる繁華街の中ほどから細い路地を抜け、裏通りに出たところにあるこれといってめだたない建物の、すり減った石段を5段ほど下りた半地下に古びた檜の木の重そうな扉がある。特に看板などは何も出ておらず、扉の小さな窓に金の飾り文字で小さく「steela」とだけ書かれている。そこがステラの店だった。

イエリが重い扉を開くと、上についたベルがカランコロンとかわいらしい音を立てた。店内は落ち着いた雰囲気が高価なオレンジ色のランプが惜しげもなく使われている。ドアの先にも2段ほど段差があり、その先からは良く磨きあげられた木の床張りが続いていた。入って左手がバーとカウンター。右手は意外と広くテーブルとイスが10組ほど並んでいて、その半分ほどが客でうまっていた。いつも不思議なことにこの店に客足が絶えることはない。といっても満員御礼というところも見えた事がないのだが。

「いらつしゃい。」

店内のざわめきの中よくとおる声がした。

「おひさしぶりです。」

イエリは声の主、カウンターの中にいるこの店の女主人の方へ近づ

いて行つた。ぬれたような黒髪をたくく結いあげ、細身の体によく合うシンプルな黒いドレスを着ている。泣きボクロと赤く塗られた唇が何とも艶っぽい。色香がにおいたつような女とはこういう人の事を言うのだろう、めったにお目にかかれないような美人だった。

「あら、イエリ様はいらっしゃるたびに『お久しぶり』ね。」

グラスを磨きながら少し拗ねたように女主人がいつてくる。

「すみません。」

イエリは素直に謝つた。久しぶりとはよく言つたものでここに来るのは2、3年振りだろうか。それでもステラはいつものようにイエリの顔と名前を覚えていてくれる。それこそ学生時代から世話になっている彼女に頭が上がらない。

「昇進してまた忙しいのでしょうか？ 見るたびにいい男になつちやつて。」

だから許してあげる。とステラは艶っぽくほほ笑んだ。

「他の連中はもう来てます？」

「ええ、奥のお部屋に御集りよ。今日は何の密談？ いい男ばかり揃つちやつて、うらやましいわ。」

「じゃあ、ステラさんも一緒にどうです？」

イエリがいたずらっぽく笑うと。ステラは片手をほほにあてて首をかしげた。こんな仕草が嫌味に見えないのは彼女ぐらいだろう。

「そうねえ。行きたいけれど遠慮しておくわ。 カナル嬢に悪いし。」

ステラが、集まっているなかで唯一の女性の名前を上げた。もつとも、男気あふれるカナルの事だから、紅一点というよりはいい男の一人に数えられているに違いない。と、ステラの目がすつと鋭くなって伝わってくる空気が急に変わった。

「それに、私、貴方達のお仲間に加わるほど命知らずじゃなくつてよ。」

驚くほど彼女の声が低くなる。そこにあるのは気の置けない飲屋の女主人ではなく、冷酷なまでに美しい彼女の裏の顔。しかしイエリはひるむことなく囁いた。

「知ってますよ。」

そんなイエリにステラは少し目を見開いて、やがてふつと溜息をもらして元の女主人へと表情を戻す。

「やあねえ、すっかり大人になっちゃって。昔はかわいかったのに、からかい涯がないじゃない。」

「30半ばの男を捕まえて、可愛いじゃ情けないでしょう。」

「あら、もうそんなになるの？ 私が年をとるはずだわ。」

「ステラさんは、昔と全然変わりませんよ。 いや、見るたびに綺麗になっているかな。」

イエリはカウンターに身を乗り出してステラの右手をとり、さつとその手の甲に唇を寄せた。向こうで若い店員が黄色い声を上げるが、当のステラは顔色一つ変えずにイエリの手をさつと振り払った。

「ほんと、男って馬鹿ね。　お酒はいつものでいいの？」
「はい、いつもので。」

まるで何事もなかったかのように笑顔を返すと、イエリは店の奥に続く通路に向かった。この店に来るたびに、ステラとあいさつ代わりにこんな会話が交わされる。初めてこの店に来たのは、イエリが17か18の時だろうか。それから本当に驚くぐらいステラは少しも変わっていない。そろそろ妖艶というより妖怪の域だな、などところどころ思っている事はもちろんステラには絶対知られてはいけないが、それにしても。

（あれで、女じゃないなんて詐欺もいいところだな。）

奥の個室の扉を開けながらイエリはこっそり溜息をついた。

イエリが扉を開けると視線が一気に集まった。10人ぐらいは入れるだろう細長の部屋は、ぐるりと壁沿いに座り心地のよさそうなソファが並べられていて、そこで4人の大人がくつろいでグラスを傾けていた。中央には大きな長机の上には、いく皿もの料理やグラスや酒瓶が置かれていたが、すでにそのいくつかは空になっている。

「遅れて悪い。」

空いている場所に適当に座ると、さっそく一番奥にいる女性が文句

を言ってきた。

「ほんとに、主役が遅れてきてどーすんのよ。」

「カナル。 イエリも仕事が忙しいのですから。」

「なに？ 仕事と、あたし達とどっちが大切だっていうのよ。」

「この、仕事バカに聞くせりふじゃないだろ。」

「ごめんね、イエリ。 先にいただいているよ。」

相変わらずの面々に、イエリは思わず笑いを浮かべる。 顔は全く素面なのに、酒が入るといつもにもまして絡んでくるセピア色の短髪を持ち主がカナル。 これもいつものように彼女の暴走を止める役に回るのが、外見といい性格といい、この中で一番おっとりとしたフィオネル。 それを妙に煽るのがブロンドにアイスブルーの瞳という、いかにも女にもてそうな顔をしたネストリ。 そして褐色の肌に黒眼黒髪というゴンガザ人の特徴を備えた大男ガズは、周りがどんな状況であろうと我が道を行く。 4人ともがイエリとは専修校の同級生、20年以上の腐れ縁だ。

それでも、この顔触れに少しさみしさを感じてしまうのは、昔からすればこうして集まる頭数が半分に減ってしまったからだろう。

腐れ縁という意味では、ほかにあと5人ほどいたのだが、2人はこのような場所に簡単に顔を見せることが出来るような立場ではなくなり、1人は仕事でもう1人は結婚して遠くの街に移り住み、最後の1人はもっと遠くの場所へ旅立ってしまった。 この5人で集まるのでもずいぶん久しぶりだ。

軽くドアをたたく音がして、若い店員がイエリの分の酒を持って入ってきた。 さすがにステラの店だけあって、店員の質は高く良く躰けが行き届いている。 如才ない仕草でグラスを机に置くと、「どうぞ、ごゆっくり。」と見せかけだけではない無い笑みを残し

て、すぐに店員は部屋を去って行った。

「じゃあ、みんな揃ったところで。 何に乾杯する？」

いつの間にか機嫌を直したカナルがグラスを上げると、後の男たちもそれに倣った。

「ガズ、任せた。」

ネストリの一言に、全員の視線がガズに向く。昔から、面倒な事はガズに一任するのがネストリで、この個性的な一団の中で一番常識のあるガズが、なんだかんだ言っているのもうまく皆をまとめてくれる、影のリーダーというかお目付け役だ。女性陣はいまだに「お父さん」などというあだ名で呼んでいるが。ガズの方は「また、俺か。」などと言いながらも、寄りかかっていたソファから身を起してきつちりと座り直すと、全員を見回した。

「それじゃあ、我々の変わらぬ友情と、旅立つイエリの前途を祝して。」

「乾杯！」

5つのグラスが、勢いよく音を立ててぶつかった。

「なかなか、思うようにいかないものだな。」

「そりゃ、一つの国を変えようとしているのだから、そう簡単にいくはずがないさ。」

ネストリの珍しい愚痴のようなつぶやきに、イエリはグラスに残った酒を一気におりながら答えた。目の前にあるいかにも高級そうなボトルはもう半分ぐらい空になっていたが、そこからまた新しい酒をグラスに惜しげもなくなみなみと注ぐ。学生の頃はこれを舐めるように飲んだものだが、出世して良くなったのはいい酒に金を惜しまなくて良くなったことぐらいたろうか。向こうにいるネストリも、火をつければ燃えるような酒を水のように軽々と飲んでいる。ここにいる全員が酒に関してはザルの様なもので、飲み始めてから一刻ほどたって、机の上に並んでいるのは空の皿より空の酒瓶の方が断然多かった。

「そういえばフィオは、タンペレまで行ってきたのだった。あつちはどうだった？」

ガズの問いにフィオネルは肩をすくめた。

「まあ、予想通りというところですか。イエリにはもう報告しましたけれど、軍部への偏見といい、自治への矜持の高さといい、あそこは地方都市の中でも一級品ですね。東西南北の中でタンペレの西方警備隊を落とすのは間違いなく最難関ですよ。」

監察官という仕事柄、世界中を旅してまわっているフィオネルはいつも彼らの目と耳になってくれる。立場上軽々と都から離れられない他の4人にとって、彼の忌憚ない外からの情報は何よりも貴重なものだった。

「それだけに、あそこさえ陥落させれば後がやりやすくなるさ。」

ネストリが口の中にほりこんだマンテラの実を、音を立て噛砕いて持ち前の冷酷な笑みを浮かべた。その容貌と切れすぎる頭脳から「氷の君」とまで呼ばれるネストリは、イエリ達にとっても貴重な作戦参謀だったが、たまにどう見ても悪役の親玉にしか見えない時がある。いや、自分達が正義の味方や善良な一般市民で無いことも確かなのだが。

「私がききたいのはそんなわかりきった事じゃなくて、小さなヤルノの事よ。」

カナルはそんなネストリを見て鼻を鳴らすと、ドンと机の上に音を立ててエールのジョッキを置いた。彼女の隣にいたフィオネルは少しあきれたように笑ってから、ゆっくり机の上に肘をつき、組んだ手の上に顎を載せて全員を見回した。

「元気にしていましたよ。また大きくなって、一段とヤルノに似てきたようです。そうそう、入学祝もずいぶん喜んでくれていました。友達もたくさんいるようですし、何より将来は翼竜乗りになりたいと言って頑張って勉強しているようですよ。」

その場が、何とも言えない穏やかな空気に包まれた。友人の忘れ形見の話題は、いつも喜びと、少しの悲しみと苦さを彼らの胸の内に呼び起こさせる。同級生、友人、そして彼らとこの人生をかけ

た壮大な計画をとにもするはずだった大切な仲間が遠くに旅立ってもう7年。その痛みは、薄れることはあっても消え去ることは無い。

「ただ、ライサさんの方は警備隊再編でずいぶん苦勞しているようでしたが。」

続くフィオネルのつぶやきに、イエリは全員の視線が自分に注がれるを感じた。だがあえて口を開くことなく、グラスを口に運ぶ。またカナルが大げさにため息をつくのが聞こえた。

「しかし勿体ないことだな、イエリ。このなかじゃお前が出世頭だったなのに、今までさんざん苦勞して来て、やっとこれから面白くなるっていうときに抜けるなどと、お前は欲っていうものがないのか。」

「何をいまさら。俺は自分が一番私利私欲で動いていると思うけどね。」

ネストリの言葉を借りれば「よくこの個性的な面々が、ぐれて道を外れることなく出世したものだ。」ということになるのだろう。専修校の特進クラス出身とはいえ、同級生全員が今ではそれぞれの分野で重要な地位まで上ってきている。その中でも、30代前半で3人いる白騎士団副団長の一人となったイエリは、確かに出世頭といってもいい。だが、なるべく早く駆け上らなければならなかったイエリに対して、他はゆっくりでも着実に地盤固めをする必要があっただけで、自分が彼らより優れているとはイエリは思っていない。逆に、多少無理をして今の地位を手に入れたイエリが、この先白騎士団に居続けても上にあがれることはまずないだろうが、彼らはこれからも上り続けてやがてこの国を率いる一員になっていくだろう。

「俺がここまできたら抜けるっていうことは前々から言っていただろう。俺が飛竜隊にいてできることはもうないし、向こうにいた方がお前達の役に立つこともあるだろう。むしろ、ここまでくるのにこんなに時間がかかるとは思っていなかったぐらいさ。」

「それこそ愚問だな。国が一朝一夕で動くかよ。」

ネストリがニヤツと笑った。

「ちょっと、みんなグラス出して。」

「おい、何する。」

突然カナルが立ち上がると、全員のグラスに問答無用で手に持ったエールを注ぎ始めた。不幸にもまだグラスに別の酒が残っていたネストリが彼女を睨みあげるが、ライサはお構いなしに満面の笑顔で自分のジョッキを高く掲げた。

「乾杯しよ。この国の未来に。」

イエリはあまりのカナルの勢いにあっけにとられていたが、やがて苦笑しながら立ち上がると自分のグラスを差し出した。フィオネルとガズがそれに続き、何やらブチブチといしながらネストリも立ち上がって、5つのグラスが高々と音を立てた。

こうして、この国の未来のために人生をかけようと、杯をかわしてから何年になるのだろう。やっと今、この国は動き出そうとしている。ただ、自分は他にやらなければならないことができてしまった。イエリの仲間達はそれを怒るところか、当然のように応援してくれる。感謝してもしきれない。ここでの自分の役目が終わった今、ここから彼らとは道を違えることになるが、それでも向かう方向は同じだとイエリは信じている。

「また、いらつしゃいね。」

帰り際、ドアのところですぐ後ろから声がかかってイエリは振り向いた。いつも最後にステラがカウンターの向こうから言うセリフ。なのに、彼女は今までで初めて入口まで出てきてイエリを見上げていた。聡い彼女の事だから、イエリが言わずとも何かを感じ取ったのかもしれない。

「はい、きつと。」

いつものように微笑むステラに頷いて、イエリは扉を開けた。

「それじゃ、また。」

「ああ、元気で。」

「またね。」

5人の間での別れの言葉は簡素なものだった。ただ、お互いにかたく手を握りしめて、頷きあうと彼らは別々の方向へとふり返るこ
となく歩みだした。

歩き出したイエリの火照った頬を、ひんやりとした風が冷やしてくれる。もう夏も終わりだ。そう言えば、あの日もこんな風が吹いていた。7年前ここでヤルノと最後に飲んだ日も。

「おまえちょっと飲みすぎだぞ。」

「まだ、だいじょうぶらって。」

全然舌が回っていないヤルノに、イエリは苦笑した。仲間内では比較的酒に弱いヤルノには、今日の酒の量は少しきつかったらしい。

「ちょっと休憩。」

夜風に当たって少しは酔いがさめたのか、顔が赤いのはましになっていたが、その分眠気が襲ってきたらしい、小さな広場に差し掛かったところでヤルノが足を止めた。そして、イエリが止める間もなく広場の噴水に頭を突っ込む。

「ぷはあ。生き返るね。」

ぬれた頭を動物のように振って水を落とすと、ヤルノはどっこいしよとオヤジ臭い事を言いながら、あきれ顔のイエリの隣に腰をおろした。

「今日は、星がよく見えるな。」

「もう夏も終わりだからね。」

こんなにゆっくりと夜空を見上げるのは久しぶりだ。澄みきった空に無数の星がきらめいて、まるで今にもこぼれ落ちてきそうだった。

「なあ、イエリ。あいつの事頼むよ。」

「なんだ、唐突に。」

「俺が言えた義理じゃないけれど、強そうに見えても女だから。守ってやってほしい。」

本当に突然のヤルノのつぶやきに、イエリは驚いて親友を見たが、彼は夜空を見上げたままだった。ヤルノが誰の事を言っているのかは、聞かなくても分かる。だが、今夜ヤルノが彼女の事に触れるのは初めてで、分かれ道の手前で立ち止まったヤルノが何か話したいのだろうと予想はしていたが、その言葉はイエリが予想もしていなかったものだった。

「あきらめるのか。」

イエリが低い声で聞くと、ヤルノは初めて視線を彼に移し、そしてゆっくりと首を振って吐き出すように言葉をつないだ。

「今はだめだ。俺にはまだ力が足りない。それを思い知ったよ。」

「融通が利かない奴だ。」

イエリがあきれ声を出すと、ヤルノは「俺もそう思うよ。」とさびしそうに笑った。

そんなにすらそんな顔をするぐらいなら、かけ落ちでも何でもしてしまえばいいのだ。

「あとから、返せと言っても遅いかもしれないぞ。」

「それならそれでいいさ。あいつが幸せならね。」

「冗談だ。」

軽く言ったつもりが、驚くほど真剣な眼のヤルノに返されてイエリはいささか慌ててしまった。ヤルノはまた夜空を見上げ、しばらく

くしてまたぼつりと言った。

「お前さ、あいつの初恋の相手が誰か知っているか。」

さつきまでほろ酔い気分だったイエリの頭がすつと冷めた。

「何を、唐突に。」

「そっか、知っていて当たり前だよな。俺から見ても態度バレバレだったし。」

ニヤツと笑うヤルノとは対照的に、イエリは何とも言えない気分になった。騎士見習い生が、正騎士にあこがれやそれ以上の気持ちを抱いてしまうのは、まあ、やはり風邪のような仕方のないもので、風邪と同じで熱は出てもほっておけば大抵はかってに治まる。あの頃、ライサの瞳の中にあつたものに気がつかないほど、イエリは鈍感ではなかったけれど、だからといって、ライサから何かを言われたわけでも、上司と部下以外の関係があつたわけでもない。

「もう何年も前の話だろう。」

とはいえ、その話をヤルノから言われると居心地がいいとは言いつらい。「もう勘弁してくれ。」と頭をかきむしるイエリをヤルノは面白そうに見つめて、それから大きく伸びをして立ちあがった。

「俺は、本当にあいつが幸せだったら何でもいい。」

「だったら、さっさと出世でも何でもして、早く迎えに行つてやれ。あんなはねつかえり俺の手には負えないからな。」

「それもそうだ。」と笑い声を立てながらふり返ってイエリを見下ろしたヤルノの目が、まるで今夜の空のように怖いほど澄みきって

いて、イエリは思わず彼から目をそらした。

「もういくよ。」

「明日は早いのか。」

「いや、今度の出発は明後日だ。まあ、明日一日はバタバタして
いるだろうけどね。」

「偵察も大変だな。今度はどこだ。」

「カウパ州都タンペレ。」

そっけなく出てきた地名に、イエリははっと顔を上げた。偵察と
伝令が主要任務の6番隊に属するヤルノが、どの街に行こうと不
思議ではない。むしろ、今まで行ったことがなかったことの方が不
思議なくらいだ。それなのに、少し悲しそうに微笑むヤルノを凝
視するばかりで言葉が出てこない。おもむろにヤルノは首を下
げて、かけていた鎖をはずすと、その先についている指輪ごとイエリ
の手に押し付けた。

「これを、しばらく預かっていてくれないか。」

「どうしてだ。」

声がふるえなかったのを自分でほめたいくらいだ。

「あの街に、この指輪を持っていく権利は俺にはないから。おま
えから故郷を奪った俺が、お前の親友面してあの街には行けない。」

押しつけたままだった手をそっとのけると、「じゃあ。」と柔らか
な表情を変えることなく、ヤルノは踵を返してイエリに背を向けた。
いろんな言うべき言葉がのど元まで出てきて、音にならずに消え

ていく。うつむいて右手の中のやけに重たい指輪を握りしめていたイエリは、しかし、気がつけば立ち上がり叫んでいた。

「ヤルノ。」

立ち止まり、ふり返ったヤルノにむけてイエリは右手を力いっぱい振った。キラキラと大きな放物線を描いて飛んできたものを受け止めたヤルノは、困った声を出した。

「おい、これは……。」

「それはお前を縛るものじゃない。お守りのようなものだ。それがあつたって、なくなつて、お前が俺の親友であることには変わらないぞ。つまらない事に囚われるな、前だけ向いて行け。」

イエリの必死の言葉がヤルノまで届いたのかわからない。だが、自分に帰ってきたものをしっかりと握りしめたまま、ヤルノは大きく手を振って叫び返してきた。その表情までは暗闇にまぎれて見えなかったが、確かに声はいつもの明るいヤルノだった。

「ありがとう！ ライサの事頼んだよ。」

「ああ。」

そして、歩み去るヤルノはもうふり返ること無かった。

「あんなことを偉そうに言っておいて、結局俺もこれに囚われているよな。」

胸元にかかった指輪を服の上から握りしめて、自嘲するようにイェリは笑った。　本当はそんなことではないと気付いてしまっている。　本当は、親友との約束に囚われたふりをして、自分の想いに言い訳をしているだけなのだ。　今の優柔不断な自分を見たら、ヤルノは何と言っただろうか。　ヤルノの事だから「しょうがない奴だなあ。」とかいって小突いた後、笑って許してくれそうだ。　あの頃のように、何もかも許されて、心から笑う事がまたあるだろうか。　イェリは暗い空を見上げた。

その日、警備隊の詰め所は朝からピリピリとした空気が流れていた。

「おはようございます。 副長。」

そういつて、部下のケケがいつもより派手な音を立ててライサの机の上に書類の束を置いた。 彼のあからさまな態度にライサは少し呆れた顔で書類から目を上げた。

「いい加減に機嫌を直したらどうだ、ケケ。」

ライサの言葉はケケに油を注いだだけだったようで、これ以上ないようなしかめっ面のケケのこぶしが書類の上にドンっとたたきつけられた。

「自分は納得がいきません。 警備隊が軍隊に再編されるわ、王都の騎士団の連中が来るわ、そのうえ隊長が退役して、ライサ副長を差し置いてどこの誰ともわからん奴が隊長就任。 俺達をバカにするにも程があるってもんですっ！」

「上が決めた事だ。」

冷静を装うライサにしても、すべてに納得しているわけではないが、部下の手前不満を表に出すわけにもいかなかった。 夜ごと、家のソファアのクッションが犠牲になっている事は、幸いにも息子しか知らない。

「隊長が帰ってくるまでに、その顔なんとかしておけよ。」

今朝の便で到着する軍の先遣隊のために、隊長を始め数名が空港に迎えに行っている。それさえも、軍事機密とやらで、誰が何名来るのかさえライサ達には知らされていない。小隊とはいえ辺境警備隊もなめられたものだ。これでは、この先が思いやられる。

「副長・・・！」

更に言い募ろうとしたケケの言葉は、顔面にはたきつけられた書類の束にさえぎられた。いつの間にか、鬼の形相でミラが腰に手を当てケケを睨んでいた。

「その顔なんとかしろって言われたでしょう。少しはましになっただかしら。」

真つ赤になった鼻を押さえながら言葉も出ないケケをよそ目に、ミラはにつこりと表情を変えて、先ほどの書類の束をライサに差し出した。

「はい、ライサ副長。先月分の収支報告です。確認とサイン、

お願いしますね。」

「・・・ありがとう。」

もう同情の言葉もない。痛むこめかみを押さえながら、ライサはちよつとした本ほどの分厚さがあるそれを大人しく受け取った。

「ミラさんは、悔しくないんですか。」

すっかり毒気を抜かれたケケは、それでも弱々しくつぶやいた。
ミラはまた厳しい表情でケケに向きなおる。

「もちろん腹は立っているわ。書類に当たったぐらいで気がすむのなら、その棚全部ひっくり返したっていいくらいよ。」

それは是非やめてほしいと、ライサは心から思った。

「でもね、ここで一番つらい立場にいるのは誰？ あなたでも、私でもない。副長が黙って耐えているのに、その彼女の思いを踏みにじるほど私は馬鹿じゃないわ。それに、たとえどんな手段でも、この警備隊が強くなれるというのなら私は歓迎する。飛竜隊、上等。それで、この街を守るのなら、私がばかにされるのくらい安いものよ。」

いつの間にか、静まり返った詰所にいる全員の目がミラに注がれていた。一番近くで、彼女の強いまなざしを向けられ、ケケは無言で目をそらした。

ミラの父親が警備隊の何代か前の副長だった事は、隊の全員が知っている。彼がどんな死に方をしたのか、その後彼女の家族がどれだけ苦労したかも。最前線で戦うことを望みながら、それが出来ないミラがいつもどれだけ悔しい思いをしているか、それでも誰よりもこの街を愛し、守りたいと思っているか知らないものはここにはいなかった。

ライサは椅子から立ち上がり、ギュツと眉を寄せたままのミラの方をやさしく抱いた。

「みんな、それぞれ思うところはあるだろうが、軍の態度を変えさせることが出来るのは私達自身の行動だ。私は西方辺境警備隊の

一員であることを誇りに思っているし、なにより、アレクセイ隊長の下で働ける事を幸せに思う。名前や管轄が変わるうが、私達が守るべきものは変わらないという隊長の意志を引き継いでいくことが、私達が今やらなければならない事じゃないか。」

ライサが部屋を見回すと、あちらこちらから力強い頷きが帰ってきた。

「俺、顔洗って出直してきます。」

俯いていたケケは、真っ赤になった顔を上げて踵を返すと部屋から駆け出して行った。たまに、熱くなりすぎる事はあるが悪い青年ではないのだ。ライサはミラの方からそつと手を外した。

「大丈夫？」

「ええ、ありがとうライサ。もう大丈夫よ。」

「じゃあ、ミラのいれたおいしい珈琲が飲みたいのだけど。」

「了解。すぐ入れてくるわ。」

そう言ったミラは、もういつも通りの笑顔を見せた。彼女がその場を離れてから、ライサはそつと息を吐き出した。ああはいつたものの、このような状況がこの先しばらく続くのかと思うと気が重くなる。せめて、次に送られてくる隊長が少しでも理解のある人物であることを願うばかりだ。

ミラの入れてくれた珈琲を飲んでみると、廊下が急に騒がしくなった。ボタンと音を立ててケケとフレイが部屋に駆け込んでくる。

「副長、大変です！」

何事かと、全員の視線が集まる。一瞬、巡回飛行隊に何かあったのかと思ったが、それならば、裏口から誰かが駆け込んでくるはずだ。「どうした。」と言いかけたライサは、フレイの後ろから駆け込んできた小さな人影に目を奪われた。鍛冶屋の息子のエーリク。ヤルノより3つ年上のしっかりした子だ。今は学校に行っているはずなのになぜこんなところにいるのか。

「おばさんっ、大変、なんだ。ヤルノがつ。」

走ってきたのだろう、顔を真っ赤にして息も切れ切れのエーリクにライサは駆け寄った。

「ヤルノが、どうかしたの？」

「ヤルノが、つれてかれちゃうよっ。」

エーリクの前に座り込んだライサも、周りに集まってきた隊員達も、エーリクの言いたい事が理解できずに困惑顔になった。ライサはケケを見上げた。

「俺も良く分からないのですが、この子がいきなり駆け込んできて学校に知らない人達がやって来て、ヤルノを連れて行くとうとしていると。」

ようやく事態を理解して、ライサは自分の背中に冷たい汗が流れるのを感じた。目の前のエーリクを覗き込んで聞いた声が、かすれている。

「どんな、人だった？」

「全然知らない人達。お屋敷にいる人みたいな服を着た女の人と、黒服の男の人がいっぱい。都から来たって言っていた。」

一瞬気が遠くなりかける。

「それで、ヤルノは。」

「今、先生達が必死に止めてるよ。おばさんと呼んできてって。」

無意識のうちにライサは立ちあがった。都から来た貴族。黒服は護衛の者たちだろう。それが誰かは聞かなくても分かった。ついに見つかってしまったのだ。なぜ。なぜ、あの人は自分からすべてを奪ってしまうのだ。大切なものを全部。

「ライサっ。」

力いっぱい揺さぶられて、はっと我に帰ると、ミラに両手をつかまれている。

「しっかりして、ライサ。早く学校へ。」

ミラに手を引っ張られて、2、3歩前に出たライサははっと立ち止まる。

「でも、」

隊長が不在でこのような大事な日に、今、ライサが詰所を離れるわけにはいかない。だが、立ち止まったライサの背中を力強く前に推したのはケケだった。

「行ってください、副長。ここは僕たちで何とかかります。フ

レイ、お前は隊長に連絡を。」

「分かった。」

いつもケケと言い争いばかりをしているフレイが素直に頷いて、一瞬ライサを見上げた後部屋から駆け出して行く。

「人手が必要でしょう。　わしらも、すぐに追いかけます。」

横から隊で一番古株のティモがライサの肩に手を置いて言った。

ライサはぐるつと部屋を見渡したが、全員が真剣な顔をしている。

彼らに詳しい事情を話した事は無いのに、誰もライサがヤルノのもとに行くことを疑問に思っている様子は無い。　じわりと、涙が出てきそつになるのをこらえて、ライサは頭を下げた。

「ごめん。　お願いします。」

後はもう迷うことなく、ミラを連れてライサは走り出した。

走るといのはこんなにづらいことだっただろうか。運の悪い事に、ヤルノの通う学校と警備隊本部は、丘の中央にある時台を挟んで街のほとんど反対側に位置していた。それでも森林火災で出勤する時などは、子供くらいある重さの装備を背負って一日中森の中を駆け回るのだ、普段から鍛え上げているライサにとってはそれほど距離ではないはずだった。それなのに走っても走っても前に進んでいる気がしない。いつの間にか、ミラを大きく引き離していることも、全力で走るライサを通りがかりの人が驚いてふり返るのも、気にも留めずにライサは走り続けた。

校舎に駆け込むと、事が起きている教室はすぐにわかった。ドアの前に子供たちが群がっている。とりあえずライサは間に合ったようだ。

「あ、ヤルノのおかあさんだ。」

「おばちゃん早く!」

ライサに気付いた子供たちが口々に声を上げるのをかきわけるようにして進む。若い女性が一人、蒼白な顔をしてドアの前に張り付いていたが、ライサの姿を見るとほっとしたような表情を浮かべた。

「ヤルノは、まだ中に?」

教員助手をしているイーナは、小刻みに頷いた。

「はい。他の先生方も一緒に中にいらっしやいます。」

「他に、中に残っている子供はいます？」

「いいえ。」

「ケガ人は？」

「誰も。ヤルノを連れて行こうとただけで、他の子どもたちは大丈夫です。」

自分も後から来たので中の様子まではわからないのですが、とイーナは不安げに首を振った。

「危険は無いと思うけど、ここにいる子供たちを他の場所へ移してください。後から、他の警備隊員が来ますので、ここは私達に任せて子供たちをよろしくお願いします。」

イーナを安心させるようにライサはゆっくりと柔らかい声で言った。さっきまで母親だった自分が、徐々に警備隊副長としての自分に戻っていく。「いかなる時も冷静であれ」軍に入って一番初めに教わったことだ。冷静さをなくせば、勝てる相手にも勝てなくなる。しかもライサがこれから対決するのは、彼女にとって天敵といってもいい相手なのだから。

服を引っ張られて下をむくと、ヤルノと仲のよい子たちが、それぞれに真剣な眼差しでライサを見上げてきた。今にも泣き出しそうな女の子の頭をやさしくなげて「大丈夫よ。」と微笑みかける。大丈夫、冷静になれ。深呼吸して息を整えライサはドアをあけて部屋に入った。

部屋の中にいた全員の視線が一斉にライサに突き刺さる。ドアの

前で立ちふさがるように、ヤルノの担任のニーナがいた。その一歩向こうには、もう一人の教員のクルトと、用務員のマウリ。いつもカクシャクとしているマウリ老人だけではなく、温和だけれども少し気の弱そうなところがあるクルトまでもが箒とモップを手に構えていて、そんな場合ではないと分かつてはいたがライサは微笑みそうになってしまった。王都でコレル家の人間に掃除用具を突き付ける勇気をもった人間がどれほどいるだろう。

「ライサさん。」

ニーナがライサを見て硬くなった表情を少し和らげた。この50半ばの品の良い夫人は、この街でライサ達の家庭事情を知る数少ない一人であり、子育てから生活の事までいつも心よく相談に乗ってくれる。

「ありがとうございます。」彼女だけに聞こえるよう方に手を置いてささやいた後、その先にいる二人の間を抜けるように前に出たライサは、ついに7年ぶりになるだろう人物と対面した。

「おひさしぶりね。」

あいかわらず人を見下したような冷たい声。場違いなほど高価な服に身を包んだコレル夫人は昔と変わらず、汚いものでも見るような眼をライサに向けた。7年の歳月もこの高慢な女性を変えるには至らなかつたらしい。ただ、美しかった髪が栗色から白いものに変わったのと、その小さな顔に刻まれた皺が、時の流れを教えるくれる。夫人の隣にいる壮年の男性が確か、コレル家の執事。そして、その後ろの4人の黒ずくめが護衛官だろう。そのうちの

一人に、抱え込まれるようにしてヤルノが立っていた。顔色は蒼白で目が少しうるんでいるが、取り乱すこともなく、見たところ怪我などもしていないようだ。この人がヤルノを傷つけはしないとわかっていたが、ライサは少しほっとした。ヤルノにかすかに頷いて見せると、ライサはコレル夫人を正面から見つめた。7年前に奪われたものを、今度は守りとおさなくてはならない。

「お久しぶりです、コレル夫人。私の息子を返していただけますか。」

ずっと一歩前に出たライサに、2人の黒ずくめが無言のままコレル夫人の前に出ようとするが、当の婦人の細い手の動きがそれを制した。彼女はライサを見て、深くため息をついた。

「それはこちらの台詞です。私の孫を返してもらいましょうか。」

男の腕の中でヤルノがびくつと震え、見開いた眼でコレル夫人を見上げるのが見えた。

「ヤルノは私の息子です。」

「ヤルノ。」コレル夫人は愛おしそうにその名を呟いた。

「そのような名を、よく恥ずかしげもなくつけられたこと。その上、こそこそと隠れ回って。まったく、卑しいものをする事といえよ。この子はヤルノの息子、高貴なるコレル家の血をひくものです。このような辺境の地で、お前のようなものと暮らしているような子ではないのですよ。わたくしが都に連れて参ります。」

「子供の前です。そのような言い方はやめてください。」

ライサの絞り出すような声に、コレル夫人は鼻で笑うように顎を上げてライサを一瞥しただけで、視線を後ろの3人に移す。

「あなた方も、いい加減にわかったでしょう。わたくしは、この子の保護に正当な権利を持っております。手荒な事は致したくありません、道をお開けなさい。コレル家に立てついて後から困るのはあなた方ですよ。」

ライサの後ろから戸惑いの気配が伝わってきた。無理もない。

コレル夫人には命令する事に慣れた人だけが持つ、圧倒的な威圧感があった。彼女と話をしていると相手が正しく、自分は間違っているような錯覚に陥ってしまう。

「コレル夫人……。」

「おだまりなさい。お前に気安く名前を呼ばれる覚えはありません。」

口を開きかけたライサを、コレル夫人がぴしゃりと遮った。

「女が警備隊などという危険な仕事に就いた上に、このような小さな子を夜遅くまで一人で不安に待たせておく。母子一人で今後の生活の保障もなく、教育にしても限られた選択肢しかない。それが、この子にとって正しい家庭環境といえますか。わたくしが、この子に王都で最高の生活と教育を受けさせてやるのを止める権利が、お前にあるとも言うのですか。」

かみしめた唇から、ライサの口内に鉄錆の味が広がっていった。確かにコレル夫人の言うことは間違っていない。だがそれがすべて正しいわけでもない。小さなヤルノにはいつもさびしい思いをさせているし、母親だけではどうしても至らないところもある。それでも、家族として一番大切なものが自分たちの暮らしにはあるとライサは信じている。

コレル家の財力と権力をもつてすれば、子供に最高の生活と、国一番の教育を与える事が出来るだろう。だが、コレル夫人が求めているのは、世間にうらやまれる様な、彼女にとって満足できるコレル家の人型を育て上げることだ。彼女の言うように最高の環境で育てられたヤルノはどれだけ幸せといえただろうか。そして、何一つ困ることのない生活をしているはずのコレル夫人自身が、彼女の老いた顔に幸せのかけらも見つけることが出来ないのはどうしたわけだろうか。

『あの人も可哀そうな人だよ。コレル家という鎖にがんじがらめにされて身動きも取れない。だからといって、あの人のしたこと
が許されるわけではないけれど。あんな人でも、俺の母親だから』

だから愛しているのだ、と。コレル夫人を恨んでいないのかと、一度だけ生前のヤルノに聞いたことがある。その時のヤルノの悲しそうな顔を忘れる事が出来ない。

あの時は理解できなかったが、母親になった今、コレル夫人の気持ちがライサも少し分かる様な気がした。手段はともかく、自分の息子を彼女なりに可愛がっていたのだ。だから、良くも悪くも、自分の世界を作り上げそこから出てこようとしないう彼女を、ただ哀れに思う。コレル夫人がほんの少し見方を変えることが出来ていたら、息子がどれほど彼女を愛していたか、そして息子が一番ほしがっていたのが母親からの愛情だと気づくことができただろう。そうすれば2人ともが今、幸せに笑っていられたかもしれない。

小さなヤルノを第二のヤルノにするわけにはいかない。

もうこれ以上言葉を交わしても、7年前と同じようにコレル夫人と理解しあうことはできないだろう。ライサの心を絶望と悲しみが支配していった。ライサはもう一歩前に出て、今度は無言で動いて立ちふさがる黒ずくめを見上げた。

「息子を、返してください。」

後ろのドアが開いて誰かが部屋に入ってくる気配がした。ミラと後発の隊員が到着したのだろう。だが、ライサはふり返ることなく護衛官たちをけん制するように睨みつけ続けていた。さすがコレル家の護衛官だけあって、全員が何気なく立っているだけだが一分の隙もない。ライサ1人でこの4人を相手にするのはきつだろう。そうかと言って警備隊の仲間を道連れにすることはできない。ライサは左腰に下げた剣の柄に手を伸ばした。

「ライサっ」

ミラの悲鳴に似た叫びを、あえて聞こえなかったふりをする。治安警備隊が使用している捕獲や防御に特化した短剣と違い、ライサたち辺境警備隊の装備に使われるこの剣は、軍でも佩用されていて小型の竜種であればこれで対応できるような殺傷能力の高いものだ。それだけに、理由もなく民間人相手にこれを抜けば犯罪行為に相当する。たとえ相手が格闘のプロであろうと、除隊処分ではすまないだろう。

だが、ここでヤルノを失うことにくらべれば、それがなんだというのだろう。ヤルノは希望、喜び、生きがい、ライサのすべてだ。武力に訴える事が正しいとは決して思わないが、後から後悔することはもうしたくない。

ただヤルノと二人、静かに幸せに生きたかっただけなのに。 自分

の瞳から一筋の涙がこぼれ落ちた事には気がつかず、ライサは剣の柄を握る手に力を入れた。

「常に冷静になれと、教えたはずだ。」

剣を抜こうとしたその瞬間、横から伸びてきた大きな力強い手がライサの右手を押し止めた。聞こえるはずのない、だが聞き間違うはずもない懐かしい声に、ライサは眼を見開いて手の主を見上げた。

「どうして……。」

やっと口にできた言葉は空気が漏れるような音にしかならなかった。見上げたライサの眼に映ったのは、女性にしては長身の彼女よりも頭一つ以上は上にある懐かしい顔だった。しかしそれは、どこかいたずらな青年っぽさが抜けきらない、無茶を楽しんでいる様だったライサのよく知る彼の表情ではない。以前の飄々としてところが姿を消し、風雨にさらされた老木のように貫録と厳しさが彼に刻みこまれ、しかも彼の整った顔立ちを損なうどころかさらに魅力的なものに変えていた。ただ、彼女を見下ろす瞳だけが昔と少しも変わっていなかった。

「イエリ・ライティオ。なぜお前がここに……。」

言葉にならなかったライサの疑問を代弁するようにコレル夫人がつぶやくのが聞こえた。しかしイエリはその声に振り向く事もなく、その穏やかな瞳でライサを見つめ続けている。大きな手がかすかに力を抜いたライサの手をつかんで剣の柄から外し、次にその手が右肩に回されたと気付いた時には、彼女は力強く抱き寄せられていた。

「遅くなつてすまない。」

甘い声とともに髪に吐息がかかる。誰かが息をのむ音が聞こえた。いや、それとも自分自身が立てた音だったかもしれない。長年軍人をしてきて、声を上げるどころか指一つ動かせなくなる状況に陥ったことなどあっただろうか。抱きしめられて額に口づけされ

ていると分かっている、頭で理解が追い付かない。それなのに、思いのほか熱い彼の息からかかるところから、熱せられたように身体があつくなくていく。自分は今、十代の小娘の様に真っ赤な顔をしているに違いない。

視界に映るたくましい胸元に耐えきれず、何とか腕の中から抜け出そうとやっと動くようになった体をひねろうとすると、ライサの体にまわされた手に力が込められた。

「落ち着くんだ。ヤルノを取り戻す。」

耳元でひどく冷静な声がした。

「大丈夫だ。俺に話を合わせろ。合図をしたら子供を助け出せ、他のは俺が引き受ける。出来るか？」

ライサだけに聞こえるように、低く早口でささやかれた言葉の内容が頭に入るまで、数秒の時間がかかった。理解した瞬間、先ほどまでの熱が驚くほどさっと引いて、代わりにぞわっと鳥肌が立った。よく覚えている、この感覚。

飛竜隊にいたのは7年も前なのに昨日の事の様にはつきりと思いつける。どれ程無謀な作戦でも、どんな境地に陥つても、この男が前にいる、それだけで隊の士気が上がった。実際「葬儀屋」とまで呼ばれていた三番隊は彼が指揮をとるようになってから死人を出さなくなったのだ。もう駄目だと思ったときでも、この男に「大丈夫だ。」といわれれば、戦慄とともに、いつも新たな気力がわいてきた。そして、ライサ達の彼に対する信頼は絶対だった。

ようやく冷静になって、ライサは自分がどれほど冷静さを失っていたかに気がついた。何があってもこの男の事は信用できる。イエ

りにわかるようにかすかにうなずくと、何故かまた一瞬だけ力を込めて抱きしめられた後、その手が離れていった。ライサが上を見ると、イエリの口元に笑みが浮かんでいた。片方の口元だけを上げる彼の癖は、さつき見た貫録のある大人ではなく、まるでいたずらが成功した少年の様な笑い方だった。昔とまるで変わっていないその笑みがライサに見えたのはほんの瞬間で、イエリはライサの横に並ぶようにしてコレル夫人に向きなあった。

「ご無沙汰しています。コレル夫人。お元気そうでなによりです。」

「何を白々しい。お前がなぜここにいるのですかつ。」

無視されるのになれていないコレル夫人が、イエリのわざとらしいほど丁寧なあいさつに、先ほどと打って変わったようないら立った声を上げた。先ほどまでとは空気が違う。その場の主導権は今や完全にイエリが握っていた。

「コレル夫人。貴方がここにいらっしゃるほど、おかしいことではないと思いますが。貴方がわざわざこのような辺境の町に、誘拐まがいな事をしにいらっしゃるほどお暇だとは知りませんでしたよ。」

イエリの声にライサは思わず身震いしそうになった。これ以上ないほど丁寧で静かな物言いだが、こういう時ほど声を荒げて怒鳴られるよりもよほど恐ろしい事をライサは長年の経験から知っている。

「ゆ、誘拐？ 何を無礼な。だいたい、お前には何の関係もない事でしょう。わたくしはこの子の保護に正当な権利を・・・」

「正当？」

イエリがコレル夫人の言葉をさえぎった。その静かな声にかすかに怒りがこもる。

「子供を母親から無理やり引き離すことが正当ですか？」

「法律にも明記されています。保護責任を全うしない親の代わりに、その親族が子供を保護する事が出来ると。」

初めて、コレル夫人の影のように付き添っていた執事が口をはさんだが、イエリにひと睨みされると、瞬時に顔色を変えて引き下がった。イエリはゆっくりと執事から、夫人そして黒ずくめと彼に抱えられている子供に目を移し、意味ありげに口元をゆがめた。

「親族、ですか。あなたが、その子の。」

「何が言いたいのですか。」

何がおかしいのか、喉の奥で笑い声を立てるイエリにコレル夫人が咬みつく様に声を上げるが、そんな彼女を全く無視して、イエリはいきなりライサの腰に手を回すと彼女をまた引き寄せた。

「ライサ。僕達の事を、この人に何も説明していないのかい。」

夫人に対するのとは別人のような優しく甘い声、それは、ライサが彼の部下だった時は決してかけられる事がなかった声で、彼女はただ首を振るしかなかった。この男を信頼するとは決めたが、彼が何をしたいのかが全く分からない。

「全く君は真面目だな。秘密にとは言ったけれど、こんなときまでそれを守らなくてもいいのに。」

またライサの額に口づけを落としてから、たぶんライサ以上にイエリの言う事が理解できないのだろう、完全に意気をのまれたコレル夫人に目を向けた。

「僕もその子とは全く無関係というわけではないですよ。その子の、首にかかっている指輪をご覧になった事がありますか、コレル夫人。」

「ゆ、指輪ですって？」

イエリの視線を追うようにヤルノに目をやったコレル夫人は、その首にかかった鎖を見つけ戸惑いながらも隣に立つ部下に向けて顎をしゃくった。

「それ僕のだよ。　やだよ。」

あわてて鎖を押さえこもうとするヤルノをもう一人の黒ずくめが押え込んでいる間に、その部下は手早くヤルノの首から鎖を引き抜くとそれを待ち受けるコレル夫人に手渡した。

「これは・・・。」

「見覚えがありますか。　その内側です。」

手の上にある古い銀色の指輪を見て目を細めたコレル夫人をイエリが促した。　その内側に何が彫られているのか知っているライサは、ようやくイエリが何をしたいか判って来てまた自分の耳が赤くなってくるのを感じていた。　なにが「大丈夫」なんだろう。　彼の思惑がライサの予想通りなら、確かにヤルノをコレル家から守るのにこれ以上の手は無いかもしれない。　しかし、なんて突拍子もない事をこの人は考えるのだろうか。

「こ、こんな。」

指輪の内側を覗き込んだコレル夫人が顔色を蒼白に変えて、怯えたように指輪を床に投げ捨てた。ちょうど夫人とイエリの間の落ちた指輪は、床の上を鎖ともつれあうようにして転がって、全員の視線が集まる中でまるで意志を持っているかのようにゆっくりと静かに倒れた。校章の指輪はコレル夫人にも見覚えがあったのだろう。

だが、その内側に彼女が見つけたのは、「イエリ・ライティオ」という元の持ち主の名前だったはずだ。それは、卒業の時に彼の親友であったヤルノ・コレルの物と交換され、その後ライサに預けられて今はその息子に託されている。しかしそのような事情を知らぬコレル夫人にとって、イエリにライサと意味ありげな様子を見せつけられた後では、その指輪に刻まれた名前は彼女の中に一つの疑惑を植え付けるのに十分だったようだ。夫人の目が、息子の幼い頃に良く似た少年と、その少年と同じ髪と目の色を持った男の間を何度も行きかう。

「そんな、はずが。この子がヤルノの子ではないと？　こんなにヤルノにそっくりで・・・」

「貴方ともあろう方がまさか、ヤルノと顔が似ているのに、などとおっしゃる気ではないでしょうね、コレル夫人。」

尻すばみになっていく夫人のつぶやきを引き継ぐようにイエリが一步前に出た。ライサの時とは違い、黒ずくめの護衛達がイエリに気圧されたように一步後ろに下がったのは、主人の動揺が伝わったからだろうか、それとも王都の武道大会で常に上位に顔を出し、特に棒術では伝説的な記録を持つこの男の名前に恐れをなしたからだろうか。ライサにはさっきまで壁のように見えていた男達が小さく見え、代わりにイエリの背中がやけに大きく感じた。イエリはゆっくりと床に手を伸ばして大切に指輪を拾い上げると、その手

の中に握りしめた。 もう一步前に出たイエリの口元が一瞬、苦笑とも苦痛ともいえる風に歪んだ。

「僕とヤルノが、幼い頃兄弟と間違えられるほど良く似ていたのを忘れたとは言わせませんよ。 ヤルノの影武者に仕立てるために、彼と顔立ちが似ている僕を、父を亡くして生活に困っていた母親から金で買い取ったのは、貴方ではありませんでしたか。」

コレル夫人の喉の奥からひつという音が漏れて、倒れこむように下がったところを後ろにいた男に支えられた。 初めて聞く話にライサも息をのんだが、後ろにまわさえたイエリの手が合図を送っているのに気がついて、その驚きをなんとか頭の隅に押しやった。 ゆっくりとカウントされるイエリの指の動きに意識を集中させる。

「それに、これは貴方が投げ捨て良い様なものではないですよ。」

イエリが手の中で指輪を転がす音がした。

「これは、持ち主に返しておきましょう。」

イエリの手が動いて、銀色の塊が大きく放物線を描いて空中を飛んでいき、ヤルノを押さえていた男の手つられるようにそれに伸ばされた。 次の瞬間イエリが滑るように前に出ると、ライサがヤルノの方に飛びだすのとどちらが早かっただろうか。

ライサは目の前の男一人だけにすべてを集中させた。 指輪に気を取られていた男は、一瞬ライサに対応するのが遅れる。 その一瞬で十分だった。 がら空きになった男の懷に飛び込むようにして、ライサは鞘に入ったままの剣を男の鳩尾に叩き入れた。 突っ立たままのヤルノを抱えあげて、倒れこむことは無かったがうめき声

を上げて動きが止まった男から後ろに飛び離れる。更に後ずさるライサの後ろから数人の人影が飛び出してきて彼女をかばうように前に並んだ。良く見慣れたケケやティモ達警備隊の背中、そして懐かしい白い飛竜隊の制服を着た若い男。

すべては数秒ほどの短い間だったのに、ライサには何もかもがゆっくりと動いて見えた。ただ、早すぎる自分の鼓動だけが耳の中で痛いほど大きくこだましていた。

何かがはじけたように急に音と時間が戻って来た時には、人垣の向こうでもすでに全部が片付いていた。床に倒れこんで動かない4人の黒ずくめ、執事は腰の剣に手をかけた姿勢のまま、イエリがいつの間に手にした箒の柄を喉元に突き付けられ固まっていた。その後ろでコレル夫人だけが一人、先ほどと変わらない位置で彫像のように立ち尽くしていた。張り詰めた空気の中で、腕にかかえたヤルノの体温だけがやけに温かくて、そのぬくもりを確かめるようにライサはヤルノ子供らしく柔らかな髪の中に顔をうずめた。

「かあさん。」

小さなつぶやきが聞こえて、ライサの首にまだ幼い腕がまわされた。そうしたまま親子はただ無言で抱きしめあった。

「形勢逆転。　　というところでしょうか。」

悠然としたイエリの声が聞こえてライサが顔を上げると、怒りと屈辱で顔を醜くゆがめたコレル夫人と目があつた。

「この・・・、この売女めっ。」

コレル夫人から向けられる悪意を持った視線には慣れているはずだったが、今までにこれほどの憎悪が込められていた事は無かつただろう。　それなのに、仲間達の背中越しに見る夫人の姿があまりにも小さく見えて、ライサは恐れも怒りも感じることなく真っ直ぐにその視線を見つめ返した。　夫人の言葉が汚いほどに、彼女が卑小な生き物で、自分が飛竜に乗って綺麗な空の高みからそれを見下ろしているような感覚がした。　ただ、そう感じてしまう事がライサにはどう仕様もなく悲しかった。

空気を切り裂く音を立ててイエリが箒を一振りした。　その柄は夫人ではなく起き上がりかけていた黒ずくめに向けられていたが、コレル夫人はびくつと震えて身をすくませた。

「貴方が貴族としての自覚をお持ちであるのなら、もう少し口を慎まれた方がよいでしょう。　貴方には彼女をとがめる権利は何もない。　僕もあの時のように貴方の言う事にうなづくことしかできなかった子供ではありませんから、これ以上僕の大切な人達を傷つけるというのなら、貴方であろうと容赦はしませんよ、コレル夫人。」

そこでイエリは少し息をついて、まるで子供をなだめるように声を和らげた。

「夫人。貴方には感謝しているのですよ。貴方のおかげで、母は病気を治せ、弟妹達は飢えずに済みましたし、一度は故郷を亡くした僕も、都で養父達に大切に育てられ、そして何よりもヤルノという得難い親友に出会う事が出来ました。ですから、これ以上貴方の醜態をタンペレ領主の前でさらすようなことはしたくありません。」

少し後ろを振り返ったイエリにつられて後ろを見たライサは、そこに思いがけないほどたくさんの人がいる事に気づいて目を見張った。ニーナ達教員のほかに、ミラ、フレイ、アレクセイ隊長と数人の隊員、ライサの知らない騎士団員。そのさらに後ろから護衛兵を連れた壮年の男性が前へ進み出た。人の上に立つ事に慣れた人物だけが持つ風格をまとい、悠然と歩みを進めてイエリの隣に並んだのは、驚いた事にタンペレ領主アラン・カウパルエだった。

「お初にお目にかかりますな。」

ゆったりとした笑みさえ浮かべているアラン領主とは対照的にコレル夫人は眼を見開いて顔色をなくした。ただの領主とは違い、アランはかつてのカウパ公国の血を受け継ぐ、この国で4人しかいない州公の一人。今は中央の権力争いから離れているとは言っても、大貴族コレル家に頭を下げる必要のない数少ない人物だった。アランの名がコレル夫人に彼女が貴族の一員である事を思い出させたのは間違いない。良くも悪くも、コレル夫人はその人生のすべてを貴族社会の中で過ごし、陰謀渦巻くその中を生き抜いてきた人だった。茫然とした表情を一瞬で押しやり、コレル夫人は先ほどとは別人のような表情でピンと背筋を伸ばすと、服の裾を持ち上げて軽くひざを曲げ優雅に挨拶をした。ライサでさえはっとさせられるほど、一分の隙もない完璧な作法だった。

「アンナ・レーナ・コレルと申します。 アルエ」アランにおきましては、ご機嫌麗しく・・・」

「いえ、ヘイノ」コレル。 ここは都から遠く離れた辺境の街。 そのようなあいさつは不要に願います。」

正式な挨拶をはじめようとしたコレル夫人をアランが片手を上げてさえぎった。 その「辺境」という言葉に心なしか力が入っていたのはライサの聞き違いではないだろう。 先ほどそれを自ら口にしたコレル夫人もそれに気がついたのだろう、何かを言いかけていた口をつぐんだ。

「そうはいつでも、ヘイノ」コレル。 私としてはここはそれほど子供にとって住みにくい街ではないと思っっているのですよ。 都と違い豪華なものは何もないですが、ここには仲間を心配して駆け付ける大人も、生徒のために大男に立ち向かう教員も、心から息子を愛している母親もいますからな。 この街も捨てたものじゃないでしょう？ それに。」

アランはそう言って、軽く振りかえると初めてライサの方を見た。

あきれた事に彼の口元には「にやり」としか形容できない様な笑みが浮かんでいた。 どうやら彼はこの場の成り行きを楽しんでいるらしい。 普段、泥だらけになつて畑を耕していたり、ふらりと警備隊に遊びに来て翼竜を乗り回してみたり、何かと貴族らしからぬ行動をとる気さくなアランしか知らなかったが、やはり彼も食うか食われるかの謀略の世界を生きてきた人なのだとライサは悟った。 そんなライサの考えを知ってか知らずか、アランは彼女に向かって軽く片目をつぶってみせるとまた前を向いた。

「それに、貴方がたがどういった関係かは存じ上げないが、この度、

私がこの子の後見人をひきうけることになりましたね。カビの生えた法律など持ち出さんでも、この子の事は大丈夫。貴方が心配なさるには及びませんよ。」

その言葉がコレル夫人にとって決定的な何かだったのだろう、しばらくの間アランを無言で見つめていたコレル夫人の口元が上がり、そこからクスリという笑い声が漏れた。夫人がどうかしてしまつたのではないかと驚くライサの前で、夫人の笑い声は徐々に大きくなっていった。ヒステリックな笑い方ではない、こんな風に本当に楽しそうに声を立てて笑う夫人をライサは初めてみた。笑いながらコレル夫人は初めて自分からイエリに歩み寄り、背の高い彼を見上げてようやく笑いを止めた。

「イエリ・ライティオ、あいかわらず用意周到な事。自分の思い通りになって、さぞや満足でしょうね。だからわたくしは言いましたのに。夫がお前をライティオ家の養子に出すなどとバカな事を言い出した時に、わたくしは言ったのです、お前はいずれコレル家に仇をなす存在になると。野放しにするにはお前は知りすぎている、そしてあまりにも賢すぎると。貴方にもご忠告しておきましょう、アルエ「アラン。この者を、飼い馴らそうなどとお考えになるのはおよしなさいませ。これは、周りのものを食らい尽くす野竜。人の手に負えるような存在ではありませんよ。」

言うだけ言ってしまうと、コレル夫人は執事に向かって短く「帰ります。」と告げ、すたすたと歩き出した。黒ずくめたちが慌てて立ち上がりその後を追うが、イエリはただ黙って立ち尽くすだけで彼らをもう止めようとはしなかった。教室を横切つて近くまで来たときに、コレル夫人がふと足を止めて、ライサ達をまたあの刺すような視線で一瞥した。

「お前もこれで満足でしょう。なぜ、お前の様な者が私の大切なものを全て奪い、手に入れる事が出来るのでしょうかね。」

苦笑交じりのつぶやきにライサは返す言葉が見つからず、ただコレル夫人を見つめ返した。たぶんその答えを知っていたけれど、それをどうこの女性に伝えればいいのか分からなかった。ライサの代わりに答えたのはイエリの低い声だった。

「それは、貴方の持っていないものを彼女が持っているからですよ。貴方も、今からでも遅くは無い、一度それが何かを考えて見られはいかがですか？ 失ったものを取り戻すことはできなくても、これ以上失わずに済むかもしれませんよ。」

イエリは夫人に背を向けたままで、足を止めた夫人もまたイエリの方に振り向く事は無かった。少しの間があつてから、まるで何事もなかったかのようにコレル夫人は歩き出すと教室から出て行った。アランが少し顎をしゃくると、彼について来ていた護衛が3人ほどコレル夫人達の後に続く。扉が閉まり、しばらくの間部屋に静寂が満ちた。

どれくらい時間が経っただろうか、呪縛の様な時間の中から最初に動いたのはイエリだった。彼は身をかがめて足元にあつた何かを拾い上げると、ライサの腕の中から降りたヤルノの前に歩み寄り、視線を合わすように片膝をついてそつとそれを差し出した。

「君の大切なものを、投げてしまった。傷はついてはいないけれど、許してくれるかい？」

ヤルノは目の前の大きな掌の中にある指輪からその手の持ち主へゆ

つくり顔をむけた。

「あなたは、ぼくのお父さんなの？」

「いや違うよ。でも、僕は君のお父さんの親友だったんだ。」

小さく戸惑う様な声に、イエリの低いがはっきりした声が答えた。

ヤルノはまたしばらくイエリを見つめていたが、やがてその小さな手を伸ばして「ありがとう。」と言つてにこつと笑いながらイエリから指輪を受け取った。イエリの方は何も言わずにただ微笑み返しただけだったが、二人の視線の間で言葉以上の何かが交わされたのをライサは感じた。それは見ていて気持ちがよくなる様な、とてもいい光景だった。

「イエリ・ライティオ、お前がお祭り好きな男だとは承知していたが、初日からこれでは先が思いやられるな。お前は物事を穩便に済ませると言う言葉を知らんのか。私の名前を貸すとは言ったが、このような事態で使われるとは聞いていないぞ。」

「僕としては、一番穩便な方法をとったつもりですけれどね。」

アラン領主のあきれた様な声にイエリは苦笑いをしながら立ち上がった。いつの間にか、ライサ達を取り巻くように人が集まっていた。今度は後ろから、アレクセイ隊長がアランの後をつなぐようにおおげさに溜息をついた。

「全く、貴方の能力は存分に認めますが、何事につけても説明不足なのはどうかしてほしいですね。この年になって、毎回このように驚かされてばかりいてはこちらの身が持ちませんよ。」

イエリが何かを答える前に、次はミラが一步前に出た。彼女も怒れば怒るほど、静かになるたちの人間なのだが、イエリを睨みつけるその瞳はまるで燃えているようだった。

「そうね。大体、私は兄さんが何故ここにいるのかという理由すら聞いていないのだけど。」

「兄さん!？」

ケケが素っ頓狂な声を上げたが、ミラは彼を全く無視したまま、両腕を組んでイエリを睨み続けていた。イエリは三方からの視線に降参とでも言うように軽く両手を挙げて、ライサの方を見た。

「何から説明するべきかな？」

急にどつと疲れが押し寄せてきて、ライサは大きくため息をついた。何だか、ここにいる全員に詐欺にあわされたような気分だ。聞きたいことは山ほどあったはずなのに、いろいろな事に驚きすぎて、もう何から聞いていいのかわからない。驚きの許容量というものがあるとするば、この半日でもう半年分ぐらいはそれを消費してしまった気がする。やっと開いた口からは、「なぜ」とか「どうして」という代わりに、愚痴の様な言葉が出てきた。

「貴方が、こんなに口がうまいとは知りませんでした。」

「管理職になると、飛竜の扱いよりも口の方ばかり鍛えられるんでね。腹芸の一つや二つ、出来るようになるものさ。」

間髪いれずに帰ってきた答えに、さすがにあきれてライサが言い返そうとした時、入り口のドアが派手な音を立てて押しあけられた。

「隊長つ、大変です！」

そこにいた全員が音を立ててふり返った。間が悪かったとしか言いようがないが、皆の射るような視線を受け、駆け込んできた警備隊員は気の毒なほど青ざめて立ち止まった。

「どうした。」

「は、はい。偵察隊から報告。C-3、H-7両区域で森林火災発生。現在第2段階まで燃え広がっています。」

彼の言葉で部屋中に緊張が走る。ライサの頭の中に、あの壁に貼

られていた白いカウパ地方の地図が浮かび上がり、その上に赤い印が二か所塗りつぶされていった。

「まったく、次から次へと！」

ケケがついた悪態を、その場の誰も咎めようとはしなかった。たぶん皆が同じことを思っていた。全く、今日はなんて厄介事ばかり起こる日なのだろう。だが、流石に一番に声をあげて指示を下したのはアレクセイ隊長だった。

「警備隊は全員、直ちに本部に戻れ。」

男たちの顔が瞬間に変わった。フレイやミラでさえ口元を引き締めると、皆が踵を返し足早に入口から出て行った。

「私達も同行させていただきます。」

イエリの言葉に隊長が軽くうなずくと、3人の騎士たちも彼らの後に続く。だが、ライサはその場に動けずにいた。

「ライサ副長、きみは来なくていい。」

「えっ。」

まるでライサの心を読んだかのような隊長の言葉にライサは思わず声を上げていた。戸口でイエリがこちらを振り返るのが見えた。

「君はここに残った方がいいだろう。」

ライサと、その手を握ったままの小さなヤルノを見つめて少し目を細め、アレクセイ隊長は幾分柔らかな口調で言いなおすと、ライサ

の返事を待たずに部屋を出て行った。ライサはギュツと唇をかみしめた。コレル夫人がまだこの街を離れていない今、ヤルノを一人にするのは躊躇われた。だが、警備隊の出動に副隊長の自分が加わらないわけにはいかない。ヤルノはライサにとって何よりも大切なものだ、けれど、この街を守れなければ自分はきっと後悔する。

「行ってきた、かあさん。」

ライサのとめどない思いに、答えを出してくれたのは幼い声だった。ライサがはつと下を見ると、ヤルノがにつこりと笑いながら彼女の手をぎゅっと握った。考える間もなく体が動いて、ライサはヤルノを抱きしめていた。

「この場の後始末は、私に任せてもらおう。君たちには、君たちにしかできない仕事があるだろう。」

アランの声に、ライサはヤルノを腕の中から離すと彼の顔を覗き込んだ。

「かあさんが行ってきたても、一人で大丈夫？」

「うん、大丈夫。まえに約束したでしょ？ かあさんは、ぼくらの街を守ってくれるって。」

ヤルノのまっすぐな瞳が、ライサを見つめ返していた。

「分かった。じゃあ、行ってきます。」

「いつてらっしゃい。」

もう一度しっかりとヤルノを抱きしめてから立ち上がると、ライサ

はアランとニーナ達に一礼し、ふり返ることなく足早に部屋を出た。

ライサは扉を出たところで、彼女を待っている人物を見つけた。
背の高い彼の髪が、窓からの光に透けてとてもきれいだった。

「行くか？」

ライサは無言で頷くと、先ほどここまで駆けてきた道を、イエリと一緒にまた走りだした。

> i 1 4 0 6 3 — 1 4 3 7 <

ライサは着なれた耐火服のズボンに足を通した。耐火、耐熱性のある砂蜥蜴の皮から作られた服は、木々の中でもお互いを見失わないように、目の覚めるような明るいオレンジ色に染め上げられている。同じ素材でできた鉄心の入ったブーツ、上着、帽子にゴーグルをつけ、道具類の入った小袋がついたベルトを締めてそこにナイフやライトを差し込む。それらを身につけるだけでもかなりの重量になるが、ライサは更にその上から降下用の機具が入った袋を背負うと、複雑なベルトを素早く装着していった。たとえ出勤のない日でも、機具の点検と装着訓練は警備隊の日課だ、何も考えなくても体が勝手に動く程度には体に染みついている。最後の留め金を締めあげ顔を上げると、隣でほぼ同時に装備をつけ終わったケケと目があつた。ケケがにやりと笑つたのを見て、ライサも思わず笑みを浮かべてしまう。お互いに相手の装備を点検し合ってから、ライサはケケの肩を軽くたたいた。

「装備よし。行くぞ。」

込み合つた更衣室から出て中庭へつづく薄暗い廊下を進む足が、高まっていく緊張と期待で少しずつ速足になっていくのを止める事が出来ない。重いブーツが石張りの床に当たる音が響いていた。扉を開けた瞬間、あふれる光にライサは一瞬目を細め、次に見えた光景に大きく息をついた。後ろに続くケケが、感嘆の声を上げ

る。

詰所の広い中庭には、すでに鞍をつけて準備を終えた翼竜達が勢ぞろいしていた。カウパ辺境警備隊にいる14頭のうちの10頭までが今回の出動に参加する。それだけでも壮観なのだが、今ライサ達の目を引き付けたのはその前にいる2頭の巨大な翼竜だった。ワイバーン、敬意を込めてそう呼ばれる翼竜。警備隊にいる緋飛竜の翼開長が大きくても6、7エムなのに対し、ワイバーンはその2倍以上。全身は輝くような純白の毛におおわれているが、頭部と他の翼竜には無い体長の半分ほどを占める長い尾の先は夜明けの空の様な青色をしている。前足が翼になっている翼竜は、地上では不格好に這いつくばるようにしか移動できないのだが、ワイバーンはかなり早く走る事ができるほどしっかりと四足で自立する事が出来、着陸している今でもその姿は堂々としていた。神竜に属する彼らはすべての翼竜乗りがあこがれる、巨大で恐れを感じるほど美しい生き物だった。

「すごい……。」

口を開けたまま突っ立っているケケを後に、ライサは一回り大きなワイバーンの方に吸い寄せられるように近づいていった。そのワイバーンの頭をなでていた人物がライサに気がつき顔を上げる。

すでに飛行服を身につけたイエリはライサを見て無言でうなずくと、一歩退いてライサにその場所を譲った。

7年ぶりに見上げるワイバーンはライサの記憶よりもさらに大きく見えた。だが、ライサの中には恐れよりも、懐かしさとそして再びこの美しい翼竜の前に立つ事が出来た喜びが込み上げて来ていた。巨大な空色の額に、見覚えのある一筋の白い毛が混じっている事に気がつきライサは右手を高く伸ばした。

「……シューティングスター。」

名前を呼ばれて、大きな二つの琥珀色の瞳がライサをじっと見据えた。

「私を覚えている？」

ライサは彼の事をよく覚えていた。もう何年前になるだろうか、シューティングスターはライサが初めて乗ったワイバーンだった。

あの時まだ見習い学生だったライサは不安に怯えながら、同じようにこの翼竜の前に立った。ワイバーンと他の翼竜の一番の違いは、実は大きさでも力でもなく知能だ。彼らは人の感情を見抜くし、記憶力にも優れている。ライサは彼らが人語を完全に解しているのではないかと思っているほどだ。そして、ワイバーンは自分が認めた人物しか絶対に乗せようとしない。初めてシューティングスターに認められ、教官だったイエリの後ろに乗って大空を舞ったとき。あの日の感動は一生忘れることはないだろう。

琥珀色の目を瞬かせた後、シューティングスターはゆっくりと頭を垂れてライサの伸ばした手に口先を触れた。嬉しさでざっと鳥肌がたつを感じながら、ライサは彼の硬くひんやりとした嘴に手を滑らせた。シューティングスターがのどの奥で甘えた声を鳴らす。

「忘れていないさ。」

彼が言いたい事を代弁したかのように、後ろから声がした。ライサが微笑んだままふり返ると、イエリはなぜかまぶしそうに目を細めた。

「全員用意はいいか。 出勤だ。」

アレクセイ隊長の声に我に帰ったのはライサ達だけではないらしい、中庭に出たところで呆けたようにそろって口を開けてワイバーンを見上げていた隊員達がはっとした顔になってあわただしく動き出した。

「こちらも待機場に向かいます。」
「了解。」

上昇速度の違うワイバーンは最後尾からの出発になる。 シューテイングスターの手綱を取ったイエリの前をライサは慌てて歩き出した。

元々木の上や崖に巣を作る翼竜は、かなり狭いところにも正確に着陸する事が出来る。 試してみようとは思わないが、訓練すれば時塔の先端にとまる様な芸当も不可能ではないはずだ。 それに引き換え離陸の際はかなりの距離を滑走するか、高いところから滑空するように飛び降りないと翼竜は飛び立つ事が出来ない。 それは、並はずれた飛行能力を持つワイバーンといえども変わりなかった。

そうした理由から警備隊の建物は街の端の高台にあり、中庭を出たすぐ裏はタンペレの農地を一望できる崖になっていて、そこに傾斜のついた滑走台が作りつけられている。

警備隊の出動を告げる鐘が鳴らされる中、隊員が乗った緋飛竜が次々と滑走台から飛び立っていっていく。 待機場まで来るとイエリはかがんだシューテイングスターの翼を伝って身軽に鞍の上に飛び乗った。 二人乗りの鞍の後ろには、ワイバーンの大きな背中いっぱいには荷物がかくりつけられている。 かがんだと言っても3エム近くの高さにある鞍を見上げていたライサを、イエリがいたずら

つばい目で見降ろしてきた。

「手をお貸ししましょうか、副長殿？」

挑発して部下の士気をかきたてるのがイエリのやり方とは分かっていても、ライサはカチンときた。この男の前で無能な所を見せるのなど絶対にご免だ。

「大丈夫です！」

若い時に身につけた事は忘れないというが、白い翼に手をかけると体は自然に動いてくれた。少しの事なのに、いつもより目線が高いと景色の見え方が違う。ライサが危なげなく鞍に座ったのをニヤツと笑って見届けると、イエリは前を向いて手綱を鳴らした。ゆっくりと後ろ脚で立ちあがったシューティングスターは大きな翼をいっぱい広げて離陸態勢に入る。ライサは大きく息をして、鞍を固く握りしめた。

「いくぞ。」

「はいっ！」

ライサの声に、イエリはもう一度大きく手綱を鳴らした。ライサの左右にある大きな翼がゆっくりと羽ばたきを初めて、土埃が辺りに舞い上がる。羽ばたきは徐々に早くなり、頭をもたげたシューティングスターは一声嘶くと滑走路を走りだした。視界が揺れる。振り落されそうな激しい震動。ガクンという大きな衝撃とぶつかってきた空気の塊に息がつまりそうになる。次の瞬間、風の音が変わった。言葉にできない浮遊感に、気がつけばライサは空にいた。

こんなにも違うものか。わかっていたはずなのに、久しぶりに

乗るワイバーンにライサは圧倒されていた。光を浴びて輝く白い翼が羽ばたくたびに、どんどんと高度があがっていく。イエリは街の周りを旋回するようにしてシューティングスターを上昇させていった。見慣れぬ白い巨大な翼竜に、街の人たちが驚いて立ち止り見上げている。ライサの視界を一つの建物がかすめた。警備隊出勤の鐘を聞いて飛び出してきたのだろう、校庭でこちらを見上げて手を振るたくさんの子供達。ほんの一瞬だったが、ライサは確かにその中に探していた小さな人影を見つけた。

コレル夫人に言われるまでもない、ライサは自分を悪い母親だと思っている。でも、ライサはこんな方法しかわからなかったのだ。大切なものを守ることも、自分が犯した罪を償うことも。昔はただ懂れて、翼竜に乗る事がただ楽しくて上だけを見て飛んでいた。でも今は、ここに帰ってくるために空にいる。

「行ってきます。」

口の中で小さくつぶやくと、ライサはしっかりと前に視線を戻した。

ライサ達の目の前には、クリュエタの灰色の壁が迫って来ていた。竜種から街を守る壁は、低いところでも200エムを超える。

壁際の上昇気流に乗って舞い上がるとシューティングスターはいっきに壁を越えた。ライサの視界に青一色の世界が広がった。

地平線まで続く青く霧がかかった森、空を映して輝く川とたくさん湖。はるか遠くには青灰色にかすむカレサレア山脈、そして青い空。森の霧もこの高度までは届かない。ここまで上がってきた初めて見る事が出来る、下から見えるくすんだ色ではなく、空はどこまでも透明な青色をしていた。頬を切る風が心地いい。イエリはシューティングスターを大きく旋回させると、先に上空にそろっていた翼竜の後につけた。三角形の編隊を組んだ翼竜達は北

を目指して速度を上げた。

> i
1
5
8
4
9
—
1
4
3
7
<

6 - 1 * (後書き)

A K I N OさんのC h a n c e t o S h i n e という曲を聴いたときにこのシーンのイメージが浮かんできてこの話を書き始めたのですが、まさかここまでたどり着くのにこんなにかかると思ってもいませんでした。

お話のほうは終盤です、もう少しお付き合いいただけると幸いです。

翼竜は低速で飛ばす事の方が難しい。風の向きや強さを正確に読むだけではなく、気のはやる翼竜を正確に操る技量と、乗り手と翼竜の信頼関係がなければならない。地形の影響で気流が安定しない青い森の上を、脚の遅い他の翼竜に合わせているにもかかわらず安定してシューティングスターを飛ばすイエリの腕前に、ライサは内心舌を巻いていた。

目の前にあるこの大きな背中を、ライサは見習いの時から憧れ追いかけていた。一生追い越すことはかなわないとわかっていても、その背中を追い続けていればいつか自分も高いところまで上って彼と同じ風景が見られるかもしれないと思っていた。久しぶりに見るこの背中中、以前よりはるかに大きく見える。

出発前の作戦会議でイエリが自分たちも出動に加わりたと言出した時、ライサは当然反対した。人手も輸送手段も足りない状況で二頭のワイバーンが加われば大きな戦力になる、というイエリの主張は確かに正論だったが、今日初めてこの地に来た彼らをいきなり現場に送り出すわけにはいかない。平行線の話し合いの末にライサは彼らに二つの条件を出した。現場ではライサ達警備隊の指揮下に入ること、そして実際の消火活動には参加せず後方支援にまわること。自分でも理不尽だと思うこの条件に、何よりも誇りを重んじる彼らが頷くはずはない、これでおとなしく引き下がるだろうとその場にいた誰もが思ったはずだ。だがライサ達の予想に反してイエリは「当然だ」といともあっさりと条件を受け入れた。エウロニア王国の誇る白騎士団飛竜隊がただの辺境警備隊の命に従うなど、ライサの知る飛竜隊ではあり得ないことだった。

飛竜隊は変わった。いや、変わったのではなく変えたのだと、ゆるぎないイエリの瞳を見てライサは悟った。軍にかき回されたくない、片意地を張って誇りを守ろうとしている自分たちが小さく見えた。

今、手を伸ばせば触れる事が出来るほど近くにこの背中はあるのに、それはもうライサが追い付く事が出来ないほどはるか先を歩いている。

「背中に何か怨念の様なものを感じるのだが。」

突然イエリが少しふり返って声をかけてきた。彼の背中を睨みつける勢いで見つめていたライサは慌てて視線を外した。

「気のせいではないですか。それとも、誰かに恨まれる心当たりでもお有りですか？」

「山ほどある、と言わざるを得ないな。空にあがったら、いろいろ問い詰められるのではないかと覚悟していたのだが。」

確かに聞きたい事は山ほどあった。なぜ、ヤルノをあんな方法で守ってくれたのか。なぜ、領主様や隊長と知り合いなのか、ミラとはどのような関係なのか。コレル夫人が言っていた影武者とはどういう意味か。そして、なぜ白騎士団副団長のイエリがここにいるのか。だけれど、今は聞くべきではないとわかっていた。

聞いてしまえばたぶん自分はいろいろと考え込んで迷ってしまうだろう。今は過去を振り返るのではなく、しっかりと前を向いていたかった。

「今は、作戦に集中したいので。」

「……そうか。」

「帰ったら、じっくりとお話をうかがいますから。」

「心しておくよ。」

かすかに笑ってイエリは前に向きなおった。その後ろ姿を見ながら、ライサは少しだけ気持ちが軽くなっている事に気がついていた。

「見えたぞ、あれだ。」

イエリの指さす地平線に、他の雲とは明らかに色の違うドス黒い雲が広がっているのが見えた。ライサは急いで手元の地図を確認する。報告にあった火災現場なのは間違いなかった。

「打ち合わせ通り、先行して着陸地点を探します。」

「了解。」

イエリが手綱を操ると、シューティングスターは大きく羽ばたいて、あっという間に隊列の前にでた。先頭に行く翼竜を追い越す時、その後ろに乗っていたケケが手を挙げて合図を送ってきた。飛行中は声が伝わらないため、会話はすべて手信号に変わる。額に手をかざして「幸運を」と伝えてきたケケにライサは同じ仕草を返した。

今までゆっくりと飛んできたのがもどかしかったのだろうか、視界を遮るものがない大空に解放されたシューティングスターは嬉しそうに嘶くと、風を切る様に速度を上げた。

風に乗りシューティングスターは素晴らしい速度で飛翔していた。これが仕事で危険な火災現場に向かっているものでなければ、この光景をどれほど楽しめただろう。どこまでも広がる森はいつもにもまして透き通ったきれいな青色で、雲のつくりだす影が濃淡を生み、本当の水面が波打っているように見えた。大きく蛇行しながら流れるターダ川や無数に散らばる沼に時折太陽の光が反射してキラキラと輝く。水辺に出ていた竜種の群れがシューティングスターの影に驚いて森へと駆けこんでいくのが見えたが、それも瞬く間に後方にながれさっていく。驚くほどの速さで飛んでいるのに聞こえるのはピンと伸ばされた白い翼が風を切る音だけで、過ぎ去る風景がなければ、空中にただ浮いているように錯覚してしまいそうだった。このまま、いつまでもこうして飛んでいたい。空に魅了されてしまった翼竜乗りなら誰でもそう願うだろう。だが、近づいてくる黒い雲の塊はライサを現実に取り戻した。

「火災が第3段階まで進んでいる。延焼範囲も・・・」

眼下に広がる光景にライサは唇をかみしめた。不気味な色をした黒い煙が風に流され辺り一面を覆っていた。その切れ目から、赤い炎が梢を舐めるように広がっていくのが見える。状況は悪化していた。

「どうする。風上で着陸地点を探すか。」

「先に現状を把握しましょう。火災が起きている範囲をなるべく低空で旋回してください。」

「了解。飛行が荒くなるから気をつける。」

イエリは旋回させていた翼竜を煙ぎりぎりの高さまで降下させた。

熱と煙で気流が乱れさつきとは比べ物にならないくらい大きく翼が揺れる。ライサは両足で体を支えながら、必死で地図に火災の状態を書き込んでいった。一度地上に降りてしまえば火災の全体像を把握するのは難しい、この地図だけが作戦を決める頼りになるのだ。

最初に思った通り、延焼範囲は偵察隊の報告にあつた時よりも長いところで1ケム近くも北西に進んでいた。しかも火災の4割以上が第3段階まで進んでいる。だが、今ならまだ人の手で延焼を食い止める事が出来る。

「副長。そろそろ竜が限界だ。」

「わかりました。これで十分です。一度上空に戻りましょう。」

先ほどから背中の上にもシューティングスターの苛立ちが伝わってくる。竜種は火と煙を嫌う生き物だ、これ以上無理をさせることはできないだろう。ライサの声を聞いていたかのように、シューティングスターは反転すると、火災の上昇気流に乗って一気に空へ駆け上った。

それにしても嫌な感じだ。風が強くて、肌がちりちりするほど空気が乾燥していた。何かの前触れに耐えるように大気が張りつめている。

「嫌な空気だな。」

イエリがつぶやいた声に、ライサは彼が同じことを考えている事に気がついた。

「隊長、い、いえ、副団長はフィレストラムを見た事がありますか。」

「いや、実際にはない。」

ライサの問いにイエリが息をのんだ気配がして、それから押し殺したような答えが返ってきた。

森林火災の第5段階フィレストラム。炎が竜巻となって空へ駆け上がり、あつという間にあたりを燃やしつくす。その中では鉄さえも気体となって形すら残さず消え去り、その熱風の速さからはワイバーンでさえ逃れられないという。ライサ達が最も恐れるものだ。極度の乾燥や強風などいろいろな条件が重ならなければ発生しない非常に珍しい現象だが、油分を多量に含んだ大気におおわれたこの森では、実際に過去何回もフィレストラムがおきていた。

「フィレストラムをこの目で見た事はないが、神具が使われるのは見た事がある。」

「神具ラインファル……。」

「まだ幼い頃だったがあれは忘れられない。世界の、終りが来たかと思った。」

ライサは胸元を固く握りしめた。フィレストラムがおきればライサ達になすすべはない。延焼を食い止める事はおるか、それから逃げることにできないだろう。フィレストラムに対する唯一の手段は、神具「ラインファル」を起動させること。ライサの懷にしまわれているそれは、手のひらに収まるほどの大きさの、ただの

円形の金属片にしか見えないものだった。こんなに小さなものが、なぜそのように大きな力を持っているのかライサには知る術もない。ただ、フィレストラムが発生したときには現場の最高責任者としてライサが神具を起動させなければならぬ。ラインファルがこの森で前回起動されたのは25年前になる。そしてその光景を見たものはイエリと同じように口をそろえて言う。「世界の終りが来たかと思った」と。

それは一瞬のうちに起ったという。青い森全土を夜が来たかと思うほど厚い黒雲が覆い尽くし、何刻もの間息が出来ないほどの豪雨が降り続いた。ようやく雨が止んだ時、火災の後にはただ黒く焼け焦げた大地が煙も立てずに残っていただけだったという。森は守られた、だがラインファルが人に残したのはそれ以上の災害だった。豪雨の後、半刻もたたないうちに氾濫したターダ川が街を襲い何人も街人が命を落とした。更に土砂混じりの濁流はタンペレの農地へとなだれ込み、収穫前の畑を一瞬にして泥の湖に変えてしまった。当時ラインファルを起動させたのは副隊長だったミラの父親だ。災害が起きたのは誰のせいでもなかったが、それだけに行き場のない怒りは警備隊に向いた。彼は責任をとって警備隊を辞め、そして復興作業中におきた事故で帰らぬ人となった。

ラインファルを起動させることで何が次に起ころうとも、フィレストラムが発生してしまったときには神具を使って森を守るのが定められた掟だ。掟を破れば災害よりも恐ろしい事がおきる。それでも、その時がくれば正しい判断を下す事が出来るだろうか。副隊長になり神具を持って現場に出るようになってからライサは幾度となく自問した。答えはまだ出ていない。

「着陸地点を探しに行くか。」

「はい。お願いします。」

イエリなら前の副隊長がどういふ思いでその答えを出したのか知っているかもしれない。だがライサは口にしかけたその問いを飲み込んで前を向いた。

遠い記憶の中で、母親が寝る前に神話を教えてくれたのを覚えて
いる。この国の人間ならライサと同じように何度となくその神話
を聞かされて育ったはずだ。

世界を創った双子の女神の物語。明るくて活発だけれど少し慌
て者の妹神、炎と大地を守護する陽の女神ヨルア。大人しいけれ
ど優しくて聡明な姉神、風と水を守護する月の女神ノルア。二人
が世界の中心に植えた大樹「スピレ」は天と地を結び、その木の实
から数々の竜種が生まれて、この世界は竜種の楽園になった。

ある時、天から木をつたって人がやってきた。女神たちは人々
の長に居住の地と「源の力」を貸し与える代りに、4冊の書を授け
た。それが今に伝わる契約の書「オラクル」

どこまでが神話で、どこからが史実なのかライサには知る由もな
い。けれども4冊のオラクルの書は実在し、その契約は今でも何
よりも優先されるべき事として人々の生活の中に根付き頑なに守ら
れている。例えば。オラクル第一章「礎の掟」第3条9項、「フ
イレストルムの発生防止と鎮火の義務」のように。

幸いな事に着陸地点は簡単に見つかった。警備隊の中庭の倍ほ
どの広さがある干上がった沼だ。十分とまでは言えないが、全員
が着陸するのが可能な広さで立地条件も良い。ライサは腰袋から
発煙弾を取り出すと放り投げた。真っ直ぐに落ちていった握りこぶ
しほどの球体はすぐに見えなくなったが、やがて落ちて行った先か
ら紫色の煙が立ち上ってきた。

「南南東の風、風力は4というところか。」

発煙弾の煙は仲間に着陸地点を伝えるだけでなく、地上付近の風向きを教えてくれる。イエリの声にライサは頷いた。

「荷物をおろしましょう。」

ライサの乗る鞍の後ろ、シューティングスターの背中には大きな荷が積まれている。消火作業用に必要なのは斧やシャベルといった道具だけではない、一度森に降りると消火が終わるまで何日もかかる上にいつ次の補給が来るかもわからない、対竜種用の武器、飲料水、食糧からテントまで大量の荷物を運ばなければならなかった。だが、いつもは4、5頭の翼竜に分けるか空船を使って運ぶ荷物を今日は2頭のワイバーンが引き受けてくれている。その分警備隊にいる翼竜は全て隊員を乗せるのに使い、空船は別の現場にまわす事が出来た。警備隊員の中でワイバーンに乗ることが出来るのはライサしかいなかっただけに、イエリが資材運搬をかってでくれたのは本当にありがたいことだった。

「後席、投下準備よし。」

「了解。投下地点まで5秒。」

風上から大きく旋回してきたシューティングスターは着陸地点の手前に差し掛かったところで身体を大きく傾けた。その瞬間をねらってライサが留め具を外すと網にまとめられた荷物は翼竜の背中を滑り落ちる。一呼吸後に、網につながった大きな傘状の布が勢いよく開いた。風に流されながらもゆっくりと降下していった荷物が。無事に着陸地点の端に落ちた事を確認してライサはほっと一息

ついた。

「流石だな。 散々訓練したかいがある。 感覚を忘れていない様で安心したよ。」

「……ありがとうございます。」

褒められているのか貶されているのかわからないイエリの口調に、多少なりとも複雑な気持ちでライサは答えた。 あの見習い時代の投下訓練は「散々」などという一言で済む様なものだっただろうか。 見習いの時だけではない、イエリと組んでワイバーンに乗っていた2年間、この鬼上司は「散々」しごいてくれたものだ。 10年近くたっても彼との呼吸を忘れないほどには。

「褒めているんだ、そう複雑な顔をするな。 君は俺が教えた中で一番優秀な翼竜乗りの一人だよ。 ワイバーンに騎乗するのは久しぶりだし、実を言えば本当に乗ってくるとは思っていなかったんだが、この分だと降下も大丈夫そうだな。」

前を向いたままのイエリに、どんな顔をしているのか言い当てられてライサはますます複雑な顔になった。 大体、ライサがワイバーンに乗る様に焚き付けたのはイエリ自身ではないか。

昔からイエリは何を考えているのか分かりにくい人物で、ライサは振り回されてばかりいた。 厳しかったり優しかったり、真面目だったりふざけていたり。 彼の親友だった男は「あんなにわかりやすい男はいないと思うけどね。」とよく言っていたけれど、やっぱりライサには未だにつかめない。 今も、仕事の上では昔と同じでいられるのに、ふとした瞬間に伝わってくるイエリの優しさや、からかうような空気はどう返せばいいのかわからなくて、自分でも悔しくなるほどそっけない態度をとってしまったている。

「本隊が追い付いてきたな。こちらで降下体勢に入るぞ。」

また大きく旋回して元の場所へ戻る途中のシューティングスターの前に、ようやく近づいてきたケケ達警備隊の編隊が見えた。ライサはどんな大きくなってくる人影から煙をあげて燃え続ける森、そしてまた目の前の背中に視線を映した。さっきから、ずっと言わなければいけないと思っている言葉をライサはまだ伝えられていない。本当は初めに言わなければならなかったのに、慌ただしい状況に流されているうちに機会を失ってしまった、面と向かって言いだしづらくなしてしまった。でも、伝えたい事を伝えておかなければ後でどれほど後悔するかライサは良く知っている。そして世の中はいつでも次の機会があるほど甘くも事も。また会う事よりも簡単に二度と会えなくなってしまうこともあるのだ。ライサは心を決めて口を開いた。

「イエリ隊長。」

「何だ。」

ライサがあえて使った昔の慣れ親しんだ呼び名をイエリはとがめなかった。

「まだ、お礼を言っていないませんでした。」

「礼？」

「先ほどはヤルノを助けてくださってありがとうございました。さっきだけじゃなく、今までも。私たちを助けてくださっていたのが貴方だと知っています。ずっとお礼を言いたいと思っています。私と息子がどれほど感謝しているか。本当にありがとうございます。」

ふり返ったイエリは眼を見開いた。だが、ライサの言葉を聞くう

ちに彼の表情は曇っていき最後には目を伏せた。

「君たちがここまでやってきたのは、君たち自身が努力したからだ。俺は本当に力にならなければならない時に何もできなかったし、これからも君に面倒をかける事を持ち込んだ張本人だ。礼を言われる様な事は何もしていないよ。」

目をあげ少し苦笑してから、イエリはまた前を向いてしまった。

それは違う、ライサはそう思ったけれど、ようやく言う事が出来た言葉を真っ向から否定されてしまったあとでは口に出す気力がなかった。イエリは人に感謝されるからとか憎まれるからとかで、自分の行動を変えるような人間ではない。いつも自分が決めた道を、周りの目など気にせず進んでいける強い人だ。そのせいで敵を作ってしまうこともあるが、友人や部下はそんな彼の強さを慕っていた。たとえイエリがライサに感謝されることを求めてないとしても、ライサは彼がしてくれた事に感謝している。それをどう言えばうまく伝える事が出来るのだろう。だが、かたくなな背中を見ているうちにライサの中にストンと答えが落ちてきた。

「それでも、ここに来てくれたのが貴方でよかったです。」

口に出してしまえば、それが今日イエリに逢ってからずっとライサの中にあつた思いなのだと気がついた。自分は単純に彼に逢えてうれしかったのだ。うじうじしているのは性に合わない、認めてしまえばずっと気持ちが悪くなって、黙ったままの背中にライサは微笑んだ。

降下地点が近付いて来ている。ライサはもう一度降下器具のベルトを確かめると、鞍から足を外して横座りになった。何度経験し

ても、翼竜からの地上降下は一番緊張する瞬間だ。　ライサはギュッと手に力を込めてもう一度気を入れ直した。

「ライサ。」

身を乗り出して下を確認していたライサは、自分の名前を呼ぶ声にふり返り、真っ直ぐにこちらを見つめるやさしい瞳を見つけた。イエリは右手を手綱から離すと、拳をライサに差し出した。

「守る物のために、女神のご加護を。」

懐かしい祈りの言葉にライサは眼を瞬いた。　飛竜隊の隊員は国の中でも選りすぐりの戦士たちなのに、みな驚くほど信心深かった。

翼竜に乗る前後に必ず祈りをささげるだけではなく、髪を伸ばさないとか、護符に銀の指輪を身につけるといった縁起をかつぐ習慣がたくさんあった。　ライサ自身、数ある迷信のすべてを信じているわけではないが、飛竜隊を離れた今でも何となくその習慣を続けている。

「守る者のために、女神のご加護を。　後の事はよろしく願います。」

ライサはイエリのごぶしに自分のごぶしを軽く合わせると、迷うことなく鞍を蹴って空中に身を躍らせた。

まるで空に花が咲いているようだった。

色とりどりの鮮やかな落下傘を広げた隊員達が、次々と空から降りてくる。降下器具の色がそれぞれ違うのは、一度に同じものを買いきそえる事が出来ない警備隊の複雑な財政事情のせいなのだが、まるで花束が降ってきた様なこの光景がライサは好きだった。

「ライサ副長！」

ライサがひとまとめに畳んだ布を片手に立ちあがると、着地したばかりのケケが手を振りながら駆け寄ってくるところだった。

「すごいです！ 俺、本当に感動しました！ 絶対、来年は一級の試験受けますっ！」

目を輝かせ頬を上気させたケケは、絶対言いださだろうと予想していた通りの事を早口でまくし立てた。ライサもはじめてワイバーンが飛ぶのを目にした時、同じような事を言った覚えがあるからケケの気持ちはよくわかる。ライサは幸運にもその夢をかなえる事が出来た。本当にワイバーンが辺境警備隊に配属されるなら、一級免許さえ取れば白騎士団に入隊できないケケでもワイバーンに乗ることが出来るようになるかもしれない。彼ならその実力は十分にある。ライサは笑いながらケケの肩をたたいた。

「家に試験要項があるから、帰ったら貸すよ。とりあえず今は目の前の火災だ。気を引き締めていけ。」

「はいっ！」

後半の言葉が聞こえていたかはあやしいが、ケケは満面の笑顔を見せた。

「ここここ、それにこの部分も第3段階まで火災が進んでいた。

隊をふた班に分けて、北側のこの部分に防火帯をつくる。私の班が先導で伐採して道をつくっていくから、倒木の除去と溝掘りの指揮を頼む。」

「左翼は放棄するのですか？」

ライサが先ほど書き込みを入れた地図を見せると、ケケは眉を寄せた。

「出来ればそうしたくはないが、予想していたよりも火の進みが早い。西側に延焼しても最悪この湖で食い止められる。北側にはクロアブラヤシの群生地があった、そこに火が回れば終わりだ。」
「・・・了解しました。」

終りの意味を正確に理解したのだろう、ケケは神妙な顔でうなずいた。消火活動とは言っても、下草が燃えている段階ならまだ土をかけて消していくことも可能だが、梢まで火が移った木を人の手で消していくのはまず不可能だ。ライサ達が出るのは防火帯と呼ばれる、帯状に木を伐採し土を掘り返して溝をつくり、そこで延焼を食い止めて後は自然鎮火を待つ。ある程度の森は犠牲になるが、それが最善の方法だった。何処に防火帯をつくるか、現場の状況からそれを見極めるのが最も重要になる。

フレイと同じように十代のころから警備隊で働いているケケは経

験なら十分あるが、まだ何かを得るために何かを切り捨てるという判断がなかなかできない。ライサはそれがケケの良い所でもあると思っっているのだが、彼を班長からライサの補佐に移したアレクセイ隊長には別の思いがあるようだ。隊長が危惧するように、ケケの成長をのんびり待つ余裕が今の警備隊にはない。上に立つ人間になるために時に非情になることを、自分はこの純粋な若者に教えないければならない、ライサは複雑な気持ちで隊員達と荷ほどきをするケケを見つめた。

その時、後で悲鳴が聞こえた。

振り向いたライサはそこに信じられない光景を見た。一つ他から離れた荷のそばで倒れこむ一人の団員。そしてそのすぐ近くに、林から飛び出てきた竜種がいた。

「三つ角竜!？」

「どうして、こんなところにいるんだっ！」

「落ち着け! 全員集まって、対竜法具を準備しろ。騒いで竜を刺激するな。」

狼狽する隊員たちを一喝すると、ライサは走り出した。ケケがすぐ後に続く。

ライサは走りながら歯をかみしめた。上空から確認したときは竜種の姿はなかったのに。三つ角竜は頭の両脇と鼻先に角を持つ大型の草食竜だが、見た目とは裏腹に大人しく普段は人を襲う様な竜種ではない。だが、目の前の竜は頭を下げ、足をふみならして攻撃態勢に入っていた。火に追われて群れからはぐれ混乱しているのだろう。大きさからみてまだ子供だが、小さいと言っても体重は人の何十倍もある、襲われればひとたまりもない。倒れこんだ隊員

は必死に逃げようとしているが、解き終わった荷づくり用の網に足を取られて動けずにいる。

「ヨハン、目を閉じる！」

叫びながらライサは彼にかけより、手に持った閃光弾を突進してこようとしていた竜に向かって投げつけた。ケケとともにヨハンの襟元をつかみ引きずるようにして3人で荷の影に倒れこむ。目を覆った腕の隙間から白い光が差し込み、辺りに炸裂音が響いた。祈るような思いで荷の向こうを覗いたライサは、そこに変わらずいる黒い影を見つけた。三つ角竜は光に目がくらんで動きを止めていたが、ライサが願ったように逃げ出してはくれなかった。

「奴はまだそこにいる、なるべく静かに音を立てるな。」

ライサは頭を引っ込めると、ケケが抜き放った剣で網を切り刻んでヨハンを助け起こすのに手を貸した。

「大丈夫か、ヨハン。」

「すみません。大丈夫です。」

だが大丈夫と言いながら身を起こそうとしたヨハンは大きく顔をしかめてよろめいた。慌ててケケが横から支える。

「足か？」

「折れてはいないようですが。」

「っ、。。。。。」

ケケが素早くヨハンの足を確かめる。右足に触れられたヨハンは、かすかにうめき声をもらして顔をゆがませた。折れていないとい

つてもかなり痛そうだ。ライサは眉をひそめて、ちらつと後ろを確認した。後方で他の隊員達が大型の対竜法具を取り出そうと動いている。だが間に合わない、ライサの意識は瞬時に判断した。音を立てないよう静かに剣を抜き放ち、右手を固く握り剣に意識をむける。

「ブート・アップ」

言葉を発すると同時に、立ちくらみに似た感覚がライサを襲う。一瞬、誰かの手で自分の意識だけが抜き取られてしまった様なぞつとする感覚。

ヴォン。

音にならない音を立てて、剣の周りの空気がゆがんだ気がした。

これがこの剣の持つ本当の威力。第3種対竜種法具高压電流携行兵器、通称雷神剣。法具として起動させれば、小動物ぐらいなら一瞬で黒こげにしてしまう事が出来る。三つ角竜に対するのに適した武器とはいづらいが、弱点の腹部に切り込めば他の隊員がより威力の高い対竜法具を準備するまでの間稼ぎぐらいにはなるだろう。ライサが剣を起動させたのを見て、横の2人が息をのんだ。

「ケケ、閃光弾は後いくつある？」

「後4つ持っていますか。」

「十分だ。」

頷いて、ライサは自分が持っていた残りの閃光弾をヨハンに差し出した。

「ヨハン、奴は私達が引きつけるから、お前はここでじっとしている。何かあったら、これを躊躇なく使え。使い方はわかるな？」

ヨハンは不安そうな顔で閃光弾を受け取った。三つ角竜は目と耳はいいが嗅覚はそれほど良くない。攻撃してくるときは動くものに向かつてくるから、じつとしていればヨハン一人くらいは隠れていられるはずだ。ライサはケケに顔をむけた。

「対竜法具が準備できるまで時間を稼ぐ。出来るか、ケケ。」

ケケは真剣な顔で頷くと、自分の剣を掲げて起動させた。また空気がふるえる。

「絶対に無茶はするなよ。」

例え同じ雷神剣を使ったとしても、その威力はそれを持つ者によって変わってくる。剣術ではほとんど差のないライサとケケだが、雷神剣を起動させてライサが一撃で倒せる竜種が、ケケではせいぜい動きを止めるくらいにしかない。それが「潜在力」とか「魔力」とか呼ばれている力の差だ。その差ゆえに任期の浅いライサが警備隊で副長を務め、ケケは白騎士団に入隊する事が叶わない。

こればかりは、生まれつき決まるものなので努力でどうにかなるものではないが、力の差を意識するあまり時に無茶をする青年に、ライサはくぎを刺し、もう一度荷の影から竜の様子をうかがった。目標を見失った三つ角竜は、その標的を新しく沼地の中央に向けてつあった。そこには他の隊員達がいる。竜種とはいえ普段はおとなしい草食竜の、それも子供を殺すことはできれば避けたかった。だがそれは隊員の命を預かるものとしては許されない甘さだった。ケケに頷くと、二人はほぼ同時に剣を掲げ荷物の影から飛び出した。

（ヤルノ、どうか力を。）

祈りながらライサは気合の声をあげ駆けた。二人に気がついた竜がその顔をこちらに向けたときには、ライサは十分に合間をつめていた。雷神剣を大きく振りあげ正面から切りかかる。

バチバチバチッ

ガツンと言う硬い衝撃のあと青白い火花が、ライサの剣と竜の角の間で散った。頬にびりびりとした空気が当りライサの髪が一瞬逆立つ、辺りに焦げ臭いにおいが流れた。驚いた竜が頭を振り払う前に、剣を引いたライサはそのまま竜をまわり込むようにして横に駆け抜けると、林を背にしてもう一度剣を構えなおした。同じように駆けてきたケケが、横で息をつく。

「フツー正面から行きます？ 無茶はどっちですか。」

「次、お前は右脚をねらえ。」

「りょーかい。」

目の高さに剣を構えたケケはこの状況にもかかわらず楽しそうにニヤツと笑った。ライサ達を敵と認めたのだろっ、どたどたと向きを変えた三つ角竜は唸り声をあげながら頭を下げた。とりあえず、これで奴の気を本隊から反らせられた。後はどれだけ時間を稼げるかだ。その時、ライサ達に向けられていた竜の視線がふと上を向いた。背後で甲高い嘶きが聞こえた。

「ケケ、伏せろっ！」

後ろを振り返る余裕もなく、反射的にライサは叫ぶと地面に伏せた。次の瞬間、突風が駆け抜ける。何とか顔をあげたライサに見え

たのは、三つ角竜に襲いかかる白い翼だった。猛烈な速度で滑空してきたワイバーンを見て恐怖のあまり後ろ立ちになった竜を鋭い鉤爪が襲う。三つ角竜は悲鳴に似た鳴き声をあげた。息つく間もなくもう一陣の白い翼が別の方向から風を切り裂いてきた。突き出された鉤爪からは逃れられたものの、長く青い尾が三つ角竜の腹を打ちすえる。三つ角竜は土煙をあげて倒れた。瞬く間に空の高みへ舞い戻ったワイバーンは輪を描くように旋回すると、また鋭い嘶きとともに滑空してきた。それが、三つ角竜の限界だった、やっとのことで立ち上がった三つ角竜は怯えた声をあげながら、林の中逃げ去っていった。その後を、低空飛行のワイバーンが南の方向へ追い立てていく。

全てはあつという間だった。土埃だらけになった服を払いながら立ち上がると、ライサはまだ茫然としたままのケケに手を差し出した。

「怪我はないか？」

「え、ええ・・・はい。大丈夫です。」

ライサの手をとって立ちあがったケケは、まぶしそうに空を見上げため息をついた。

「・・・本当に、すごい・・・ですね。」

「ああ。」

つられて見上げたライサは、まぶしい太陽の光に手をかざした。白い翼を広げ、ワイバーンは上空をゆっくりと旋回していた。つい先ほど離れ業で竜種を追い払ったとは思えないほどそれは美しく優雅な光景だった。その背の上で手をあげる人影に、ライサも手をまわして無事を伝えた。

「行こうか。」

まだ空を見上げるケケの肩をたたくと、ライサは駆け寄ってくる隊員たちの方に歩き始めた。

また、助けられてしまった。 帰ったら、今度こそきちんとお礼を言うのを認めさせてもらわなければ。 そう思ってから、ライサはあまりにも変な言葉の並びに笑い声を洩らした。 本当にわかりにくい面倒な人だ。 ふっと陰がさしてライサはもう一度空を仰いだ。 ワイバーンはまだ上空を見守るように旋回を続けている。

ライサは逆光に目を細めた。

> i 1 7 5 0 0 — 1 4 3 7 <

控え目にドアをたたく音に、イエリは書類から目をあげた。いつの間にか陽は大きく傾き、窓の外にはタンペレ特有の淡い黄緑色の夕焼けが広がりはじめようとしていた。だが、美しい故郷の夕焼け空は、悲しい事に何日たっても懐かしさよりも違和感の方が強い。一瞬見入ってしまった黄緑色の空から目をそらすと、イエリは扉の方に顔をむけた。

「どうぞ。」

「・・・・失礼します。」

一拍の間をおいてから静かに扉が開きライサが部屋に入ってきた。

現場に出ていた部隊が五日ぶりに街に戻ってきた時には、全員が煤と汗にまみれたひどい恰好をしていたが、こざっぱりとした制服に着替え直したライサは、とても剣や斧を片手に森を駆け回っていた人物だとは思えない。イエリの前で疲れを顔に出さないのは流石だったが、一礼して顔をあげたライサは部屋をちらっと見渡してかすかに眉をひそめた。あいかわらずわかりやすい奴だ、とイエリは漏れそうになった笑みをかみ殺した。

警備隊本部でイエリに用意されていたのは二階の応接室として使われていた部屋らしく、ごたごたとした下の詰め所とはずいぶんと違っていた。趣味の良い家具や絵が置かれ、奥の日当たりのよい窓からはタンペレの田園風景が一望できる。今はその窓際にイエリの仕事用にと大きな机が運び込まれていた。だが、いかにも「

借りてきました」という机と高さの合わない椅子ではどうにも仕事
がしづらく、結果机は山の様な書類の置き場にして、イエリ本人は
より座り心地の良い応接用のソファに胡坐をかいて座り込み、足元
に積み上げた資料を拾い上げては読むという体勢に落ち着いている。
誰に迷惑をかけているわけでもないから構わないだろうとは思っ
のだが、几帳面なライサの顔には「白騎士団副団長ともあるう人が
なんて恰好を・・・。」とありありと書かれていたので、イエリは組
んでいた足をおろして座りなおした。

「今回の報告書を持ってきました。」

「御苦労様だったな。」

ライサがさしだしてきた書類をイエリは受け取った。彼女が帰っ
てきたのは今日の昼前、あいかわらず仕事が早い事だ。

「ありがとう。あずかっておくよ。」

パラパラと書類をめくりながら、ライサがその場を動く気配がない
のでイエリは顔をあげた。

「隊長から、内容についてご説明するようにと言われました。お
時間があれば今、目を通していただけますか。」

「待たせる事になるが。」

「構いません。」

アレクセイ隊長の指示というのに少し引つ掛かるところがあったが、
今やっている仕事は最優先事項というわけでもなかったなので、イエ
リは膝の上に置いたままだった資料を足元に置いた。

「フレイ、そこにある地図をとってくれ。」

「はい！」

奥で書類の整理を手伝っていたフレイが慌てて持って来てくれた力
ウパ地方の詳細な地図を前の机の上に広げて、イエリはフレイを見
上げた。

「それと、さっきの書類を下に戻しておいてくれ。それがすんだ
ら今日は終わりにしよう。」

「はい、わかりました。」

フレイは嬉しそうに頷いた。イエリ達先遣隊がきて一番被害を受
けたのは、このフレイという見習いの少年だろう。残されている
過去十年分の記録をすべて洗い直すというイエリの仕事のために手
伝いになり出されたフレイは、一日に何十回も書類を抱えて応接室
と一階の書庫を往復する羽目になったのだから。最初イエリを前
にしてがちがちに緊張していた少年だが、その日の夕方になる頃
には「不満」という文字が顔いっぱいに張り付くようになった。変
わっていく彼の表情を面白く観察していたイエリも流石に気の毒に
なって、ちょうど手元にあった菓子をあげたのだが、今度はやたら
と懷かれてしまった。もともと人懐っこい性格なのだろう、大人
が話さない様な街や警備隊の噂話を色々と聞かせてくれて、イエリ
にとっては楽しいだけではなく貴重な情報源になってくれているの
だが、小動物を餌付けしてしまったみたいで少し気が咎めないわけ
でもない。

「それでは、お先に失礼します。」

扉の前で深々と一礼すると、書類の束を抱えてフレイは部屋を出て
行った。少年はイエリと一緒に来た飛竜隊員達にずいぶんと感化
されたようで、ここ数日で驚くほど礼儀正しくなった。イエリで

すらそう思っただから、今までの彼をよく知るライサには相当な驚きだったのだろう、まるで新種の竜種でも見つけた様な顔でフレイを見送るライサを見て、イエリはまた込み上げてきた笑いをごまかすために大きく咳払いをした。

「とりあえず、そこに座ってくれ。珈琲でも入れよう。」

「あ、私が致します。」

開けっ放しになっていた口をあわてて閉じると、ライサはイエリが止める間もなく慌てて珈琲を入れに行ってしまった。

芳ばしい珈琲の香りに没頭していた書類から顔をあげると、ライサがカップを両手にイエリの横に立っていた。無言のまま数秒間見つめあって、ようやくイエリは机の上が地図に占領されていた事に気がついた。

「ありがとう。」

手を伸ばしてライサから珈琲を受け取ると、彼女にも椅子に座るように勧めてイエリはカップに口をつけた。イエリの好きな薄めでやけどしそくに熱い珈琲。ふと、同じようにライサと二人珈琲を飲んだ遠い日の光景が浮かんだ。あの静かな白い部屋の香りも、窓に当たる雨の音もたぶんずっと忘れる事が出来ない。ここで珈琲を飲むのは失敗だったかもしれない、イエリは感傷に浸りそうになる意識を無理やり書類にもどした。

ライサの報告書は簡潔ながら必要な情報が確実にまとめられてい

て、非の打ちどころがないものだ。イエリが読み返した十年分の報告書も、昔の日報に毛が生えた程度のものから、ここ数年で王都の議会に提出しても恥ずかしくない様な物に変わっていた。報告書に限ったことではない、日常の訓練や偵察飛行の状況など、本当にここは辺境の警備隊かと思うほどしつかりと組織がまとめられている。おかげでイエリの仕事は驚くほど順調に進んでいた。フィオネルの「タンペレの西方警備隊を落とすのは間違いなく最難関」などという報告に意気込んで来ていただけに、肩透かしを食らったように感じるほどだ。

書類を読み終えたイエリが目をあげると、向かいに座るライサはカップを両手に抱えたまま遠い視線で窓の外を見つめていた。これだけの事を4年、いや、実際には副隊長になってからの2年でやり遂げる、それほどの気力がこの小柄な体のどこに詰まっているのだろうと不思議になる。あいかわらずきれいなその横顔には、イエリの知らない強さがあつた。前から強いやつだとは思っていたけれど、今のそれはもっと奥が深い。それは彼女が責任ある立場になったからだろうか、それとも母親の強さなのだろうか。やっぱりこいつには自分の手など必要ないだろう思ってしまう。大体、自分より強い相手に手を貸そうとするなどおこがましいにも程があるではないか。ライサが一人で乗り越えた壁をイエリはまだ登りはじめてすらいないのだから。それなのにイエリの周りにいるのはそう思わない人物ばかりの様だ。お節介なのはフィオネルだけではない、ライサの報告書にいちいち説明など必要ないの一番よく知っているのはアレクセイ隊長のはずだ。イエリが無意識のうちにいついてしまったため息に、ライサが厳しい顔をしてこちらを向いた。

「何か、不手際な点がありましたか。」

「いや、すまない。報告書には何の問題もない。この短時間でよくまとめている。」

「ありがとうございます。」

少しほっとしたように、ライサの目が柔らかくなった。彼女の立場を考えれば質問の一つでもしておいた方がいいだろうと、イエリは机の上の地図を覗き込んだ。

「確認をしておきたいのだが、地図でいうと延焼範囲はどれくらいになる。」

「はい。出火元とみられるのはこのあたり、着陸地点から回り込んでここに防火帯を敷きました。我々が到着した時点での延焼範囲はここからここまで、最終的にはこれだけの範囲になります。」

ライサの指が迷いなく地図の上を滑っていく。身を乗り出した彼女の髪から洗いたての石鹸の香りがして、イエリは思わず眉間に手をやった。まったくいい年をして、それがどんな高価な香水よりも魅惑的だと彼女は知らないのだろうか。アレクセイ隊長は紳士的な人物だが、周りは体力を持て余している野郎の集まりなのだ。男と二人きりの部屋でそれがどんなに無防備か教えてくれる人物はいなかったのだろうか。ライサのこういうところは全然変わっていない。ここ数年イエリの周りに集まってくるのは、美しく洗練され、それをいかに武器として使うか熟知している都の女達ばかりだった。彼女達の駆け引きにはうんざりさせられるだけだったのに、ライサの何気ない仕草には気をひかれてしまう。ライサの方はイエリを異性として意識しようとは爪の先ほども考えていないだろうに。なんだか馬鹿馬鹿しくなってきたイエリは持っていた書類を机の上に放りだした。ライサが驚いて顔をあげる。

「報告書について聞きたい事はそれだけだ。次は君の質問を聞こ

う。」

「私の質問、ですか？」

「言っていたらう、『帰ったらゆっくりお話をお伺いします。』
ってな。今がいい機会だろう？」

「それは……。あの時は、私も混乱していて色々失礼な態度を
とりました。申し訳ありません。私が詮索すべき事ではありません
でした。」

「そんな、毒にも薬にもならないような言い方はやめなかい。俺
はむしろ君こそが唯一話を聞く権利を持っている人物だと思う。」

いつもは真っ直ぐに視線を合わせるライサが、珍しく目をそらせて
うつむいた。彼女の気持ちはわからないでもない。お互いに板
についた「上司と部下」という役で接するのは、何も考える必要が
なく楽だった。だがそれでは何の解決にもならない事をお互いに
気づいてしまっている。手の中にある珈琲と睨みあること数秒間、
ようやくライサが顔をあげた。

「先ほど下で、ここの警備隊が軍に編入されれば、貴方が隊長に着
任される事になるだろうと聞きました。」

「そうなるだろうな。」

「それは、貴方があれほど望んでいらした白騎士団副団長の座を蹴
るほどの仕事価値のあるもの、という事ですか。その理由を
教えていただきたいのです。」

いきなり核心をついてきたライサに、イエリは苦笑を隠せなかった。
やはり彼女も事をうやむやのまま終わらせたり、忘れてしまった
ふりができるような人間ではない。

「少なくとも俺はそう判断した。それが正しいのかはわからない
けどな。理由と聞かれると俺の身の上話から始めなければならな

くなる。だが、もし君が知りたいというのなら全てを話そうと決めていた。楽しい話ではないし、君には辛い話もあるだろうが、それでも構わないか。」

ライサがゆつくりと頷くのを見てから、イエリはとっくに空になってしまっていたカップを差し出した。

「長い話になる。その前に、このうまい珈琲をもう一杯入れてくれないか？」

「今さら言う必要もないと思うが、俺はこの街で生まれ育った。ライティオ家に養子に行くまでの名前はイエリ・カストレン。父は君と同じように警備隊の副隊長をしていた。ミラは俺の実の妹だ。」

強くて明るい父はみんなの人気者だった。優しくて、料理上手な母親。イエリ、ミラの順に5人の兄弟達がいて毎日それはにぎやかだった。その上、休みの日になればアレクセイたち警備隊員だけでなく父の親友だった領主の息子のアランまでが家に集まって来てお祭り騒ぎになった。ごく普通の楽しく幸せな家族だった。あの日までは。

イエリが13歳の夏も終わりに近い日、それは起こった。

突然、空を黒雲が覆い尽くした。夜の様な闇の中、息もつけないほどの豪雨が降り続き、街を洪水が襲った。

「ラインファル」という名前を知るのはずっと後になってからの事だったが、大変な事が起きたというのはイエリのような子供にもすぐにわかった。それでもイエリには、その後なぜ父が警備隊を辞めてしまったのか、なぜ母から笑顔が消えたのか、なぜ父の友人達が家に来なくなったのか、そしてなぜ周りの友達が以前の様に遊んでくれなくなったのか、変わりすぎてしまった日常をすぐに理解する事は出来なかった。そんなイエリに父は何度も根気強く教えてくれた。彼は子供とも大人と同じように話をしてくれるそんな人だった。そして、難しい話の最後には必ず笑顔を見せて言ってい

た。「それでも、父さんはこの街が大好きなんだよ。」と。

あの辛い日を乗り越えられたのは、家族の堅い絆があつたからだ。それなのに、ようやくいわれの無い中傷が下火になってきた半年後、父はあつけなく逝ってしまった。新しく働き始めた工事現場で仲間を助けようとして崖崩れに巻き込まれたという、なんとも父らしい最期だった。

都からライティオ家の使いという人物が現れたのは、それから一月もたたないうちだった。同じ人物は1年ほど前にも同じ用件でイエリの家を訪れていた。彼の話によると、たまたまタンペレを訪れていたライティオ家の夫人が数年前に亡くした息子に瓜二つのイエリを見かけ、是非養子にほしいと願っているという。前回はいエリの父がきつぱりと断つたのだが、彼が死んだのを何処から聞き付けたのだろうか、やって来た使いの男はいかにも気の毒そうな顔で申辞を述べた後、遠回しに「イエリが養子に行つた際は、その実家にも援助を惜しまない」という様な事を言つた。丁寧に話を断つて頭を下げる母が、白くなるほどきつく手を握りしめていたのをイエリは忘れる事が出来ない。男は数日タンペレに滞在しているので、もし考えが変わつたのなら伝えてほしいと言い残して歸つていった。

その日の夜、妹達が寝静まつた後にイエリは母に呼ばれた。台所にある母のお気に入りのお長椅子に隣り合つて座ると、何か大事な話をするときにいつもそうするように、彼女はイエリの両手を握り真つ直ぐに目を合わせた。

「イエリ。あなたの父さんは、いつも大切な事はちゃんと話をし
て、あなたの考えを聞く人だったわね。だから母さんも同じようにしたいの。」

母の手に少し力がこもった。

「今日、都から使いの人が来たわね。 イエリは貴族の養子になるというのがどういふことかわかる？」

イエリはゆっくりうなずいた。 前にライティオ家の使いが来たときに、父が話をしてくれた。 都の貴族というのはとても身分の高い人たちで、その家は何百年にもわたって続いている。 子供のいない貴族は家を「存続」させる為に、顔が似ていたり才能のある子供たちを引き取って育て、その中から「跡取り」というものを決める事があるのだと。

「父さんが亡くなってから、あなたはとても頑張ってくれているわ。 母さんはあなたがいてくれて本当に助かっているし、頼りにしている。 だから母さんはあの話をお断りしたのだけど、でも、あなたの意見もちゃんと聞かないといけないと思ったの。 貴族の養子というのはなかなか成れるものではないし、都に行けば立派な暮らしが出来ていい学校にも行けるわ。 イエリ、あなたはどうしたい？」

イエリは母の顔を見つめて、それから少し戸惑いながら聞いた。

「家にはお金がないの？」

母の目が驚いて見開かれ、それから泣き笑いの様な顔になってイエリをぎゅっと抱きしめた。

「あなたは本当に優しくて、賢い子ね。 正直に言っていると、下の子たちはまだ小さいし、あなたを上为学校に行かせてあげる事は出来ないかもしれない。 でも、父さんが残してくれたものがあるし、母

さんも働きに出るから、贅沢をしなければ家族みんなで何とか暮らしていくだけのお金はあるわ。だから、お金のために養子に行くなんて事はしないで。」

母はイエリを抱きしめていた手を少し緩めて、彼の顔を覗き込んだ。

「母さんが心配しているのはね、あなたがこの先の街で幸せにやっついていけるかという事なの。ミラも下の弟たちもまだ小さいからこの半年に起った事をよく覚えていないだろうけど、あなたは随分嫌な思いをしたのを忘れられないかもしれない。ここは小さな街で周りの人も変わることがないから、この先学校に行っても、働く事になっても、この街に住んでいれぱずっとその辛い思いを引きずっていく事になるわ。都に行けば新しい友達もできるし、この街では経験できない様な事がたくさんあるし、あなたにとっては、辛い事を忘れるととてもいい機会になると思うの。母さんの言っている事がわかる？」

イエリはまたゆっくりとうなずいた。本当は、母の言っている事は難しくて全部は良くわからなかったのだけれど、母が自分の事を心配してくれているというのは良くわかったから。

「でも、都に行ったらここにはめったに帰って来れなくなるんじゃない？ 僕がいなくなっても母さんは大丈夫？」

また母が、前よりも強くイエリを抱きしめた。耳元の母の声がすすかにふるえていた。

「母さん、イエリがいなくなったら本当にさびしくなるわ。でもね、母さんはイエリがどこにしようと思わせてくれる事が一番うれしいの。だから、イエリがそうしたいと思うのなら、母さんは

あなたが都に行くのに賛成するわ。」

次の日、イエリは母と一緒に使いの男が泊まる宿を訪れた。一晩考えてイエリが出した結論は都に行くことだった。母や兄弟と離れるのはもちろん嫌だったけれど、憧れていた都に行くのや上の学校に入ることも、そして母には言わなかったけれど家にお金ももらえるというのも確かに魅力だったからだ。だが一番の理由は、父があれほど愛していたこの街をこれ以上嫌いになるのが怖かったからかもしれない。

イエリが騙されていたと気がついたのは、都に行つてすぐのことだった。ライティオ家の養子と言うのは世間の目を欺くためで、実際にイエリを必要としたのは都の大貴族コレル家だった。当時、第一候として権力争いのただなかにあったコレル家は、一人息子のヤルノを守るため彼の身代わりにする子供を探していたのだった。

訳も判らぬイエリを待っていたのは、影武者として必要な教養や武術を詰め込まれる毎日だった。嫌がれば、婉曲にタンペレの家族の事を脅された。豪華すぎる衣服や食事は与えられたが、学校に行く事はもちろん部屋から出るのも許されず、家への手紙はすべて検閲された。コレル家としても事が露見するのはまずかったのだろう、約束通り実家への金銭的な援助は行われたようだったが、母が病に倒れたと知らせを受けた時も帰ることは叶わなかった。そして、身代わりとして誘拐犯や暗殺者に狙われる日々が始まった。

「あの頃の事は話したくないし、話す必要もないだろう。幸運と

「いつのか、俺はコレル侯が失脚するまでの2年間を生き延びた。」

少し息をついてイエリはライサの表情をうかがった。明るい話ではなかっただけに、ライサの顔は戸惑いや悲しみて暗く曇っていたが、その中に憐みの色がない事がイエリには救いだった。

「あなたはライティオ家のご両親と、とても仲がよいと思っていました。とてもよいご家族だと。」

「実際に仲がいいからな。そういう風に見られていたのなら嬉しいよ。彼らのやった事が正しいという気はないが、二人にも事情があつたんだ。先代の当主がコレル家に莫大な借金をしていてね、彼らも脅されていた。ライティオの両親には感謝している。俺が身代わりとして用済みになった時、自分たちには害にしかならない俺を本当の養子として引き取ってくれた。」

コレル家の「用済み」がどういう意味を刺すのか正確に理解したのだろう、ライサは形の良い眉をひそめた。ライティオ家に引き取られなければ今イエリは生きてないだろう。貴族でいるにはたぶん、人のよすぎる彼らがイエリを引き取ってくれたのは罪悪感に因るところが大きいだろうが、それでも二人とも実の子供のように愛情を持ってイエリを育ててくれた。感謝こそすれ二人を恨む気はない。金に困っていたのは彼らも同じはずなのに、イエリを学校にまで行かせてくれた。

「そこでまさか本物のヤルノと一緒にになるとは思ってたけどな。初めて会った時は驚いたよ。確かにこれだけ似てればいい影武者になっただろうってな。で、どうせ気位の高い貴族のお坊ちゃんだろうと思っていたのに、話をするといいい奴なんだ。」

憎むとまでは言わなくても、事の根源となったヤルノを好きになれ

るはずもないと思っていた。だが、初めて話したその日のうちに二人は親友になっていた。

「本当に不思議なくらい気があつたんだ。だけど、一番驚いたのはコレル家の面々かもしれないな。」

「彼は、・・・彼はその事を知っていたのですか？」

ライサが初めて、問いを口にした。聞かれるだろうとは予想していたのに、イエリは大きく息をして気持ちを落ち着かせなければならなかった。そして、なるべく表情を変えないように淡々と答えを告げた。

「出会った頃ヤルノは何も知らなかったはずだ。けれど、何時、どのようにして知ったかは分からないが、ヤルノはすべてを知っていたよ。俺があいつの影武者だった事も、俺が最初の一人ではなかった事も。」

ライサの表情が泣き出すのをこらえるかのように歪んだ。イエリはその顔を見ないように、カップを傾けて苦いだけになってしまつたぬるい液体をのどに流し込んだ。

十分な間をとってからイエリが顔をあげると、ライサはだいぶ落ち着いた表情に戻っていた。それでも、その瞳が悲しげにゆれているのをイエリは見逃さなかった。

「出会った経緯がどうであれ、ヤルノと俺は最初から最後まで心からの親友だった。俺にとっては今でもな。それだけは信じてほしい。」

「・・・よく、知っています。」

「まあ、友達に言わせるとこれ以上の悪友はいないらしいけどな。俺達の武勇伝はヤルノから散々聞いているんじゃないか？」

イエリが意味ありげに目をあげると、ライサは少し困ったような顔をした。二人のことは今でも専修校で伝説になっているらしい。未だにイエリに逢う度に「あの悪ガキが、よくここまで立派になったものだ。」と半ば本気で涙を浮かべる教授もいるぐらいだ。

「話を続けようか。ライティオ家の養子になっても、俺はまだコレル家の監視下にあった。まあ、向こうからすれば当然だろうけどな。実家と連絡を取るのも厳しく止められていた。第一候から退いたとはいえコレル家は大きな権力をもっていたし、彼らに逆らって養父母にも実家にも迷惑をかけるわけにはいかなかった。

それでも、不思議なもので都の生活に慣れるほど俺の帰る場所はタンプルでしかないと思うようになっていた。ライティオ家の両親は良くしてくれたし学校に行って友達もできたが、翼竜乗りになる

ことを選んだのはいつの日かこの街に戻って父と同じように街を守る仕事に就きたかったからかもしれない。それから、竜騎士になるために専修校に入ってヤルノと俺は当時まだ皇太子だった陛下や他の仲間と出会った。何人かは君もあつた事があるだろう?」

ライサが神妙な顔でうなずいた。

その政治手腕で高く評価されている現王は当時から抜きんでた才能を見せていた。そして彼には王として成し遂げなければならない事があつた。共にその道を歩むことを誓つたイエリ達は、そのために自分たちも権力を動かす事の出来る立場にまで上らなければならなくなつた。特に王家の力の及ばない軍部にはヤルノやイエリのほかにも3人の仲間が入りこみ、秘かにその策略を進めていった。

イエリにすれば翼竜乗りになりコレル家に抗するための力を得るためには一番の近道だつた。ヤルノの方もコレル家に因るところのない自分の力で手に入れた地位を欲していた。大貴族に生まれ何の苦労もなく育つただろうヤルノが胸の内にどれだけ闇を抱えていたのかイエリには想像すらできない。彼はコレル家のやり方を心底嫌つていただけでなく、それに属する自分すら嫌悪していた。

コレル家の力など何も必要ないだけの才能が十分にあつたのに、彼はその重い枷に引きずられながら生きていた。いつそのことコレル家の権力を笠に着るくらい凶太さがあればよかったのだろう。

ヤルノもまた、貴族でいるには優しすぎたのだ。

「俺にとってあの頃はただ楽しい毎日だつた。軍での生活は俺にあつていた。何より難しい事を考えずに上だけを目指せばよかった。でも、ヤルノには違つたのかもしれない。あいつの中で、何かが溜まつていくのがわかつていたのに、君という存在があいつを変えていくのに任せて、俺は見えないふりをしていた。もし俺がしっかり過去と向き合つてあいつと話をしていたら、あんな事故であいつが死ぬ事はなかったかもしれない。判つてはいる。あい

つは目の前で誰かが犠牲になるのを見殺しにしておけるような奴じやなかった。だが、もしあの竜種の暴走が起きたのがタンペレでは無かったら、そこが俺の故郷ではなく、あいつがこだわり続けている街でもなかったら、あいつはあんな無茶をしなかったかもしれない。あの頃、君はヤルノの死が自分のせいだと随分思いつめていた。けれど本当に責められるべきなのは俺だ。」

ライサは何も言わず、ただ首を振った。何度も、何度も。

「ヤルノが死んだあと、君が子供を産んでこの街に移り住んだと知ったとき、俺もここに帰ろうかずいぶん迷ったんだ。だが、やりかけた仕事を道半ばで放り出す事はしなかった。ヤルノが出来なかった分も俺が成し遂げるのが義務だと思った。それに、あの頃の俺はまだコレル家に対抗するための権力が十分になかったしな。7年かかったよ。副団長にまで這いあがって仲間の計画通り飛竜隊の改革を進めた。最後の仕事は、君も知っての通り辺境警備隊の再編だ。試験配備の候補地からタンペレを選んだのも俺だ。そのことでコレル家の注目が向いて君達が見つかってしまう可能性を考えて手は打ったんだが、あんなにも早く行動を移されるは思っていなかった。結局、その場を切り抜けるためとはいえ君の思いを傷つけるような行動をとってしまった。すまなかった。」

ライサがまた首を振った。

「助けていただきました。それで十分です。」

ライサの答えにイエリは苦笑した。この5日間、事情を知っているアランやアレクセイはもとより、未だに怒り心頭のミラから果てはティモや、初等学校のニーナにまで、散々「やりすぎだ」とか「後先考えろ」とか叱られ通しなのだ。その上20年以上前にして

かしたいたずらの事まで持ち出されて「あの頃からこうだった。」などと言われてはもうどうしようもない。今更ながら、母親の言っていた人が変わらない小さな街の怖さを、イエリは身をもって知ることになっていた。それなのに当のライサには感謝されてしまっている。

「あの日現場にいた人間には事情を話して誤解は解いておいた。コレル家の方にも俺の嘘ぐらい調べれば簡単に見破られてしまうだろうが、都で色々とはまわしてきた。今後、彼らがヤルノに干渉してくる事はないと思っ正しい。」

イエリは一息つく立ち上がって窓際まで行き、机の上に置いてあった水差しからグラスに水をついだ。まるで一日中水を飲んでいないかのようにのどが渴いていた。生ぬるい水を味わうようにゆっくりとグラスを傾けながら、ふと聞こえてきた人の声に下に目をやると、中庭で隊員達が午後の訓練の片づけをしているのがみえた。かすかに聞こえるざわめきの中に、時折笑い声が混じる。

晩夏の夕日に照らされた安らかな一日の終りの光景に、イエリは眼を細めた。どれだけ死に物狂いで働いても、人に頭を下げられるような地位を手に入れても得る事の出来なかったものがこの街にはある。自分の選択は間違っていない。

振り向いて机に軽く腰をかけると、イエリはライサを見下ろした。同じように夕日を受けたライサに向けて、自然な笑みを浮かべられていることをイエリは祈った。

「話が長くなったが、飛竜隊ですべき事をやりつくしてコレル家との方もついた今、俺にとって白騎士団副隊長の地位など何の意味もないものだ。警備隊再編は俺がまいた種だから最後まで見届けたいし、何より父やヤルノが命をかけたこの街を守るといいう長年の夢がかなう。俺にとってこの仕事はそれだけ価値のあるものだ。」

「
聡いライサの事だから、イエリが決してすべてを語ったわけではない事に気づいているかもしれない。だがアラン領主との取引も、コレル家にした復讐も、ヤルノとの最後の約束もこの先ライサに話す事はないだろう。卑怯と言われようとも、彼女に自分の歩んできた闇を見せたくなかった。彼女には明るい方だけを向いていてほしかった。」

「わかりました。話してくださってありがとうございます。」

どれだけ時間がたっただろう、イエリには途方もなく長く感じた沈黙の後、ライサから出た言葉はあっけないほど簡単だった。

「それだけか？」

「はい？」

思わずもれたイエリのつぶやきに、ライサは眉をあげた。

「いや。もつと怒られるかと思っていた。」

「貴方を怒る理由など何もないではないですか。」

「少なくとも数日前は、君は怒りたい様な顔をしていただろう？」

ライサの目が一瞬宙を泳いだ。それを見逃すイエリではない。

数日前、顔を合わせたのがあんな状況でなければ、間違いなくライサに怒鳴られていたという自信がある。昔のライサならここで言いくるめられてふくれっ面になっていたところだが、今の彼女は真

っ直ぐにイエリを見上げなおしてきた。

「あの時は誤解していました。貴方がこの街にいらっしやったのは、まだヤルノの事に囚われているからではないかと。私も長い間そうでしたから。貴方も同じようにあの指輪に囚われて、ご自分の人生を犠牲にしようとされているのではないかと思ったのです。でも、私の思い違いでした。話を聞いて貴方にとってこの街がどれだけ大切な場所なのか良くわかりました。そして、貴方ほどの警備隊隊長にふさわしい方はいらっしやらないです。」

先に視線を外したのはイエリの方だった。ゆっくりと首にかけている鎖をはずし、その先についていた銀の指輪を手のひらに乗せて見つめる。自分はライサの思っている様な出来た人間ではない。この指輪に囚われてないと本当に言えるだろうか。少なくとも、ヤルノと最後に交わした言葉がなければ、今イエリの心を占める感情は生まれなかったかもしれない。

「指輪、か。もし、俺がまだこの指輪に囚われていると話していたら、君はどうしていた？」

イエリと同じように指輪を見つめていたライサは、少し考えた後、眉を寄せてものすごく真面目な顔をした。

「貴方の友人の代わりに、一発殴っていたと思います。」
「なく……。っはは。」

なんとかライサらしい答えに、今度こそ耐えきれずイエリは嘖き出した。先日コレル家の護衛を黙らせた腕前からして、ライサに殴られればただでは済まないだろう。だが、彼女になら殴られてもいいかもしれない。一頻り笑った後、まだ込み上げてくる笑いを

何とか収めてイエリは机から離れた。

今ならなぜ、親友が彼女を選んだのかわかる気がする。

ただ真っ直ぐなのだ、彼女は。弱さも、間違いも受け入れて、折れてもまた真っ直ぐに伸びていけるのだ。だから焦がれるのだ、曲がつて生きてきた自分達は。見ていたいと思うのだ、あるがままの自分を見てくれる彼女の笑顔を。

イエリはライサの前まで来て跪くと、何事かと怪訝そうな顔をするライサの手に自分の持っていた指輪を握らせて彼女の顔を見上げた。

「それじゃあ、これを言ったらやはり君に殴られるのかな。正直に言つと、さっき話した理由はただの口実にすぎないんだ。本当のところ俺はずっと囚われ続けている。君の涙に。」

ライサの目が、大きく見開かれた。

「おかしいだろう。君の事は見習いの頃から知っていて、うまく飛べずにふくれっ面をしているところも、仲間と大騒ぎをして笑っているところも見えてきたのに、あの夜から君の泣き顔しか思い出せなくなった。ずっと心配だった。君がまた、あんな風に一人で泣いているのではないかと。だからもう一度君の笑顔が見たかった。君が笑顔でいられるものを全部守りたいと思った。俺がこの街に戻ってきた一番の理由は、ただそれだけだ。」

イエリの口から告げるつもりになかった言葉が、ただ自然に出てきた。それでも、口に出してしまえばこれが一番ライサに伝えたい事なのだとわかった。

「ヤルノの代わりになりたいわけじゃないし、なれるとも思っていない。殴られる覚悟もできている。けど、どうか君と一緒に

この街や君の大切なものを守っていくことを許してくれないか。」

今日最後の光が見つめるライサの顔に長い影を落としていた。

この街に戻ってきてから初めて、イエリはこの黄緑色の夕焼けがきれいだと思った。硝子瓶の中に閉じ込めたように静かで心地よいこの部屋の空気まで、懐かしい黄緑色で満たされている気がする。

イエリは片手を伸ばして、ライサの瞳からこぼれた一雫の涙をやさしくぬぐった。

「・・・ずるい。」

ようやくライサから洩れた言葉は予想していたどれとも違って、イエリはその手を止めた。

「ずるいです、そんな言い方。怒れないじゃないですか。」

ライサが泣き出しそうな頬笑みを見せた。イエリはその手をライサの頬から頭へと移すと、少し立ち上がって、まだ濡れている彼女の目もとにそっと口づけた。そしてライサの髪をくしゃっと撫ぜると、彼の親友なら見慣れていた違いのない、片方の口元だけをあげて、まるでいたずらが成功した少年のように笑った。

はからずしもそんな顔をしてしまったイエリが「やっぱり、誠意が足りないので殴らせてください。」と言われて口論になるのはその少し後のお話。

その日、ちょっとした用事で二階に上がってきたティモ班長は、

紳士で知られる自分達の隊長が応接室のドアに耳を押し当てて、何やらニヤニヤしながら盗み聴きをしている、というところでもない光景を目撃してしまったのだが、幸いにも彼は、秘密を自分の胸の内だけにしまっておくことができるという稀有な才能の持ち主だったため、黙って回れ右をしてこっそり廊下を戻って行ったのだった。

終章*

ヤルノは崖の上から草原に沈む夕日を眺めていた。家のすぐ裏手にある崖を上つてくると、小さなクリュエタの割れ目があつて天頂まで登らなくても向こう側の草原を見ることができ、ここはヤルノが母に教えてもらった秘密の場所だった。「青い森」の霧の向こうに見える夕焼けは、まるで世界を林檎酒の瓶のなかに入れてしまったような不思議な黄緑色をしていた。ヤルノにとっては見慣れたこの夕焼けの色もこの町を離れてしまつてはみることもできなくなる。王都の専修校へ進学が決まつてから、学校の帰りにここを上つてきて本を読み、夕日を見るのがヤルノの日課になっていた。普段は危ないといつていい顔をしない母親も今回はかりは黙認してくれている。

「にいちゃまー」

幼い声が聞こえ、ヤルノが下を見下ろすとひと組の人影が近付いてくるところだった。最近は何かと人のまねをしたがるヤルノの妹は、いつも自分は崖に上がれないと泣きべそをかいているのだが、今日は父親の肩の上に担がれて上機嫌の様だ。

「ヤルノ、夕飯だぞ。早く降りてこい。」

「おりいてこおい」

父親が笑いながら大きく手を振るのを見て、ヤルノはやつと今日は父が早上がりだから夕飯が早めになるといわれていたのを思い出した。

「すぐいくつ！」

慌てて周りにだしていた本をかばんに詰め込む。

ヤルノの父親はこの街の「西方飛竜隊」の隊長をしていて、いつも忙しいのかこの時間に家に帰ってくることは珍しい。ああ見えても西方最強の翼竜乗りなどと呼ばれる有名人なのだが、ヤルノとしてはこの呼び方には少し異議を唱えたい。

ヤルノの今の父親は、彼の母親が4年前に再婚した相手だ。周りにいわく「5年も粘ってやっと結婚してもらえた。」という義父は、もともと母親の上司で、しかもヤルノの本当の父親の親友という微妙な立場の人だったりする。生まれる前に父が亡くなり顔も知らないヤルノにとっては、父親という頼れる存在ができたのは素直にうれしいことだったが、世間でいう複雑な家庭事情といったところなのだろう、義父のほうは未だに家の中では母に頭が上がらないらしい。

要するに、西方最強の翼竜乗りは父ではなく、そんな父を尻にひく母のほうではないかと思うのだが、いかがなものだろうか？ とヤルノがきくと、当の義父も含めて大概の人が苦笑もしくは爆笑しながら賛同するので、ヤルノの推測は間違っていないと思う。とにかく、食事の時間に遅れて「真・西方最強」の母を怒らせるなんてもつてのほかだ。

急いでカバンを肩に担ぎもう一度崖の向こうを見ると、夕日がきらきらと宝石のように輝きながら青い森の向こうに姿を消すところだった。ふり返って夕日に背を向けると、眼下には早くも明かりがとり始めたはちみつ色の街並みが続いている。更にその向こうには今日最後の光を浴びながら輝く麦畑が広がっていた。ヤルノの

大好きな景色だ。

いつの頃からだろう、ただ憧れで翼竜乗りになりたいと夢見ていたのが、強くなるためにそうなりたいと確かな目標に変わったのは。竜騎士になるために王都の学校に入りたいとヤルノが言い出したとき、反対したのはいつも可愛がってくれる叔母夫婦の方で、両親はむしろ誇らしげに賛成してくれた。父が命をかけて守り、母と義父が今も守り続けているこの街を、自分も同じように守れるようになりたい。立派な竜騎士になってこの街へ帰ってくる。絶対に。

慣れた様子で崖を降り始めたヤルノの胸元で、鎖にかかった二つの指輪がぶつかって澄んだ音を立てた。

> i 2 5 7 6 0 — 1 4 3 7 <

終章*（後書き）

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

つたない文章に、お気に入り登録をしてくださった方、評価をしてくださった方、亀より遅い更新に最後までお付き合いいただいた方々、知らない方が自分の書いた話を読んでいただけたというのが、こんなに嬉しい事だとは知りませんでした。 本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5761m/>

指輪 黎界のノマド another story

2011年6月16日13時02分発行